平成26年10月1日発行第11巻第5号通巻91号

二次元ドリームマガジン

2D DREAM MAGAZINE

cover illustration by ちょびぺろ

成年向け雑誌

定価1080円

今号の特集

水中で犯されちゃうヒロイン

水中姦

カラーピンナップ

うるし原智志

ぼっしい

ヴッチャ／ちょびぺろ

連載&読み切り小説

新連載

『爆乳バニー宇佐美マリア』

山本沙姫×こうきくう

上田ながの×A.S.ヘルメス

ナるカく×牡丹

壱状什×しまちょ

ヤミヨ×トブロッキィ

天草白×ちょびぺろ

えっちマンガ&4コママンガ

新連載

『魔法少女 巴』

ひぐちいさみ

楠木りん

原作:Anime LILITH

天海雪乃

MISS BLACK

ぱふぇ

おおたたけし

阿部いのり

嘉納あいら

新感覚の食コラム

高遠るいの

戦乙女のグルメ

連載開始！

立ち読み版

表紙&ピンナップテレホンカード

応募者全員サービス

vol.78

2014 10

二次元
ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE

凛々しき女海賊は、
大海原の怪物の餌食となる！
女海賊
ユージニア
海中の触手姦
小説 NOVEL／天草白（あまくさしろ）
挿絵 ILLUSTRATION／ちょびぺろ

ユージニア・ドレイクは海賊船の穂先に颯爽と立ち、吹きつける潮風を心地よく浴びていた。
背中まである黄金の髪に青い瞳。
妙齢の可憐な美貌に一見不釣り合いとも思える髑髏のマーク入りの黒い三角帽子は、彼女がこの海賊船の船長である証だ。
すらりとした長身に黒いガウンをまとい、豊かな胸元やむっちりした腰回りを惜しげもなく晒すように上下のビキニを身に着けている。
「船長、気を付けてくださいよ。この辺には『出る』って話ですぜ」
副長のゲルティスが背後から話しかけてきた。
「出る？」
「バケモノですよ、バケモノ。とんでもなくデカいタコだって話です。特に人間の女が大好物で、たっぷりいたぶって最後には食っちまうとか……」
「ふん、バケモノが怖くて海賊なんてやってられないよ。もしもそんなバケモノが出たら、このあたしが三枚におろして魚のエサにしてやるさ」
怯えた顔の副長にユージニアが豪放に言い放つ。そのとき視界の先に小さな船影を捉えた。
――獲物だ。
「全速前進ようそろ！　総員、戦闘態勢！」
ユージニアは二重に巻いた腰のベルトから細剣を抜き放ち、凛とした声を響かせる。
副長を始め、配下である荒くれ者の男たちがいっせいに獰猛な表情に変わった。操舵士が船を加速させ、前方の獲物に向かっていく。
その船が高々と掲げているのは剣と蛇が絡み合ったような紋様――ラトゥール帝国の国旗。どうやら国営の貨物船のようだ。
「ふん、悪名高いラトゥールの船じゃないか」
ユージニアは不敵な笑みを浮かべた。
ラトゥール帝国は庶民に重税を課し、一部の貴族だけが私腹を肥やしていると聞く。
そんな連中の富を奪うことになんの躊躇もない。むしろ彼らから略奪することで、いくらかでも市場に還元できることだろう。
「せ、船長……相手はラトゥールですぜ。さすがに手を出すのは……」
「相手が誰だろうと関係ない」
副長の怯えたような進言を女海賊は一蹴した。むしろ悪徳帝国の船だからこそ、ますます奪ってやりたくなる。
「ボーディング、行くよ！　野郎ども、あたしについてこい！」
みるみるうちに敵船に肉薄すると、ユージニアの指揮の下、荒くれ者の部下たちが鉤付きの網を投げつけて接舷した。
手に手にカトラスと呼ばれる曲刀を携え、雄たけびを上げて敵船に乗り込んでいく。いわゆるボーディングだ。
たちまち相手の船上は阿鼻叫喚飛び交う戦場と化した。
もちろんユージニア自身も相手の船に飛び移り、荒くれ男たちの先頭に立って甲板を駆け抜ける。
「ま、まさか、こいつらが噂の――!?」
「《略奪者》ユージニア・ドレイクか!?　賞金額が一億ガウを超えたっていう――」
「噂になってるなんて光栄だねぇ！　そう、あたしがそのユージニアさ！」
戦く相手の船員たちに向かって、ユージニアの剣が雷光の勢いで閃いた。
一閃、二閃、三閃――剣が翻るたびに血しぶきが飛び、男たちが倒れる。華麗にして壮烈。激しく揺れる船上で、その足捌きと剣捌きはまったく乱れない。
「き、貴様らぁっ……！　我々は栄光あるラトゥール帝国の者だぞ！　こんなことをしてタダで済むと思っているのか！」
相手の船長らしき壮年の男が船室から現れて怒鳴った。大方、帝国の威光を出せば、相手がおとなしく退くとでも思ったのだろう。
「ふん、権威にすがることしかできない情けない男だね」
ユージニアが口の端を歪めて吐き捨てる。彼女が一番嫌いなタイプの男だ。
「生憎、あたしらは海賊でね。相手が世界の三分の一を版図にしている大帝国ラトゥールだろうと遠慮なんてしないのさ」
「な、なんだと……」
「命知らずこそが海賊の性分だよ。それに、あんたらみたいな悪の帝国から略奪するのは気分がいいからねぇ」
凛々しい美貌に勝ち気な笑みを浮かべて言い放つユージニア。
「縛り首だ……貴様ら全員、本国に戻ったらこのことは報告するからな！　絶対に許さ――」
「あんたが本国に戻ることはない」
男の言葉を遮り、ユージニアが無造作に細剣を振るう。雷光の一閃が、あっけなく船長の首を両断した。驚いた表情のまま生首が中空に飛ぶ。
相手の船員たちがあらためて悲鳴を上げた。周囲を見渡せば、船員の大半が斬り伏せられ、残りの者も投降状態だ。
どうやら大勢は決したようだった。音に聞こえたラトゥール帝国の船といえど、一騎当千の猛者が集うユージニア一味の敵ではない。
「ふん、手ごたえのない。お宝はまとめてあたしたちが頂くよ！」
ユージニアが威勢よく叫んだそのときだった。
船が、大きく揺れる。

著者近況　久しぶりのニジマガ作品は女海賊ものになります。新刊のほうはリアルドリーム文庫『秘蜜サークル　昼下がりの淫らな人妻たち』が発売中なので、こちらもよろしくお願いします。次の新作も鋭意執筆中です～！

ズガァァァッ！

すさまじい音響とともに、甲板の一部が吹き飛び、木片が周囲に弾け飛ぶ。

「な、なんだ!?」

さすがのユージニアも訝しげに眉を顰める。

「グゥオォォォォォォォンッ……！」

咆哮が響き渡った。甲板を下から貫き、丸太のように太い触手が何本も現れる。

船底に穴が開いたのか、みるみるうちに甲板に水があふれていった。巨大な何かが船に取りつこうとしている——。

「まさかこれがゲルティスの言ってた……!?」

ユージニアがハッと叫ぶ。船が半ばから真っ二つに割れ、その向こうから大タコの姿が見えた。

体長は、おそらく二十メートルはあるだろうか。まさしくバケモノだ。

タコが海中から甲板に向かって何本もの触手を伸ばしてきた。

「うわぁぁぁっ……」

悲鳴とともに、何人もの船員や部下たちが触手につかまり、海中に引きずり込まれる。次の瞬間、海面に赤い鮮血が広がっていった。

「お、おい、お前たち！」

捕食されている——大事な部下を一瞬にして何人も失い、ユージニアの顔から血の気が引いた。

さらに、戦慄する彼女の下にも触手がウネウネとのたくりながら向かってくる。

「このっ……」

だが、ユージニアとて女の身で伊達に海賊船の船長などしていない。

すぐに気を取り直し、空中をのたくりながら迫る触手に得意の剣を叩きつけた。

ずびゅっ！

精液を連想させる白濁色の体液をまき散らしながら、触手の一本が半ばから断ち切られる。

「グゥオォォォォォォォンッ！」

大ダコが怒りの咆哮を上げた。

さらに二本、三本、と続けざまに触手がユージニアに殺到する。

「無駄だっ」

が、彼女の剣捌きは触手の速度をはるかに上回っていた。斬り下ろし、薙ぎ払い、細身の剣が雷速で旋回する。

気味の悪い体液をこぼしながら、殺到した触手はことごとく両断された。

「野郎ども、引き上げるよ！　お宝は最低限持っていけばいい。船に戻るんだ！」

ユージニアは剣を中空で振って刀身にこびりついた体液を飛ばしながら、部下たちに号令した。

「で、でも船長——」

「こいつはあたしが引きつける。その間に早く！」

言いながら、さらに迫ってきた触手をなんなく斬り伏せるユージニア。

大ダコの出現に怯えていた部下たちも、勇壮な女海賊の言葉にハッと我に返った。

船倉から貨物を運び出し、接舷された自分たちの船へと戻っていく。

その間、ユージニアは手近の触手を片っ端から切り裂き、部下たちが撤退する援護に徹した。

「ちいっ、さすがに数が多い！」

だが、あと少しだ。

「終わりました！　船長も早く！」

最後に海賊船に戻った副長のゲルティスが、こっちに向かって手招きする。

「分かった、今行く——」

言って、ユージニアは四方から迫っていた触手に剣を叩きつけた。

後は、この海域から全速で離脱するだけだ。

（まったく、噂の大ダコがこんなに厄介なモンスターだとは……ひどい目に遭ったよ）

内心で舌打ちしたそのとき、手元に妙な感触が伝わってきた。

「……えっ!?」

剣は柔らかな触手に威力を吸収され、半ばで止まっていた。肉に咥えこまれてビクともしない。

「し、しまった」

慌てて引き抜こうとしたところで、別の触手が襲いかかった。

「きゃぁぁぁぁぁっ……!?」

まず両腕に触手が巻きつき、剣から手が離れる。さらに両足にも絡みついてきた。そのまま甲板から海中に向かって引きずりおろされる。

「船長！」

叫んでこちらに手を伸ばすゲルティス副長の姿を視界の端に捉えながら、ユージニアの体は触手に拘束されたまま、さらに引きずられ——そのまま海面に落下した。

「くううっ、は、放せぇっ……」

海の中に腰まで浸かりながら、ユージニアは両足を必死でばたつかせ、それ以上体が沈んでいくのを阻止する。

タコの触手はヌルヌルとしていて気味が悪かった。しかも吸盤が肌に吸いついて、簡単には拘束を解けそうにない。

腰に這い回る触手が先端部を水着のボトムに引っかけ、ずり下ろしてくる。

「ああっ、やめろぉっ……！」

今にも肉づきの薄いクレヴァスが見えてしまいそうなほど、薄いボトムを引き下ろされた。

「このぉっ……あたしは女海賊ユージニア・ドレイクだぞっ……こんなバケモノなんかにっ」

女としての羞恥を海賊としての矜持で抑えこみ、

著者近刊　『秘蜜サークル　昼下がりの淫らな人妻たち』『魅惑の楽園マンション　若妻と熟れ妻たち』『恥辱の風習　捧げられた新妻』『ご褒美は柔肌で　憧れの幼なじみは生徒会長』『灼光のアンチジェネシス』1～2巻　好評発売中！

ユージニアは四肢に渾身の力を込めて、触手を振りほどこうとした。
が、四肢にしっかりと絡みついた触手群はビクともしない。
しかも臍の上辺りまで海面に浸かっているため、下半身を上手く動かすことさえできなかった。
おまけに黒いガウンが水を吸って重くなり、体を動かすのを邪魔している。
さすがの女海賊も、容易には触手を振りほどけそうになかった。
（こんなバケモノに、このあたしが――）
さらに触手の一本が胸元にまとわりついたかと思うと、右乳房の裾野からまくるようにして水着のトップスを無遠慮にずり上げた。
「あああっ……！」
ぷるん、と形のよい右乳房が震えながら飛び出す。海水に濡れて妖しい光沢を放つ美しいバストが陽光の下に晒された。
周囲の肌に比べても一際白く、雪のように清らかな色合いの乳肌。
瑞々しい張りを誇る乳丘は女海賊の動きに合わせてプルプルと揺れ、頂上部に息づく乳首や乳輪は楚々とした薄桃色だ。
「おおっ、すげぇ……！」
沈みゆく船の甲板で触手と格闘している部下たちが思わずといった感じで視線を向けてきた。
「お、おい、お前たち……何見てるんだっ……！」
さすがの女海賊も頬を羞恥に染め、かすれた声で叫んだ。
無遠慮な視線が、モロ出しになった右の乳房や、半分がた引きずりおろされた水着のボトムから今にも見えそうな秘所に熱く注がれている。
普段は部下として顎で使っている男たちに、欲情の籠もった視線を浴びせられて全身が熱くなった。
見られている――久しく感じていなかった、自分が女として見られる視線。
部下たちにとって今のユージニアは勇壮な海賊船長ではなく、艶めかしい痴態を晒そうとしている一人の女なのだ。
「砲手、早く砲門を……こいつに向けて！　ありったけの鉛玉を……ごぼっ……この不愉快なバケモノに……ぐっ、お見舞いしてやるんだ！」
ユージニアは時折口の中に入ってくる海水にむせながら、船に向かって叫んだ。
「り、了解！　おい、お前たち！」
副長のゲルティスがうなずき、部下たちに指示を下す。彼女の痴態に見とれていた部下たちもさすがに我に返ったのか、それぞれ配置についた。
海賊船の右側に備え付けられた十五の砲門がいっせいに大ダコに向く。
（頼むぞ、お前たち――）
誤爆してユージニアに大砲が当たる可能性もあるが、砲手たちの腕は確かだ。
数々の修羅場を一緒にくぐり抜けてきた彼らの腕を、ユージニアは信頼していた。
「撃てぇっ！」
ユージニアの号令とともに、
ゴオオォォォォォォォォォンッ！
十五の大砲が一斉に火を噴いた。爆炎と轟音が周囲に鳴り響く。
「くううっ……」
爆風が全身に吹きつけ、体中がバラバラになるような衝撃を感じた。
砲手の狙いはよく、十五発すべてが大ダコに命中したようだ。
「これなら――」
モンスターの爆死を確信し、ユージニアはニヤリと笑って前方を見据える。
その瞳が次の瞬間、驚愕に見開かれた。
あれだけの砲撃を受けながら大ダコは無傷だ。どうやらヌメリの強い体表が砲弾をすべて受け流してしまったらしい。
「そんな……ううっ!?」
愕然と呻いた瞬間、大ダコが触手をうねらせながら、ユージニアをさらに海中深くへ引きずり込もうとしてきた。
腰まで海に浸かった状態では踏ん張ることなど不可能だ。
あっと思ったときには、派手な水しぶきを上げて完全に海の中に引きこまれてしまった。
「んぐぐ、ごぼぉぉ……」
海水が絶え間なく口内に入ってきて、濁った声を漏らしてしまう。
息が続かず、体中に力が入らなかった。
抵抗する力が弱まったことを見透かしたように、触手が蠢く。
「っ……！　ごぼ、ぼぉ……」
胸元に絡みついている触手は水着のトップスを完全にむしり取ってしまい、お椀型の美しい乳房をあらわにする。
海中で柔らかな乳丘がぷるんと揺れた。その周囲におぞましい触手が巻きつき、まるで愛撫するようにギュウギュウと絞ってくる。
「ん、ぐぅ……んんっ……」
拒絶の言葉は海中のために出てこず、代わりに水泡が漏れただけ。
両腕を高々と掲げさせられた格好なので、触手を防ぐこともできない。
ヌルヌルとした触手の先端部で乳首を軽く撫でられる。ぴりっ、と敏感な乳首に痺れるような刺激が走った。
決して乱暴ではない、怪物らしからぬ繊細な愛撫。

完全無欠（でも恥ずかしがり屋）の
美少女探偵が颯爽登場!!
豊満な美体をバニー衣装に包み
オカルト事件の解決に挑む!
爆乳バニー
宇佐美マリア
美艶探偵の怪淫事件簿
第一話 淫獄のマジックショー
小説 NOVEL 山本沙姫（やまもとさき）
挿絵 ILLUSTRATION こうきくう

カリ……カリ……カリリ……。

シンと静まった畳敷きの大広間に、不気味な摩擦音が微かに響く。まるで聞く者の耳から入り込み、脳に得体の知れない不安を刻み込むかのように。

「こっ、こここの壁です！　この壁から、この壁から奇妙な音が……」

そこへ。異様に上擦った声で話しながら、初老の男が一人の女性を案内してきた。髪の薄い頭頂部に汗を滲ませた、身長百八十センチ近くはある大男は、今彼らがいる建てられたばかりの大屋敷の世帯主。

ベテラン与党議員の久川武。

国会で、答弁中の野党議員を厳つい表情で睨み、ドスの利いた声で口汚く罵ることで有名な彼は、議員仲間や一部マスコミから政界一の豪傑などと持て囃されている、大物政治家である。

しかし背筋を曲げて縮こまり、青ざめた顔を引き攣らせた今の姿には、普段の力強さは微塵もない。

まるで、ヘビに睨まれて怯えるカエルのよう。

「なるほど、ここですか……」

一方、彼に連れられてきた、スッときれいに鼻筋の通った端正な顔立ちの、知的な雰囲気を醸し出す二十代前半の若き美女は対照的な態度を見せている。

身の丈百七十センチ弱の背筋をピンと伸ばしてゆっくりと歩く凛々しい立ち居振る舞いからは、謎の現象に動じている様子はまるで感じられない。

異音の出どころである壁の前で、背中まで届く長く柔らかい金髪を軽く揺らしてしゃがみ込み、真紅の瞳をゆっくりと閉じる。

「……では、さっそく調べてみます」

そして、真っ赤なタンクトップに覆われた九十センチオーバーの爆乳の谷間に挟んだ銀色のロザリオを取り出し、壁に当ててゆっくりと表面をなぞりはじめた。

「……んっ！　ここと……ここも、これは……酷い」

細くしなやかな指先を時折止めるたびに意味ありげに呟き、眉間に皺が寄り、長いまつ毛がピクリと揺れる。

「なっ、何かわかりましたか先生？」

普段は先生と呼ばれる立場の大物政治家が逆にそう呼ぶ美女は、百万部超えのヒット作を何本も生み出している超有名オカルト小説家。

名を、宇佐美マリアという。

「……なるほど。これは今すぐに対処しないと大変なことになるわ！」

一通り壁を撫で終わると、彼女はルビーのように赤い瞳を〝カッ〟と見開いて立ち上がる。勢いに釣られて、黒いホットパンツに覆われた柔らかな桃尻が、大きくプルンと波打った。

「や、やはり悪霊が壁の中に……おっ、お願いです！　どうか、どうかお祓いを……」

得体の知れない影に怯える白髪頭の大男がすがる美貌の小説家には、知る人ぞ知る別の顔がある。

怪奇、超常現象に絡んだ事件を調査し、スバリ解決するオカルト探偵、それが彼女のもう一つの顔だ。

とはいえ、別に自らその看板を掲げているわけではない。

霊に憑りつかれているかもしれない、と相談してきたとあるファンの悩みを解決した。というただそれだけの話に尾ひれがつき、いつしか奇妙な現象の調査解決依頼が頻繁に来るようになったのである。

「その前に久川さん、念のために確認しますけど、先ほど書いた誓約書のこと、忘れていませんね？」

ロザリオを胸の谷間にしまい込みながら、マリアは鋭い視線を依頼人に向けつつややきつい口調で問いかけた。

「も、もちろん……約束は守る。だっ、だから早く悪霊を追い払ってくれ！」

「……わかりました。では、この音を今すぐに止めてみせます……」

拝むように両手を合わせて何度も頭を下げ、上擦った声で懇願する依頼人に余裕の笑みを浮かべて答えると、美貌の探偵は胸の谷間へ左手を突っ込む。

「……ん、あったあった。それっ！」

そして軽く中を弄ると、長さ一メートルほどの大金槌を引きずり出した。

無論、普通に考えれば収まりきる大きさではない。

「なっ、なんでそんなものが……胸の、中に？」

目の前で唐突に起きた常識はずれの事態が飲み込めず、豪傑政治家は思わず素っ頓狂な声を上げる。

「そりゃもちろん、この超振動ハンマーを作ったのがわたしだからに決まっているじゃない。わたしの科学力に不可能はないわ」

不敵な笑みを浮かべて答えるオカルト作家にして怪奇事件調査のエキスパートという異色の美女には、さらにもう一つの顔があった。

人並み外れた科学知識を駆使して生み出した発明品で数々の特許を持つ、通称、二十一世紀の発明王という顔が。

「よく、わかりませんが……そんな物騒なものでどうやって悪霊退治を？　もっとこう、さっきのロザリオみたいな神秘的な道具を使うかと……」

「神秘的？　あれは超音波で壁の中を調べる探査機よ。十字架型なのは、まあその方がカッコイイからってだけ。そして……」

不安げな表情で問いかけてくる久川を尻目に、マリアはハンマーヘッドを高々と掲げる。そして一気に振り下ろした。

ブウンッ！　バゴォッ！

「なっ、何をするんですかっ⁉　宇佐美先生っ‼」

甲高い風切音が響いた瞬間、重厚な漆塗りの木壁が木端微塵に吹き飛ぶ。ハンマーの重さに加え、先端が高速振動することで生み出される破壊力がある

からこそ成し得る技だ。
「奇妙な音がする原因はこれよ！」
凛々しい口調で言い放ちつつサッと指差した先には、散らばる木っ片に混じり、無数の白い虫が蠢く。
「こ、これは……シロアリ？」
「そ、奇妙な音がする木造建築って、だいたいこいつらの仕業なのよ。それにしても新築でこんなに住み着いているってことは、かなり資材費ケチってロクでもない木材使ったんじゃないかしら」
家屋の天敵の異常な繁殖ぶりを冷静に分析しつつ、マリアはハンマーを胸に押し込むと、何かを探して再び谷間の中を弄る。
「そ、そうでしたか……いやーよかった。悪霊の仕業じゃなくて……」
「所詮、超常現象なんてものはすべて科学で説明できるものなのよ」
祟られていないと知るやいなやホッと胸を撫で下ろす依頼人に、美貌の名探偵はオカルト作家らしからぬことを言い放つ。
とはいえ、雑誌のインタビューや時折あるテレビ出演などで、しょっちゅう超常現象の類を否定している彼女だけに、決して珍しい発言ではない。
一見愛読者に対する裏切り行為にも見えるが、ファンからはネタだろうと思われているのである。
「壁の修理は業者に頼んでくださいね、それじゃお支払いよろしくー。なるべく小切手より現金でね」
やがて爆乳の奥から取り出した一枚の紙切れを、彼女は満面の笑みを浮かべて依頼人に差し出した。
「あ、はいはい……なっ！　なんなんだこれはっ！」
しかしそれを目にした途端、久川は目尻をキッと吊り上げ顔を真っ赤に染める。
『家屋のトラブル調査解決費用として、金一千万円請求いたします』
突き付けられた請求書にはそう書き記されていた。
「たっ、ただのシロアリ退治にいっ、一千万だとおっ！　何がオカルト事件専門の名探偵だっ！　この詐欺師めっ！」
「あら、わたしは悪霊とか一言も言っていませんよ。その請求書やさっき書いてもらった誓約書にも、そんな常識はずれな記述はどこにもありませんし」
いきり立つ老政治家に不思議そうに首を傾げて告げると、マリアは胸の谷間からさらに一枚の紙切れを取り出し、彼の目の前でヒラヒラさせる。
署名捺印された誓約書に記述されていたのは『依頼人久川武は、家屋に発生した異常の調査解決に際し、発生した損害のすべてを不問とし、解決後に示された報酬の額に一切異を唱えません』との一文。
悪霊退治などといった、オカルトめいた文言は一切ない。
「だっ！　黙れえっ！　人の家を壊して金を取るなんて、そんな非常識なことが許されるか！」
堪忍袋の緒が切れた大男は、頭から湯気を出して請求書をビリビリと破きはじめる。
ダンッ！
すると突然、鋭い音を立てて襖が勢いよく開く。
「はーい、そこまで。お取込み中のところ、ちょっと～失礼しますよ～」
やけにおちゃらけた口調で呼びかけながら、グレーのスーツを着た髭面の中年男が和室に上がり、二人の間に割って入った。
「なっ、なんだ貴様⁉　人の家に勝手に上がり込んで」
「警視庁の大滝（おおたき）です。久川さん、ちょっとあなたに用がありまして……」
威圧的な態度で詰め寄る久川に動じることなく、乱入者は懐から取り出した警察手帳を開いて見せた。
「警察か！　ならちょうどいい、その女をすぐに逮捕してくれ。こやつ、わしの家を壊したばかりか金まで要求しよって……」
「残念ですがねぇ久川さん。我々が迎えに来たのはこの人じゃないんですよ。はい、請求書」
マリアを指差してまくしたてる怒りの大男に不敵な笑みを浮かべて答えると、大滝は上着のポケットから取り出した一枚の紙切れを差し出す。
「たっ！　逮捕状⁉⁉」
「そう。あんたがこの前の総選挙で親族企業の取引先に圧力をかけて、強引に票のとりまとめをさせていたのはお見通しってぇわけよ。あと、あんたを追っていた新聞記者の変死事件への関与もね」
まるで時代劇の岡っ引きの如くぶっきらぼうな言い回しで、髭面男はからかうように答えた。
「変死？　なーるほど、政界の豪傑なんて言われている気の強い人がいもしない霊にあーんなに怯えていたのは、そういうことだったのね」
傍らで聞いていた美貌の探偵が、胸元で腕を組みうんうんと頷きながら茶々を入れる。
「ふっ、ふざけるなっ！　家を壊された上になんで逮捕までされなきゃいかんのだっ！」
「はいはい、言い訳は署で聞かせてもらいますよ」
往生際の悪い悪徳政治家は、遅れて入ってきた若い刑事に手錠を打たれると、脇を抱えられて引きずられるように大広間から連れ出される。
「はっ、放せえっ！　わしにこんなことしてただで済むと思っているのかあっ！」
「それじゃあ久川さん、新しい請求書はご家族に回しておきますね～。ごきげんよう～……さて」
ダダっ子のように暴れまわる哀れな容疑者に手を振って見送ると、マリアは大滝に目を向けた。
「まったく、まーたわたしが調査してるところに来て依頼人を逮捕していくなんて、今回も偶然だというの？　大滝さん」
「ええもちろん、単なる偶然ですよ宇佐美先生」

著者近況　「サンディナイトショウ」でデビューしてはや十年。ついに本誌連載の座を獲得いたしました。すべて毎回ご助力頂いております編集さんにイラストレーターさん。そして応援いただいております読者の皆様のおかげです。ありがとうございます。「アシスタントの存在もわすれるでないウサ」

親子ほど歳の差のある美人作家に敬語を使う中年警部は、元々彼女の大ファン。

あるとき、マリアが大企業社長宅の怪奇現象を調査しているところへ家宅捜索に踏み込んできて以来、不思議とよく出会う顔なじみになっていた。

「それで、部下を先に帰らせるなんて、何かわけがあるみたいね」

「それはー、先生のナイスバディを拝むために決まってるじゃないですか」

心の奥を見透かすような鋭い視線に臆することなく、大滝は目尻をだらしなく下げつつ警視庁の警部にあるまじき発言を飛ばす。

「ち、ちょっと！　警察の人間がそんなセクハラしていいわけ！」

中年男の舐めるような視線に柔肌が鳥肌立ち、両手を素早く交差させて胸元を隠す。

手足に胸元を剥き出した露出度の高い服を着ているが、彼女は動きにくい服装が極端に嫌いなだけで、肉感的なボディをひけらかしたいわけではない。

むしろ、異性にジロジロ見られるのが苦手な恥ずかしがり屋なのだ。

「はっはっはっ、冗談はさておき……実は……今手掛けている事件にオカルトじみたことがありまして、宇佐美先生の力をお借りしたいと……」

若い娘をからかうスケベなおじさんのだらしない顔から一変して、キリリと引き締まった表情になると大滝は真面目な口調で本題に入る。

「オカルトじみた事件？ そんなの科捜研の力を借りれば一発で解決できるでしょ？」

いかにオカルト小説好きとはいえ、かりにも警視庁の警部が怪奇事件の調査依頼とは腑に落ちず、美貌の探偵科学者は首を傾げた。

「だといいんですが、その科捜研ですらお手上げの状態でして……」

「……科学捜査のプロにも手におえない難題を一般人に頼むとは只事じゃないわね。ここじゃなんだから、事務所で話を聞かせてもらおうかしら」

彼の話ぶりから、何やら只ならぬものを感じたマリアの真紅の瞳がキラリと光った。

超高層ビルが立ち並ぶ、とあるビジネス街。その一角に埋もれた築三十年の薄汚れた五階建てのビルが、宇佐美マリアの事務所兼住宅である。

両親が残した唯一の遺産で、そこには彼女のほかに入居者はなく、事務所以外の部屋はすべて倉庫などになっていて、中を窺い知る者はほとんどいない。

「……しかし、こう言ってはなんですがあいかわらず殺風景な部屋ですな。なんかこう、若いお嬢さんに似合う華やかさがあってもいいような……」

黒光りする革張りのソファーに腰を下ろした大滝が、室内を見回しつつ愛想笑いを浮かべた。

壁際に並んだ本棚には自著やほかの作家が書いた小説に混じり様々な学術書が隙間なくギッシリと詰まっている。さらに、そこかしこに作りかけの機械装置が散乱していて、まるで何かの研究室のよう。

窓際に置かれた、温泉街の射的場で取ってきた二匹のウサギのぬいぐるみだけが、かろうじて女の子の部屋らしい可愛らしさを醸し出していた。

「大きなお世話よ。わたしはこういう部屋が気に入っているんだから」

失礼な客人の言葉に、美貌の家主は口を尖らせて不満を漏らす。

「そうだよ、マリア先生の趣味にケチつけるなんて失礼な……で、今日はなんの用で来たの？」

するとそこへ、眉間に皺を寄せたあからさまに不機嫌な表情を浮かべた男があらわれ、ティーカップの載ったお盆を〝カシャン〟と雑にテーブルに置く。

痩せ形で小柄な体躯に、ボサボサ頭で幼い顔つき。服装も青いTシャツにジーンズという十代の少年と見紛いそうな風貌の彼の名は、漁火空也（いさりびくうや）。

マリアの身の回りの世話から、怪奇事件調査のサポートまでこなす、働き者のアシスタントである。

「まったく、子供のころはおじちゃんおじちゃんって懐いて可愛かったのにどうしてこんなヒネた子に……我が姉は子育てを間違えたのだろうか……」

彼のつっけんどんな態度を見るやいなや、顔をしかめた大滝は懐からハンカチを取り出し、わざとらしく目元を拭う。

「ちょっと、いつまでも子供扱いするのやめてくんない。あと母さんのこと悪く言うのも禁止！」

カップをお盆から取り分けながら、空也は憎まれ口を叩く。

そう、二人は叔父と甥の関係なのである。

「はいはい、なかよし親族コントはそれぐらいにして、いい加減に本題に入ってくれないかしら？」

「おっと、そうでした。実は、この男のことで……」

慌ててハンカチをしまうと、キリリと引き締まった表情に変わった中年警部は一枚の写真を差し出す。

そこには、黒のタキシードを纏った長い茶髪の優男の姿が写されていた。

「……見たことない顔ね、誰なの？」

「神山正一（かみやましょういち）。シャドー神山の芸名で活動している、今人気のマジシャンです」

「マリア先生知らないんですか？　空中に浮いたり投げたトランプを自在に操ったり、すごい手品やる人ですよ。キザで二枚目なのがいけ好かないけど」

科学と読書とウサギにしか興味がないせいで、流行に疎い美貌の天才作家にお調子者のアシスタントは得意げに解説する。

彼にとってマリアは雇い主であるとともに想いを寄せる愛しい女性でもあるのだから、いい格好を見せたくなるのも無理はない。

著者近刊　『お姫さまといっしょ　どきどき同棲ライフ』『お嬢さまといっしょ　麗華とミリアとママいいとこどり』『らぶおん湯っくりしていってね』『らぶせん　風紀委員長とヤンデレ娘？』『コスって！ 声優しすたーず』　好評発売中！

当の雇い主は知る由もないが。
「ふーん、マジシャンねぇ。で、この人が何か？まさか魔術で誰かを呪い殺している、なんて話じゃないでしょうね」
空也の話を軽く聞き流しつつ、マリアは冷めた目をして大滝に問いかけた。
科学万能主義の彼女にとって、仕掛けがあるのがわかりきっているマジックは、相談が寄せられる眉唾ものの怪奇事件以上に退屈なものでしかない。
「それが、彼のアシスタントを務めた若い女性が次々と行方不明になるという事件が発生しまして」
「それって、ただの失踪か誘拐事件じゃないの？ならわたしの出る幕はないと思うけど……」
科捜研をも悩ませる怪奇事件。そう言っていた割には何も不思議な要素が見当たらない話が出てきて拍子抜けの美貌の名探偵は、思わず首を傾げる。
「ええ、まあ……それなら先生のお手を煩わせることもないんですが、事件が意外な方向に発展しまして……」
「もったいぶらずに話してよ。まったく昔からそうなんだから……」
妙に遠回しな言い方をする叔父を急かしつつ、空也はマリアの隣に座って身を乗り出す。
「……別件で家宅捜索をした暴力団事務所で、その行方不明者の一人が見つかったのですが、これが少々奇妙なところがありまして……」
紅茶を一口飲み、一呼吸置いてから大滝は話をはじめる。
「奇妙なところ？」
「朦朧とした状態の被害者が発見されたとき、全身……その……精液、まみれで鎖に繋がれていたので、監禁陵辱事件だろうとは思ったのですが……」
（……なるほどね、そういうわけか……）
協力を仰ぎながら妙に歯切れの悪い話し方をするのは、若い女性が強姦された事件なので一応自分に対して気を使っているのだろうと見て取れた。
「ただの監禁陵辱事件？　どこにわたしの科学力を行使する必要があるのかしら？」
大滝が話しやすいように、やや横柄な態度で気にかけていないように見せかけると、マリアは紅茶を一口飲む。
「被害者の身体に付着していた精液から人間以外のDNAが検出されたのです。それも、科捜研の膨大なデータベースにあるどの生物とも一致しないものが……」
「！」
ようやく出てきた奇怪な話に、名探偵の目尻がピクリと震える。
「その上取り調べ中の容疑者が、全員一斉にこん睡状態に陥って、一週間たっても未だに目覚めないままなのです。まるで魂が抜けたように……」
「……なるほど、確かにただの誘拐や監禁事件ではなさそうね。いいわ、この件お引き受けしましょう」
話を一通り聞き終えると、マリアは紅茶を飲み干し、空になったカップを空也に渡す。
「で、わたしはどう調査すればいいのかしら？」
「空也と一緒に、神山の専用劇場に彼のアシスタントとして潜入してもらいます。ショーに出られるようにする手配はこちらでしますので……」
「え、お、おいらも？」
「お前は宇佐美先生の優秀なアシスタントだろう？しっかりサポートするんだぞ」
（まったく、バレバレよ……）
一見、優秀な甥っ子をあてにしている優しい叔父の姿のようだが、マリアの鋭い目はその内心をしっかり見透かしていた。
空也の仕事の一つに、怪奇事件の依頼人が高額な依頼料を吹っ掛けるべき悪人であるかどうか調査する、というものがある。
しかし、その際に得た情報を、報酬と引き換えに大滝に横流ししているのは、いつも怪奇事件の調査中に彼が依頼人を逮捕しに来ることから薄々感づいていた。
今回も、したたかな警部は甥っ子にお小遣いを掴ませて、何か情報を得ようとしているに違いない。
「任せてよ叔父さん」
マリアの胸の内を知る由もなく、空也は満面の笑みを浮かべてVサインを出した。
「ちょっと、なんであんたの叔父さん、芸能界に顔が利くのよ……」
「さ、さぁ……」
調査依頼を受けてから数日後、マリアと空也はシャドー神山の私設劇場の事務所にいた。タレントを派遣する芸能事務所に話をつけた大滝警部の手引きで、舞台に立つアシスタントとそのマネージャーとして。
「それに、こんな格好させられるとは……」
声を潜めて話す美貌の名探偵の服装は、襟元や裾に大きなフリルの付いたワンピースと赤いハイヒールの組み合わせ。
可愛らしいスタイルではあるものの、日ごろ、動きにくい服装を毛嫌いする彼女には苦痛でしかない。
「おいらもですよ、まったく……」
相方も成人式以来のスーツを引っ張り出し、なんとか社会人らしい姿に見せている。
カチャッ！
ヒソヒソ声で話していると不意に目の前の扉が開き、劇場の主である天才マジシャンがやってきた。
「お待たせしました。あなたが、新しいアシスタントと……マネージャー、ですね」
ロン毛の優男は、上品な顔立ちに似合った紳士的

な態度で二人に話しかける。物腰柔らかな喋りからは、怪しさは微塵も感じられない。
「はいっ、今日からお世話になります新人の間宮あけみでーす。よろしくお願いしまーす」
いつものクールさを押し隠し、マリアは妙にはじけた口調で挨拶すると深々と頭を下げる。潜入調査である以上、本名は名乗れない。
「そしておいら、いやわたしがマネージャーの小暮と申します。どうぞよろしく。じゃ、すいませんが別のタレントと掛け持ちなんでこれで失礼しまーす」
ぎごちなくペコペコと頭を下げる空也は、名刺を神山に手渡すと足早に事務所から出ていった。
「じゃあ、そっちの部屋の右端のロッカーに衣装が入っているからそいつに着替えて。そしたら今日のショーについて打ち合わせするから」
「はいっ。ではちょっと待っていてくださいねー」
名刺をタキシードの胸ポケットにしまいながら優しく語りかけてくるイケメンマジシャンに一礼すると、マリアは隣の部屋に入っていった。

（これに……着替えろ……と……）
指定されたロッカーを開けたマリアは、中に吊るされた衣装を目の当たりにして思わず言葉を失う。
胸元が大きく開いた、袖のないレオタード状の真っ赤なボディスーツ。艶やかな表面から、伸縮性の乏しいレザー製であるのがわかる。
股間と尻の部分が鋭角的に切れ上がったそれは小さめで、肉付きのいい自分が着れば身体を締め付けられるのは間違いない。
さらにお尻の部分には、球状の白いフサフサの毛が取り付けられており、同様の柔らかな毛で覆われた長い垂れ耳の付いたカチューシャもセットで用意されていた。

（所謂、バニーガール、ってやつよね。そりゃまあ、ショーなんだから派手さは必要だろうけど……）
黒いストッキングと一緒に置かれているのは、踵がかなり高めのハイヒール。きわどい衣装で肌を晒す恥ずかしさに加え、動きにくい靴を履かされることが不安を掻き立てる。
しかしタレントを名乗って潜入している以上、さっさと着替えなければ怪しまれるかもしれない。
「……いくらウサギ好きでも、まさか自分がウサギになるとは思わなかったわ……」
深くため息をついて呟くと、マリアはおもむろに服を脱ぎはじめた。
「んっ……」
タンクトップをたくし上げると、肉感的な大人の女性には可愛らしすぎる、胸元に小さな赤いリボンをあしらった、ピンクチェック柄のブラに覆われた爆乳が大きく波打って飛び出す。
（こんなカッコさせられるなら、大滝さんに依頼料払わせる誓約書を書かせておくんだったわ……）
科学的な興味と同世代の女性が被害にあった事件、ということでつい感情的になり、即座に無償で依頼を引き受けたのが悔やまれる。
（まあ、あとで何かで埋め合わせさせればいいか）
続けて靴と靴下を脱ぎ捨て、ホットパンツをずり下ろせば、ブラジャーと同じチェック柄のショーツに包まれた大きなヒップが顔を覗かせた。
大人の色香を振り撒く妖艶なボディには不釣り合いの、キュートなランジェリー。しかしそれは、成熟した大人の肉体の中に未だ微かに残る初々しい未熟さを引き立たせ、一味違う魅力となっていた。
（これじゃあ、下着は着けられないわよ、ね……）
ハンガーにかかった衣装を取り出してあらためて見ると、小さい衣装からはブラの肩紐やショーツの端がはみ出してしまうのは一目瞭然。

素肌に直接きわどいスーツを纏うと考えただけで、新雪のように白い肌が気恥ずかしさでみるみるうちに真っ赤に染まっていく。
（……こうなったら、もうヤケよっ！）
躊躇う気持ちを半ば強引に振り払うと、マリアは背中に手を回し、ホックを外して脱いだブラをロッカーに放り込む。
やや上向きに尖ったロケット型の乳房の先端に、チョコンと乗った薄紅色の乳首は乳輪も隆起具合も小さめで、まるでまだ花開かぬ桜の蕾のよう。
（ご丁寧に、こんなのまで用意して……）
ロッカーから取り出したベージュ色のニプレスを乳首に貼り付けると、指で押された柔らかな爆乳がプルプルと波打つ。
（下着の跡が残るのは、仕方ないわね……）
両端に親指を通し、前屈みになりながらマリアはショーツをずり下ろしていく。大きめながらも自重で弛むことのないほど張りのあるヒップは、左右均等に滑らかなカーブを描く洋梨型。
シミ一つない表皮はスベスベで、まるで剥きたてのゆで卵のよう。
縦一文字にクレヴァスが走る、赤みがかった恥丘を覆う柔毛は薄く、微かに下の秘割れの姿を覗かせている。色はもちろん、髪と同じ鮮やかな黄金色。
（これ……こんなに切れ上がっていて、ホントにちゃんと隠れるんでしょうね……）
ストッキングを履き、ボディスーツに両足を通したマリアは、右手で股間の若芝がはみ出さないよう整えつつ、左手で掴んだスーツをたくし上げる
（これ……やっぱり、きついわ……）
肉感的なボディの凹凸をクッキリと浮き立たせるほど密着したバニースーツは、容赦なく乙女の柔肌を締め付ける。まるで、荒縄で縛るかのように。
（耳は、ホーランドロップか……）

最後に垂れ耳付きカチューシャを頭に載せれば、可愛くセクシーな金髪ウサギ娘の完成だ。
「やだ、こんな姿でステージに上がるの⁉」
傍らに立てられた姿見の前で、身だしなみを確認したマリアは顔から火を噴く。彼女にしてみれば、裸で人前に出るようなものなのだから無理もない。
コンコン……。
「あけみさん、そろそろいいかな？　ショーの打ち合わせをしたいんだけど……」
「あ、は～い。今いきま～す」
すると不意に天才マジシャンに呼ばれ、恥ずかしがり屋のセクシーバニーガールは更衣室から慌てて飛び出した。

（あわぁ……やっぱり人多いわ……）
賑やかな音楽が流れ、派手な照明が飛び交う中で、スターマジシャンと一緒に舞台へと上がったマリアは、拍手で出迎える観客の多さに思わずたじろぐ。
派手な恥ずかしい衣装で人前に出るのも苦痛なのに、三千人近い視線を浴びるのだから無理もない。
「あー、ウサギのおねえさんかわいいー」
しかし、客席から子供の声援が聞こえてくるのは悪い気がしない。引き攣りながらも笑みを浮かべつつ、手を振って応えてしまう。
「ようこそ、夢の魔法がすべてを支配する世界へ。ではまず、ご挨拶に軽くカードマジックなど」
両手を広げ、満面の笑みを浮かべたシャドー神山がフレンドリーな口調で観客に呼びかけると、マリアはすかさず小道具を載せたワゴンを用意する。
（さて、お手並み拝見、といきますか……）
数々の小道具の中から、長さ三十センチほどの大きなトランプを渡すアシスタントバニーは、自分が参加するマジック以外はタネを明かされていない。
外部の人間に、仕掛けをあまり知られたくないのであろうが、それ故に科学の天才としては逆に自力でトリックを暴いてやる気まんまんであった。
「はぁっ！」
気合とともに、放り上げられた十四枚のトランプが、ヒラヒラと舞い降りる途中で突然、宙に浮いたまま神山の前でズラリと横一列に並ぶ。
（渡したあとでピアノ線でも付けたんでしょ。いつ付けたか気づかせなかったのはさすがマジシャンってとこ……え？）
ところが彼女の予想に反し、いくら目を凝らしてみてもカードを吊るす糸のようなものは見えない。
（ま、まあ……物を浮かせる技術ぐらい、わたしだって持っているわよ。おそらく電磁誘導か何かで……）
さらに天才マジシャンは右手を上げ、何もない空間から取り出したタクトを振ると、場内に『スケーターズワルツ』が流れ、曲に合わせるかのようにカードが浮いたまま動きはじめた。
（え⁉）
スペードのエースが天井近くまで跳ね上がれば、クラブのキングとハートのクイーンが手を繋ぐように寄り添ってクルクル回る。
その光景はさながら、トランプたちの空中フィギュアスケート、といった感じ。
バララララ……。
（なっ、何⁉）
さらにワゴンの上に残っていたトランプまでが、まるで自分たちも踊りたいと言わんばかりに飛び出し、空中スケートの輪に加わる。
（どうなってるの？　こんな多くの物を空中で複雑に動かすなんて、わたしにも無理……）
目の前で起きる信じがたい光景に、目が点になったバニーガール姿の天才科学者は分析することすら忘れていた。
その後もショーは滞りなく進んでいく。同時に、美貌の天才科学者による、密かなタネあかしも。
ステージ上で宙に浮き、さらにロープもなしに引き上げたバイクに跨がって空中を走ってみせれば。
（照明で見えにくくしているだけで、ピアノ線で吊っているじゃない。光学迷彩の応用ってとこね）
檻に入れたゾウを、一瞬布を被せただけで消してみせれば。
（檻の底がエレベーターになっていてステージ下に降ろしているだけね。床に変な切込みがあったから一目瞭然よ）
と、マリアは一目で次々と仕掛けを暴いていく。しかし、最初のトランプ空中遊泳マジックだけは、いくら考えてもタネがわからない。
（このわたしに見破れない手品なんてあるはずないのに……いけない、目的を忘れるところだった！）
元々、彼女がアシスタントガールとして潜入したのは、タレント行方不明事件にかかわっていると思われる神山の行動から何か掴めないか調べるため。
ショーを手伝いつつ、あらためて彼の動向を注視してみても、特におかしなところは見当たらない。
（こいつがタレントの拉致にかかわっているなら、わたしが獲物にふさわしいかショーの最中にジロジロ見て品定めするかと思ったけど……）
そして、いよいよ最後の大技のときが来る。
「さて、それでは本日最後のマジックは、こちらの美しいバニー嬢にも参加していただきましょう」
右手でマリアの肩を引き寄せ、左手を客席に伸ばして声高々に宣言すると、神山は傍らのワゴンに載せられた縄を手に取り、彼女の身体を縛りはじめた。
ギリッギリッギリッ……。
鈍い音を立てながら、柔肌に薄茶色のロープが食い込んでいく。

（き、きつすぎるわよ、これ……。肌に跡が付かない特殊な縄って言っていたけど、ホントなの？）
両手を背中に回し、両脚をピッタリと閉じた肌もあらわなバニーガールの肉体に縦横無尽に縄が張り巡らされ、ぎゅうぎゅうと締め上げられる。
最後に、股間の縦筋に沿って一本の縄が通されると、その先端が手首に結ばれて緊縛が完成。すると、力仕事担当の屈強な男性アシスタントが二人、底のない高さ二メートルほどの縦長の金属箱を担いでやってくる。
（来たわね。このあとは打ち合わせ通りに……）
ドルルルルルルル……。
ドラムロールが鳴り響くさなか、頭からスッポリと箱を被せられたマリアは、中で悪戦苦闘を強いられた。
（……くっ、狭すぎるわよ、この箱……）
身体を軽く曲げて大きなお尻を突き出し、尻尾を壁で押す。
カチッ！　ブィィィ

相手は女帝に死神だ

用心するに越した事はない

…今の所2人にも引き連れてきた従卒たちにも不審な行動はないようだが…

あるとすれば…

1日目…!!

2人が艦内を歩き回ってた…

あの数時間…!!

もう一度徹底的に調べる必要がありそうだ…

慎重かつ大胆に責める!!

乗艦から3日目
——19時

艦長待たせたな

監獄戦艦3

熱砂の洗脳航路 PRISON BATTLE SHIP 3 BRAINWASHING ROUTE OF BOILING SAND

episode 04 母娘渉外レポート

漫画 COMIC／楠木りん（くすのき）
原作 ORIGINAL／Anime LiLiTH

お待ちしてました 提督 中尉

連日で 申し訳ないのだが 今日もよろしく 頼みます

余計な気遣いは 無用だ艦長

涉外を通しての 淫ら交流は 我がクシャナ軍 女将校の誇りだ

そうです 連日の涉外で 疲れたなどと

泣き言を言う者は クシャナ軍には いません

素晴らしい!!

ビクッ

さわ

ビクン

ビク

ビク

ビク

ビク

ビクッ

ビクッ

ビクッ

では始めましょう
ピッ
ふっ…渉外レポートの撮影をするんだったな
わ私の処女を奪ったからといって調子に乗ると酷いですよ!?
あいえそんなつもりは…
昨日はみっともない姿を見せてしまいましたが…今日はきっちりと艦長にご奉仕させていただきます
スッ
バッ♡
覚悟する事ですね！
制服のままで犯すのが好みと聞きまして用意してきました
私の卵子に何度も受精するほどザーメンを搾り取ってあげますから
カチャ
おお…さすが中尉ですね
くく…その顔がどう変わるか楽しみだぞキラ

REC

地球歴2256年
10月31日
キラ・クシャナの
渉外記録です

人気の
渉外担当になると
外交交渉が
有利な条件で
進みます…

クシャナ軍の
女将校の
誇りある任務です

くはは！
馬鹿な女め！
何がクシャナの
誇りだ！

ッ…ぁあっ…
は はぁっ

今…ッ
チ■ポが

…私の中に
入りました…

ビクッ ビクッ

洗脳改造の
効果で随分感度が
上がってるようだな
…くくっ

アチ

はぁっ
アン…んふぅ…
今こうして…

アチ アチ

ん…
チ■ポを咥え
こむ時もいかに
チ■ポを愛し

気持ちよくするか
…それが一番
大事なのです

おお…っキラ中尉のオマ■コの中も…

ヌルヌルになっているな

あふっ…と当然です…っ

私のグショ濡れマ■コでたっぷりイカせてあげますよ！

よく見ておきなさい これがクシャナの女の力です

おお…！くぅ…！

はぁっはぁっ感じているのですね艦長

ザバァ
ピッ
ピピ…
ブ…
!!
気づかれたか――
水中から忍び寄る名うての女スパイ！
CodeName:BlackLily
コードネーム：ブラックリリィ
～水中処刑ショー～
漫画 COMIC ぱふぇ

コポ
ゴポポッ

ド

ドッ
ドッ
ドッ

パッ

ゴポッ

ドッ

ドガ
ドガ
ドガ

ザバッ
ジャキ
ッ
チャキ
降参よ……
ヒッヒッヒ こやつがあの ブラックリリィ とか言う女か
く…… 罠だったのね
何度も我らの 機密を盗んで くれおって
今までの礼を させてもらおうか――

それでは皆様本日のメインイベント――
水中ショーをお楽しみ下さい
私の公開処刑をサカナにパーティとは悪趣味な
くそ…なんの真似だ
魚のエサにでもするつもり？
ヒロインはかの有名な女スパイブラックリリィ嬢
組織の幹部どもめ
顔を覚えておいてやるわ
!!
へへ…

ッ——…
ごぽ
ぶぼっ
沈んでろよ！
む！
ん——!!
んんン…
ふ…ン
むにむに
む…ぐっ——ッ

ふはっ
ん!?
へへへ
息継ぎした瞬間に口を塞がれるとつらいだろ
それとももうすぐ絶頂(イキ)そうなのか？
違…ッ くうン
放せ！ ン…く
おかしい！ こんな状況で感じるなんて
まさかこの水に薬を…!?
準備運動は終わりだ

ス…
ス
なっ
何…？
え…
これは
うなぎ!?
ちょっと
やだっ
どうして…
入ってくる
…ン…な！
本日のメイン
イベントは
美女水中
うなぎショー
でございます

囚われの女スパイがうなぎにブザマに絶頂(イカ)される様を
く…ふっ くすぐった…
お楽しみ下さい！
だめ！そこは!!
あ…は……♡
く…ぐ
この…っ 這い回る…な…あぁ
〜〜ッ
おかしい…こんなっくすぐったすぎりゅうッ
違う…この感じくすぐったいよりも…まさか!?
そんなわけない…うなぎなんかにっ
なおこのうなぎも

水を操る退魔師少女とサキュバスとの
討伐バトルスタート！
選択肢でいろんなエンディングが楽しめる分岐小説！
淫縛の檻
退魔師涼河
小説／壱状什（いちじょうじゅう）
NOVEL
挿絵／しまちよ
ILLUSTRATION
ご案内
この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1～5の番号がふられていますので、シーンの小説本文末尾にある選択肢を選び、ストーリーをお楽しみください。

シーン1

夜の住宅街。薄明かりが照らす道を一人の少年が歩いていた。肩から提げた鞄から、近くの公立校に通う男子学生なのだろうと一目で推測できる。

だが、闇の奥から彼を見つめる視線はそれ以上の情報を読み取っていた。

「あら、見た目草食系の割に美味しそうなエナジーしてるじゃない♪」

生命力の質と量を見通してほくそ笑むのは、黒い人影だ。艶めかしい女の声で呟いて、舌舐めずりをする。

「それじゃ物陰に連れ込んで根こそぎ吸い尽くすとしましょうか……」

「――待ちなさい！」

影が企みを実行に移そうとしたその時、天空からの光が照らした。

輝く長方形の紙片の群れが空中で円を描き、周囲に降り注ぐ。不自然なまでの静寂に、影は眉を寄せた。

「結界術っ。協会の犬がこの街に？」

「知っているなら話が早くて助かるわ。闇より出でし妖よ、ここはあなたのいるべき場所ではない」

光に照らされた影――露出度の高いボンデージを着込んだ金髪美女の姿だ――は、光源を苦々しく見上げた。

美女を妖と呼んだ声の主は、街灯の上に着地してジャケットを翻す。

「この天弦流改式退魔師、水森涼河があなたたち妖を闇に還してあげる！」

凛と名乗ったのは、ポニーテールをなびかせたブレザー美少女だった。

古くから、人は闇を怖れてきた。

異形が潜むから怖れを抱くのか、怖れの中から異形が生まれるのか。始まりの時はもはや遠く、全てを知る世代が滅んでもはや久しい。

ただ、神話や伝承に謳われた怪異たちが人々を闇の底から狙っていることは事実であり、同時に対抗手段も世界各地で講じられてきた。

そして生まれた様々な種類の退魔戦士たちは時代を下るにつれて水面下で交流を深め、『協会』と呼ばれる組織を作り、互助活動を充実させていった。

水森涼河。彼女もまた、最新技術を駆使する現代の退魔師である。

「サキュバスタイプ……まさか外来種の実物に出会えるなんて」

落ち着いた声音での問いかけは、確認の意味合いが強い。照らされた黒衣の淫魔は肩をすくめた。

「あーら、外来種なんて虫か草みたいな呼び方はよしてよ。サラって素敵な名前があるのに。それにしても……」

蠱惑的な笑みを浮かべ、しなやかな指が少女退魔師を指す。

「貧相な体つきねぇ。可哀想♪」

「あなたには関係ないでしょう！」

涼河は羞恥に頬を染め肢体を不躾な視線から庇った。

ブレザー退魔師の女性的な魅力は決して欠如しているわけではない。健康的に引き締まったウェストのくびれからしなやかに伸びた脚へと続くラインは官能的だ。何より、ややキツめの美貌は大人びた雰囲気を漂わせ、恥じらう表情とのギャップは見る者がいれば心奪われてしまうほどに可憐だ。

ただ――バストの膨らみに乏しいのは否めなかった。

「あら熱くなっちゃって。でも気を落とさなくていいわ。もっと色気のある服なら見違えるんじゃない？」

「侮っていると痛い目に遭うわよ。警戒していても結果は同じだけれど」

歌うようなサキュバスに底冷えのする声を投げつけて、足元に護符をばらまく。伝統的な呪紋に干渉を避けて他流派の印を加え、発動速度と威力を向上させた最新モデルだ。念を込められた紙片は描かれた紋様を拡大させ、風に逆らい宙を舞う。

「怒っちゃった？　こっわ～い！」

「怖がる必要もないわよ、安らかに眠らせてあげるから」

サラもまた、纏う雰囲気を硬質なものにして、尾と羽を具現化させ、鋭く爪を伸ばした。

「「――ハァァッ！」」

睨み合いは一瞬だった。地を蹴るサラと飛び降りた涼河が互いに距離を詰める。浮遊する呪符を足場にして軌道を変えた退魔少女が、ブレザーの袖を撫でながら右手を閃かせる。

淫魔は双翼と尾の先端で三角を描き、頭上に電光球を生み出すと退魔ヒロイン目掛けて投擲した。

「痺れちゃいなさい、そぉ～れっ！」

「そんな技、私には通じない！」

対する制服退魔少女は紙片を取り出し、円を描くように眼前に配置した。

「降りよ、滝の緞帳！」

符を媒介として変容・増幅した精神力が効果を表す。水の盾が生成され、電光球を受け止め拡散させた。

「小癪じゃないっ。だったら改めて息のかかる距離で楽しみましょ！」

サラは唇を舐めると、手指を揃えて爪を剣に変えて、一気に距離を詰めた。手の一振りで水の膜が弾け散り、退魔少女が無防備な姿を晒す。

「下手に動くと痛いわよぉっ！」

「心配には及ばないわ」

あくまで冷静に、涼河は紙片の群れを周囲にばらまく。光を帯びた符は、吸い寄せられるように術者自身に貼りつき、体に溶け込む。

「惑わせ、水身の檻！」

「そんなコケおどしで……えっ？」

すれ違いざまに爪を振るい、淫魔は顔を強張らせる。一撃を浴びせたはずなのに、手応えがほとんどなく、スレンダー退魔師は健在な姿を見せ続ける。

「幻影――いいえ、違うっ？」

「ハァァッ！」

振り返るサラの眼前で、制服姿がほどけてアメーバのような不定形となった。霊力を宿した蒼い奔流と化した退魔師は、空中を泳いでサラへと追いすがり、体当たりを繰り返す。

「じ、自己液状化ですって？　大魔導

師級の高等技術じゃないっ！」
姿勢を崩して失速した淫魔は翼を広げて墜落寸前で持ち直し、目を剥いてスライムヒロインを見上げる。
不定形少女は組成密度を増して元の姿に戻り、毅然と告げた。
「あなたたちから世界を守るための力と技よ。受けてみなさい！」
「生意気な小娘ね、だったらっ！」
サキュバスは親指の先を噛み切り、血の珠を浮かせた。手刀を振ると血液が膨張して、淫魔を小型化した分身が出現、四方から襲いかかる。
「ハーレムプレイの始まりよ！」
「あなたにペースは握らせない」
繰り出された電撃の爪を、しかし涼河は再度の液状化で回避してみせた。聖なる飛沫は空中で分裂する。
「あんた本当に正義の味方なのっ？　卑怯臭いビジュアルじゃないっ！」
呆然とするサラの目の前で、退魔師もまた二人に増えてみせた。
『問答無用！　縫え、濁流の牙！』
二人の涼河は符を構え、空を駆けながら霊力の十字砲火を浴びせる。
「きゃぁ～んっ！　嘘、これってヤバいのっ？　ちょっとタンマ！」
瞬く間に分身淫魔の一体が蒼光に撃たれて分解、虚空に溶けた。分裂ブレザーヒロインは巧みに軌道を描いて二対一の状況を作り出し、次々と分身を撃墜していき、やがて合流する。
『これで最後よ。迸れ、龍渦の陣！』
声を揃えて詠唱し、新たな紙片を自らの控えめな胸に押し当てる。液状化した二つの影が螺旋を描いて混ざり合い、蒼く透き通った龍の顎門を形作ると、サラ目掛けて襲いかかった。
「てぇいやああああっ！」
「だから、待っ……ひぃっ！」
翼を広げて逃げようとする淫魔の豊満な肢体を、輝く龍が背中から喰らいつき、丸呑みにする。
「この世界に、あなたたちの居場所はない。永遠の眠りに就きなさい！」
「やだっ、ちょっと、出して……」
透明な龍の内側でもがく淫魔の姿と声が、やがて輝く球体の聖殻に押し込められて小さくなっていく。
「このアタシが、こんな……ッ！」
生きた聖水に漬け込まれた有翼美女は、悔しがりながら目に見えないサイズにまで存在を削られ――やがて言葉を発さなくなった。
マンションの給水タンクに降り立った液状化退魔師は、術式の効力を停止させて元の少女の姿へと戻った。
彼女が扱った秘術は、肉体の分子構造間に霊力を流し込むことで一時的に液体と化して幻惑から封印までを行う大技だ。相応の負担を強いられはするが、腕利きの退魔ヒロインは危なげなく制御してみせた。
「封印完了……結界解除、っと」
指を鳴らすことで、ばらまいた符が一瞬にして燃え尽き、周囲の世界に音が戻る。ふう、と息をひとつ吐き、表情から険しさを解いた女子学生は、言い訳をするように早口で付け加えた。
「そうそう、彼があの淫魔に変なことされていないか確認しないとね」
涼河はどこか軽やかに、サラに狙われていた少年の足取りを追った。
程なくして、少女退魔師は少年に追いつき笑顔で呼びかけた。
「しょ……こほん、樋上く～んっ」
「あれ、水森さん？」
涼河に声をかけられた少年――クラスメートである樋上翔弥はきょとんとした顔で振り返った。
「奇遇ね。私のマンション、この近くなの。樋上くんも？」
「うん、塾の帰り。水森さんはこんな時間にどうしたのさ」
「どうした、って……どこか変？」
問い返されて、首を傾げつつ自分の服装を顧みる。学園指定の夏用ブレザーとブラウス、プリーツスカートという服装に、不自然な箇所はないはずだ。裏地に仕込んだ防御用霊紋刺繍を見抜かれたとも思えない。
対して少年はあっさり答えた。
「変っていうか、手ぶらだから」
「……夜風に当たりたかっただけよ」
視線を逸らして誤魔化すと、穏やかなクラスメートはクスッと笑った。
「なぁんだ。てっきり学校に鞄を忘れてきたのかと思った」
「あの、樋上くん。人を忘れ物の常習犯みたいに言わないでくれる？」
腰に手を当てて憤慨のポーズを作っても、温和な少年はどこ吹く風だ。
「転校初日に教科書を忘れてきたのはどこの誰だったかなぁ」
「あ、あれは協会のミスで……」
「協会？」
「……そ、そうね、そんなこともあったわ。あの時はありがとう」
うっかりと口を滑らせて、涼河は上擦った声で取り繕った。協会から派遣された退魔師だということは、周囲には秘密にしているのだ。
「水森さんってやっぱり面白い人だね。そんなにありがたがられると、ちょっと照れちゃうよ」
「そう言う樋上くんは意外と意地悪よね……優しいけど」
最後の一言はぽつりと呟く。それでも少年の耳には届いていたようだ。
「だから、そんなことないよ。水森さんだって、よく気分の悪くなった子に付き添って、かっこいいと思うよ」
秘密の退魔ヒロインはきょとんとして、小さな驚きと共に笑みを浮かべた。退魔師としてこっそりと生徒から低級妖魔を祓っていたのだが、図らずも彼に好印象を与えていたらしい。
「あ……見ていたのね。確かにこれは、照れくさいかも。ふふ……」
ともあれ、誉められれば悪い気はしない。否、最高と言ってもいい。
幸せな時間を過ごしながら、やがて少女は自分のマンションの前に着くが、名残惜しさを覚えて話題を探した。
「そうそう、明日の体育、プールだったわよね。晴れるといいわね」

著者近況　主人公が乗用車から変形して合体して1話に1体派手な必殺技でゲスト怪物を倒すロボットアニメ、に飢えているので趣味で書いて自分で楽しんでいます。設定をエロに転用できそうなのでストックして機を待つ日々。

暑い中でプールの授業を楽しみにしている男子は多いだろう。微笑みかける涼河に、翔弥は苦笑で答えた。
「実は僕、泳げないんだよね」
「えっと……ごめんなさい。そうだ、泳ぎを教えてあげましょうか？」
挽回を試みつつも少年を誘う、涼河のとっさのアイディアだったが、クラスメートは苦笑して手を振った。
「いいよ、水森さんに悪いし。じゃあまた明日ね」
「あ、うん……また明日」
去っていく後ろ姿を見送り、秘密を抱えた転校生はマンションの一室――協会が用意したセーフハウスに帰還して、小さく嘆息した。
「デートには誘えなかったけれど……ううん、いいわ。この町を、翔弥くんを守り続ける限りチャンスはある」
退魔エージェントは私情を交えつつも、任務に改めて熱意を燃やした。
この街、光倉市はいくつかの霊脈が交差することが近年判明したパワースポットだ。洋の東西を問わず妖魔が寄り付きやすい立地条件であると同時に、高い霊力を持つ者も生まれやすい。
樋上翔弥もそうした素質ある者の一人であり、涼河は人知れず彼を護衛するために協会から派遣されたのだ。
しかし、退魔少女はそれ以上の感情を護衛対象に抱いてしまったのだ。
（協会は守ることだけを考えろっていうけれど……たとえば、たとえば私と翔弥くんが、け、結婚なんかしたら協会にとってもプラス、よね。彼は優しいし、ルックスもいいし、生まれてくる子供の才能も……きゃっ、子供だなんてまだ早いってばっ！）
敵に対する苛烈さとも、クラスメートに見せたクールさとも異なる、思春期の感情に彩られた顔は、しかし姿見に映る自分を認めて僅かに曇る。
――貧相な体つきねぇ。可哀想♪
淫魔サラの嘲りが脳裏に蘇り、こめかみが我知らずひくついた。同年代よりも慎ましいBカップバストは、彼女にとっては悩みの種だ。
「……ふ、ふんっ。大きさばかりが武器じゃないわよ……う、うふん？」
負け惜しみを口走り鏡の前でポーズをとって、空しくなってうなだれる。
「……似合わないわね」
ひとしきり百面相した恋愛初心者は、大人しく体を休めることにした。

すやすやと寝息を立てる涼河だが、決して無防備ではない。就寝前に結界を張り、霊力機動端末、式神を配置することで妖の出現に備えているのだ。
だが、警戒網にも死角はある。彼女自身だ。その寝顔に赤い波紋が走った。
「ん、ぅ……」
寝苦しそうに身をよじる、その頬に、パジャマの襟から覗く首筋に、手足に妖しい光が波打ち、染み込んでいく。
異変が、急速に進行していた。
胸の圧迫感に、涼河は目を覚ました。何者かにのし掛かられている可能性が脳裏をよぎり、眠気が吹き飛ぶ。
「ぅ……っ？　誰かいるのっ！」
跳ね起きた瞬間――特に誰にも押さえつけられていなかった――上体の重心がブレる。予想外の慣性に振り回されて、ベッドに手をついた。
「何よもう。胸が、重たい……？」
呟いて、気付く。自分の体を見下ろす。そこにはパジャマを窮屈に押し上げる二つの膨らみがあった。押し込められた乳球が作る谷間が、胸元の隙間からくっきりと窺える。
「……これ、私の胸？」
半信半疑で持ちあげてみる。掌にずしりと重みを感じる。Bカップバストは、今や90センチGカップへと成長を遂げていた。しかも――
「あぅンっ！」
指が食い込むと、甘い痺れが網目を辿るように乳房全体に広がり、背筋を駆け抜けて脳と下腹部まで響く。
ぐちゅりと股の間で湿った感触が広がった。掴んだだけで性感が走る。
「嘘、こんなに敏感に。い、いやらしい……まさか、サキュバスの？」
考えられる可能性はひとつしかない。
「大人しく封印されればいいのに私の体に干渉するなんてっ。しかもよりによって今日は週に一度の交換日……」
歯噛みして、涼河はカレンダーに視線を向けた。
水回りは地脈の霊力から干渉を受けやすく、妖魔が潜みやすいポイントだ。家庭の水道程度ならまだしも、多くの人間が集まる場所は闇の住人たちにとって格好の出没スポットとなる。
そのため、人の集まるプールや公衆浴場に魔除けの符を潜ませておくのだが、今日はその交換日だ。一日部屋にこもるわけにもいかない。
「明日には治ってるといいけど。不便だけど一日過ごすしかない……んっ、サラシでも巻かないと無理ね」
身に封じたサキュバスの封印が緩んだ気配はない。最後の悪あがきがたまたま効いただけなのだろう。そう結論づけて、涼河は慣れない鋭敏巨乳を持て余しながら着替え始めた。
（ふふふ……アタシを甘く見たわね）
退魔少女の体内に深く身を潜め、サラは手応えを確かめた。ゲル化退魔師に溶け込んで浄化を免れた、淫魔の血の感触が、魂の牢獄と外界を結び付けてくれる。
（寝ている間にこのコのカラダを作り変えたら、あとは生命力を集めて復活するだけ。さーて）
巨乳化ヒロインを内側から監視しながら、淫魔はほくそ笑む。
――どこで動いてあげようかしら？

◆イキのいい子がいる学校よね♪　⬇シーン2
◆町をじっくり見てから決めよっと♪　⬇シーン3

著者近刊　『くノ一少女は笑顔が苦手』書籍版＆電子書籍版ともに好評発売中です！

シーン2

水着に着替えてクラスメートたちと共にプールサイドに出た涼河は居心地の悪さを覚えていた。周囲から上がる声に耳を澄ませ、後悔する。

「凄いよね、水森さん」「クールなお姉さまって感じなのに、意外……」

（私のばかっ、こんなことで浮かれて。今から見学は……無理があるわね）

突然成長した巨乳は、更衣室でサラシを解いた瞬間から、クラスの女子全員の注目を集めてしまっていた。

学園指定の水着は競泳用に近いデザインで、涼河の普段の寸法に合わせたサイズだ。故に、今の涼河のGカップを押し込めきれず、柔肌の一部が卑猥にはみ出してしまっている。

（それだけじゃない。水着にぎゅっておっぱいを締め付けられて……っ）

布地に圧迫された乳房の内側を血流が脈打つたびに、性感神経が少しずつ研ぎ澄まされていくようだった。

一方乳房に押し上げられた分、股間を守る布地も引き絞られていた。踏み出すたびに食い込みが強まり、柔らかな陰唇は今にも割り開かれそうだ。

「どうやって育てたのか聞いてみようかな」「あ、あたしも知りたいな」

「あれ、水森さんかっ！」「でっけぇ、何カップだ？　Fか、Gかっ！」

退魔師として鍛えた聴覚が、聞きたくもない猥雑な称賛を拾ってしまう。

（……そう言えば翔弥くんは？）

露骨に前かがみになる海パン男子など正視できるはずもなく、視線を逸らすと屋根の下で見学している体操服姿の翔弥と目があった。

少年は一瞬嬉しそうに表情を輝かせ、慌てて赤くした顔を背けた。他の男子とは違う初心なリアクションに、巨乳化少女は奇妙な満足感を覚えた。

（そうよね、彼は紳士だもの。でも真っ赤になった顔、可愛いかも）

誠実な反応を見られただけで、今の羞恥も報われた気がした。

「おーい出席とるぞー」

転校少女が波紋を呼ぶプールサイドに、パンパンと手を打って体育教師の日出山（ひでやま）が現れた。一転女子からは黄色い声が上がる。

「ヒデせっんせーい！」

「ハハハ日出山でぇす！　並ばないとプールに入れないぞ。それに今日お休みの寺迫（てらさこ）先生に僕が怒られちゃうよ」

筋肉質で小麦色に焼けた肌と、爽やかな笑みが似合う甘いマスクの好青年だ。水泳部顧問も務めている。

素直に整列するクラスメートに混じって、転校生ヒロインも整列する。

（一見して友達感覚だけどちゃんと尊敬されている、ってところね）

それだけ指導力がしっかりしている証拠だ。涼河は、普段は接点のない男性教諭をそう評価した。女性体育教師が不在だが、彼がいるなら滅多なことは起きないだろう――涼河の見立て通り、プールの授業はつつがなく進行し、残り時間は自由遊泳となった。

（そろそろ交換に行かなくちゃ）

少女退魔師は水中に潜ると、髪を結わえたゴムから縮小化した紙片を取り出した。地味ながら大切な任務をさりげなくこなすべく手に霊力を込める。

符が巨大化して古い物と交換されれば、またしばらく水妖がプールに訪れることはなくなる――しかし。

（う……っ！）

ピキリと、腕の筋肉が強張る。霊符は元のサイズに戻ることなく、水の中を漂い流されていった。

（うそ、筋肉痛……違うっ！）

ごぼっ。動揺した拍子に空気の泡が口から逃げる。命の危機を覚え、もがく、否、もがこうとする水着退魔師だが、体が思うように動かなかった。

パニックで手足が出鱈目に動くのではない。どれだけ慌てても、まるで心身を繋ぐ糸が切れてしまったように四肢がびくともしないのだ。

（何で体が言うこと聞かないのっ！　まずい、水中呼吸術も使えない……）

感覚神経は働いている。むしろ僅かな水の流れすら把握できるほどに鋭敏だ。だが、動かせない――ごぼり。焦る唇から、肺の中の空気がこぼれた。

（誰か、助けて……翔弥くん……！）

純情退魔師は想いを寄せる少年に助けを求める。応えるように、水の流れが近付いてくる気配を伝えた。

（たす、け……っ！）

気が遠くなる中で、金縛りにかかった体を動かそうと、身じろぎを試みていた肢体が、力強く引き上げられる。

「――ぷはっ、はぁっ、はぁっ！　けほっ、げほぉ……っ」

頭が水面を飛び出す。空気を必死で取り入れ、えずいて、首から上の自由が利くことにようやく気付いた。

「大丈夫かな、水森さん」

「けほ……っ、は、はい……っ」

呼びかけられて言葉を返す。顔を上げて、助けてくれた男の姿を認めた。

「先生、ありがとうございます」

「よかった。カナヅチじゃなくても少しのきっかけで溺れることはあるからね。手を離しても大丈夫かな？」

筋肉質な青年教師、日出山がニヤリと笑っていた。

「それは、ちょっと、くふ……？」

自由の利かない体で放り出されても再び溺れるだけだ。逡巡する涼河だが、肢体はひとりでに至近距離の感覚を必要以上に伝えてきた。

（やだ、胸が押し潰されて……肌同士が触れ合って、気色悪い……っ）

「あの、先生、少し体を離して」

「水森さん、大丈夫っ？」

少年の声が傍らから聞こえてくる。視線を向けると、青ざめた顔の翔弥がいた。シューズの爪先が濡れているのは、プールに入ろうとしたからか。

「うん。恥ずかしいところ、見せちゃった、かな……」

「ご、ごめん。向こう行ってるね」

涼河は軽口で返したつもりだったが、

少年は少女のプライドを慮って、申し訳なさそうに戻っていく。
「樋上く……あっ？」
行かないで、と呼びかけようとした時、不意に右手が意志とは関係なく動いた。弾力を秘めたすべすべした物の感触が掌から伝わってくる。
「きゃっ！　何、この感触……」
「おやおや。やっぱりそういう魂胆だったのかな。意外と積極的だね」
「え、日出山先生……？」
左腕もまた急に、吸い寄せられるように体育教師の胴を抱え込む。右手の行き場を辿る視線は、海パン越しの男の膨らみを捕らえてしまった。
男性器。ペニス。名前しか知らない生殖器を、自分から触っている。
事実を認識した瞬間、退魔転校生はパニックに陥った。
「な、何でっ、どうしてっ！」
（そろそろ種明かしの時間かしら？）
頭の奥で、自分ではない声が響く。昨夜封印したサキュバスの物だ。
（っ！　あなた、サキュバス……封じ込めたはずなのに、どうしてっ？）
口に出さずに問いかけると、淫魔サラは楽しげに答えた。
（それがねぇ、アタシの体液があなたのゲル化ボディと混ざったおかげで、何とか生き延びたのよ♪　日ごろの行いがよかったせいかしら）
（そんな……っ！）
（ま、アタシが復活するまでの間、この体を借りちゃうわね）
敵を倒しきれず、逆に体を侵蝕されたことに美少女退魔師は憤った。
「ふざけないでよ……！」
「どうしたのかな、水森さん？」
「ち、違うんです先生……ひぁっ、何これっ？　大きくなって……！」
落ち着き払って問うてくる教師に何とか弁解しようとするが、右手の中の感触が熱く硬く膨張するという未知の触感に声を裏返らせてしまう。
「ほら、大声を出したら周りに気付かれてしまうよ？」
「っ！」
爽やかに、有無を言わせない迫力で囁かれ、純情少女は息を呑んだ。屋根の下を見やると、想いを寄せる少年が同じく見学中の少女に話しかけられていた。こちらには気付いていない。
（よかった、彼は見てない――）
ぐにぃっ。
「んく……っ⁉」
ほっとした瞬間を狙われて、下半身に電流が走る。力強い男の指が尻肉を鷲掴みにしてきたのだ。
「生徒に言い寄られるのは慣れているからね。僕に任せなさい」
「違うんです先生、私、触りたいわけじゃなくて……んぅっ！」
顕著に成長したバストほどではないが、美臀もよりグラマラスに、敏感に変貌した部位だ。形が変わるほどに揉みしだかれると、熱が体の奥まで浸透するようだった。美男子聖職者の問題発言を咎めることすらできない。
「はふっ、先生、そこ、ぉんっ！」
声が甘く裏返る。その間も少女のたおやかな手は水着越しに男のシンボルに指を絡め、なぞり上げている。
「恥ずかしがっているのに、く……ッ、予習は万全かな？」
「こ、これは私じゃなくって……！」
男性器を弄るなど、処女退魔師には耐えがたい恥辱なのに、手を離すことができない。
とうとう、手は男の水着の内側に潜り込み、熱い肉塊を握ってしまった。
「男の人の、触って……はぅンっ！」
キュゥっと、呼応するように下腹部の奥が切なく収縮した。硬い棒に胎内を押し広げられるイメージが、全身を痺れさせる。処女退魔師はもがこうとしながら、未知の感覚に戸惑う。
（おなかの奥が熱くて、切ないっ⁉）
未知への恐怖と共に、もう一度味わってみたい、確かめてみたいという危険な興味が心に兆す。一体化した淫魔が楽しげに笑った。
（今の感覚は、男のチンポを咥え込む牝の快感よ。彼、結構いいモノ持ってるから疼いてきちゃった♪）
（ま、待って！　私の体で何をっ）
宿主の制止もどこ吹く風で、寄生淫魔は水着にパッケージされた豊満な肢体を操って、さらに体育教師への密着を強めた。硬く屹立した乳首が、押し込められて快楽電流を走らせる。
「ふぁっ、あンンっ！」
「我慢できないのかい、水森さん。乳首もこんなに硬くして」
「知りませんっ、体が勝手に……」
目元を染めた抗弁も、事情を知らない好色教師には通じるはずがない。
「そうか、体が僕のことを求めて仕方ないんだね。そうだな、時間もないことだし……準備も万端のようだ」
「そ、そういう意味じゃ、んひっ！」
否定の声が甘い喘ぎに塗り潰される。ぬちゅり、と水音が胎内に響いた。
「指、動かさないで、はぅ……っ」
股布をずらされ、圧迫から解放された柔唇がカルキ水に晒されてほころぶ。背徳的な心地よさを覚える秘裂を、指が撫で擦ってくつろげていく。
（さ、触られてる……体も動かせないし、これじゃ助けも呼べないっ！）
大事なところを露出させられた羞恥と同時に、これから起こることへの恐怖が膨れ上がる。どうにかして目の前の男を説得しなければならない。
「あ、あの、私違うんです。せ、セ……ックス、とか、したことなくてっ」
恥を忍んで懇願するが、人気体育教師は爽やかな笑みを崩さなかった。
「心配ないよ、処女の相手は慣れてるからね。すぐに天国に連れていってあげるよ。それに君が大きくした……」
「あひぃ……っ！」
ぐちゅりっ。二本揃えた指が陰唇をこじ開け、浅瀬を引っ掻いてくる。快楽に従順な肉体が、あっさりと屈服して刺激を走らせ精神を揺さぶる。
「コレも我慢の限界だしね」

「あ……っ」
ちゅぽ……。指を引き抜かれると、異物感を失った膣口が名残惜しくひくついてしまう。物足りない刺激に、思わず声を上げてしまう。そして代わりに、熱く硬い肉槍が押し当てられた。
「さあ、処女の卒業だよ」
「あ、や、やめ……」
ずぶぶ、ぶぢっ、ぐちゅぅっ！
牡の醜い肉塊が涼河の体に押し入ってくる。処女の証が破られる痛みが全身に走り――快感が爆発した。
「んぎっ、ひぃ……んむぅぅっ！」
逞しい胸板に頭を押しつけられ、悲鳴は隠蔽される。誰かに気付かれるかもしれない、そんな危機感すら一瞬頭から消えてしまうほど、膣肉を掻き分け突き上げる刺激は強烈だった。
（おチンポ来たきた♪　処女喪失の痛みも快感にしてあげたわよぉ♪）
「んひゅっ、くふぅぅっ！」
淫魔の軽口に答える余裕もない。全身の細胞が沸騰して、神経が震える。
「熱く潤っているのに、締め付けがキツい……素晴らしいよ、水森さん」
ぐじゅじゅじゅ……っ！　押しのけた破瓜の血をプールに溶かし、亀頭が突き当たりの子宮口にハマり込む。
うっとりとした日出山の賛辞に耳をくすぐられ、ゾクゾクとしたものが背筋を駆け抜ける。
「全部入ったよ、分かるかい？」
悔し涙が滲むのに、状況を自覚するたびに牝器官が反応して、ペニスを奥へと誘うように粘膜を蠢動させる。大事なところを男の形に変えられて、順応させられる。それなのに。
（初めてを奪われて、みんなが周りにいるのに犯されて汚されて……っ！）
「なのに、何で気持ちいいのっ？」
無意識に漏れた声に、教師が囁く。
「君がとびきりHな女の子だからさ……ああ、我慢できない。動くよ」
「ふぁ、抜かれて、擦れる……！」
肉棒が引き抜かれ、カリの段差が膣襞一枚一枚をめくって蜜を掻きだす。空虚感が、強く体中を飢えさせた。結合を解かれることは歓迎すべきなのに、女体は切なく剛直を求めてしまう。
「抜くの、ダメ、です……っ」
（どうしてっ？　言ってはいけないのに、私、欲しがってる……っ？）
「すぐ食べさせてあげるよ、そらっ」
「はふぅン！」
ずぶんっ。蜜壺の奥までペニスを突き立てられ、発情女体が淫欲に満たされる。淫魔に侵蝕されていない退魔師の精神にまで大波が押し寄せた。
（おなかの奥の、ひだひだ全部が痺れてっ、子宮も、んぁぁっ！）
奥深くを押し広げる異物に体が容易く屈服している。子を宿す器官が勝手に震えて、熱い涎を肉棒にまぶした。
「奥えぐるの、だめぇ……」
（あら、これがいいんじゃない♪）
許しを乞う涼河自身を嘲笑うように、淫魔に操られた肢体は密着を深め――ずぶっ、ずちゅっ、じゅぶっ！
「くぅ、搾り取られそうだよっ」
「ぁひっ、ちがっ、待っ、んひぃ！」
声を殺しながら制止しようとしても叶わない。自分から浅ましく腰を振り肉棒に子宮をぶつける動きが、剛直を食い締める膣壁のうねりが、少女の精神を容赦なく打ちのめす。
「ああ、欲しいんだね天邪鬼さん。いいよ、熱いのを注いであげようっ」
「ひ……あはぁんっ！」
切羽詰まった牡の吐息に水着退魔師は青ざめるが、体は欲情を深める。
「ほら、中出しでイクんだっ」
じゅぶっ、とほぐれきった子宮口を亀頭が広げ――どぷっ、びゅくくっ！
「はひっ、あちゅいの出てるっ、わたひ、とんじゃう、はひぃぃぃっ！」
子宝の内壁に直接熱い樹液を撃ち放たれて、操身退魔師は生まれて初めての壮絶なアクメに晒された。
（あぁ、体の奥、汚されて……）
妊娠してしまうかもしれない恐怖と絶望、好きでもない男に最後まで体を弄ばれた悔しさが、胎内に広がる熱の脈動と共に全身を満たしていく。
しかし一体化した淫魔は終わりを告げたりなどしなかった。
（あら、祭はこれからよ？）
「え……？」
言われて顔を上げると、周囲には何人かの男子生徒が集まっていた。
「み、見られ――えっ？」
「先生ばっかりお楽しみはずりーよ」
「いつもみたいに俺たちにも分けてくださいよ」「すげ、水森さんエロっ」
少年たちは下卑た笑いを浮かべて近寄ってくる。日出山も慣れた様子だ。
「よくあることなんだ。僕とHしたい女子は多いけれど、一人じゃ体がもたなくてね――ああみんな。水森さんは相当な好きモノだよ。上の口は素直じゃないけれど……」
「先生、あなたって人は……ひっ？」
思いもよらない学園の暗部を目の当たりにした涼河だが、女体は自分から尻肉を割り開いてしまう。
「ち、違うの、これはっ」
「水森さん、ツンデレプレイが好きなのかな」「演技は不器用だけど、レイプっぽくて燃え萌えだよな！」
勝手なことを言い合いながら少年たちが近付き、やがて一人がポニーテールに顔を埋めるまで密着する。
「じゃ、こっちは俺が頂きまーす」
「や、やめて……ああンっ!?」
拒む水着退魔師だが、菊門に牡鏃が食い込むだけで甘く蕩けてしまう。
涼河は、挿入の衝撃に耐えようと必死に自らに言い聞かせた。
（ダメよ、このままじゃダメ……絶対、流されたりしな、あひぃぃっ!?）

◆快感に耐えきれず気絶する　⬇シーン4
◆気を失わずに反撃の機会を探る　⬇シーン5

シーン3

「ふぁ……」

放課後。学校を出た涼河は盛大にあくびを漏らしてしまい、慌てて周囲に目を向けた。誰にも見られていない。

（今日は何だか、疲れた……）

プールの授業の際に肥大化したバストをクラスの女子に見られ、質問攻めに遭ったのだ。その後の数学の授業では爆睡する級友たちに混じり、意識を途切れさせてしまった。

「翔弥くんは見ないふりをしてくれたけど、またからかわれちゃう……？」

ぽやく彼女の脇を、サイレンを鳴らしてパトカーと消防車、救急車が駆け抜けていく。退魔少女は首を傾げた。

「あの、何かあったんですか？」

通りかかった主婦に問いかけると、答えはすぐさま返ってきた。

「水道管が破裂したんですって。やぁね、断水になっちゃうのかしら」

「あ、ありがとうございます」

確認する必要はあるが、式神が報告に来ない程度なら優先度は低く後回しでも構わない。涼河はそう結論づけて、当初の目的地へと足を向けた。

そこは光倉市に戦前から続く、由緒正しい銭湯だ。週に一度は通っているので、番台に座る女主人とも顔なじみになっている。

「あら涼河ちゃん、来てくれてありがとうねぇ。今日は一番乗りよ」

「お世話になります。ここは水道管、大丈夫ですか？」

「ええ。だから今日は繁盛しそう」

女主人と談笑しながら、退魔少女の手は懐から一枚の紙片を取り出す。それは彼女が意識しない行動だった。

「え？」

「へ？」

戸惑いの声が響き合う。額に符を貼りつけられた番台の主人は、びくんと体を痙攣させ、表情を消した。術を使った張本人である涼河は、自分の所業に戸惑って視線をさまよわせる。

「さ、催眠の符？　どうして？」

（うふふ、それはね♪）

自分の物ではない声が響く。退魔少女は周囲を見回した。

「その声は昨日の淫魔っ。封印したはずなのに、いつの間に脱出したの⁉」

（脱出してないわよぉ。あなたの中から話しかけてるの♪　アタシの血を体に溶け込ませてくれたおかげで……）

楽しげなサラの声と共に、制服美少女の足は番台の前を通り過ぎる。

（この体はアタシのモノ同然ってワケ。作業を見せてくれたおかげで、お札の使い方もマスターしちゃった♪）

「わ、私の体を乗っ取って、どうするつもりなのっ？」

忌むべき妖に体の自由を奪われ、退魔師は焦る。体内の淫魔は制服を乱雑に脱ぎ捨てながら、脱衣所を抜けた。

（そうねぇ、アタシの完全復活のために一肌脱いでもらうわ）

「や、やめなさいっ、やめて！」

制止も空しく美少女の体が向かった先は無人の男湯だった。

数時間後。淫魔サラに体を乗っ取られた涼河は、体を泡まみれにさせて男たちに奉仕させられていた。

「こ……こんなこと本当はしたくないんです、信じて……ひァン！」

「うんうん、事情があるんだろう？」

「こ、こっち見ないでくださいっ」

振り向こうとする筋肉質な中年に、唯一自由になる言葉をかけるが、伝わっている気がまるでしない。

「んぅ、ふぅ……」

羞恥に目を伏せている間にも、体は勝手に奉仕を続けていた。広い男の背中に、体を使ってボディソープを塗り付ける。エリート退魔師である涼河にとっては屈辱的なプレイだった。

（こんなことに術を悪用されて、恥ずかしいのに、悔しいのに……っ！）

巨乳を持ちあげ、谷間に溜めたボディソープでぬめる肌を筋肉質の背中に擦りつける。

男性客たちが男湯で巨乳女学生を取り囲む。しかしこの異常事態が外部に露見することはない。淫魔サラが涼河の符を使って結界を作ったためだ。

（でも、胸が熱くて、痺れて……）

「あン……ッ！」

改造された淫乳が、ツボを心得た刺激を受けて昂る。屹立したニプルが男の背を擦って折れ曲がるたびに、快楽電流が駆け抜ける。

「そろそろ前の方も頼もうかな」

（はぁ～い♪　さ、移動移動っと）

「……っ」

どれだけ悔しげに歯噛みしても、操られた体はいそいそと動いてしまう。男の正面に回り込むと、すでに肉棒は硬くそそり立っていた。視線を逸らして正視しないようにする涼河だが、体内の淫魔は大喜びだ。

（あはぁ、逞しいおチンポ♪　これでおマンコをゴリゴリ犯されて子宮までズボズボされたら、たまんないわ♪）

「ひぅぅっ⁉」

体の内側に震えが走る。未知の快感を勝手に思い出されて、侵蝕退魔師はその場にへたり込んでしまった。白濁した淫涎がタイルに広がる。

「おーおー、チンポを見ただけでお漏らしか？　ドスケベだのぉ」

「そんなつもりじゃ……うぅっ」

口では否定しても体は男を受け入れる態勢を整えてしまう。自分で双乳を持ちあげていては、説得力がない。

（いい加減諦めなさい♪　とっくに処女でもなくなって、何度もイッちゃったくせにぃ。往生際悪くない？）

「くっ……」

奉仕を始めて数十分後には、退魔少女の処女は散らされていた。改めて意識させられ、悔しさに涙が滲む。

一方で、右手が勝手にポニーテールから符を抜いて、胸に押し当てる。霊力が活性化して汗に溶け込み、ぬめりの強いローションへと変えた。

復讐の退魔巫女

水中戦士

漫画COMIC／阿部いのり

夜更けの泉に現れたのは…？

見つけたぞ「深き者」よ

誰だ…

我の領域に侵入した愚か者は

プカ…

領域だと…？笑わせてくれる

勝手に泉に住み着いた妖怪の分際で偉そうに

今まで多くの民を喰い屠った畜生めこの春日野奈津が貴様を葬ってやる

バサッ

ザパ…

ほう…貴様
退魔巫女か

ああ…貴様を
殺す為に力をつけた

10年前…私の目の前で
父を喰い殺した貴様に
復讐するために！

そうか貴様
あの陰陽師の娘か
無謀にも我を
退治しようとした
馬鹿な男だったが

小物だがそれなりに
美味な肉だったぞ
貴様の愚父は

ニィィ…

父上を愚弄
するなぁ！

キィィィィン

召雷!!
ぐおおっ!?
小娘の分際で
これほどの霊力とは…
!?
待て!!
勝てないとわかれば
逃げ帰るとは
この臆病者が!
私に殺されろ!!
んなっ!?

うあああっ!?
ザブーン
しま…っ
ずるっ
ずるっ
ずるっ
ゴボッ
ゴポッ

くる…し…

ぐぽっ

早く…水面に出なくては…！

ゴポッ

にゅるっ

ずるん

……っ!?

ぐぽっ

ぐるん

にゅ

ぷち

ぐにっ
ぐにゃ
んぐっ…ッ
ぐぷっ
ぐぷっ
ほう…なかなか
いいものを持ってる
ではないか
退魔巫女よりも
遊女の方が
天職ではないか？
こいつ…!!
ごぽぽっ
ぐぐ
んん～ッ
れろお
たぷっ
んんん～ッ！
ぎゅむっ
むぎゅうっ
も…息が…
ぱっ
ぱっ
おっと
いかんいかん
ごぼっ
人間は空気がないと
死んでしまう脆弱さ
だったな

海中にて為す術を失った変身少女――
異形の怪人に責められ、絶頂へと至る！
聖天炎姫
アストレイアーマリア
小説 NOVEL／ヤミヨ
挿絵 ILLUSTRATION／ドブロッキィ

行楽地であるビーチから少し離れた岩場。本来立ち入り禁止のその場所に人がいるなどありえないことだ。
「ひぃっ！　ば、化け物ッ！」
しかし、そんな場所で女性の引きつったような叫び声が響き渡る。
女子大生だろうか、大胆なビキニにビーチサンダルといった無防備な姿の女性は、腰を抜かし波で濡れた岩肌に尻餅をつき、恐怖で引きつった顔で目の前の生き物を見つめていた。
「何を怖がることがある、貴様は我々『ヴィッオ』の栄えある贄として選ばれたのだ。もっと悦べ」
女性の前に立っていたのは、まるで半魚人のような怪物であった。
顔は魚、両腕は蟹。そして下半身はタコのように枝分かれしており、しかもその一本一本がウナギといういろいろな海洋生物をごちゃ混ぜにした姿は、まるで子供の創作物のようだ。
この化け物こそ、圧倒的な科学力で世界を股に掛け犯罪を行う国際犯罪秘密結社『ヴィッオ』の生物兵器。悪の科学の遺産である怪人であった。
「こ、来ないで！」
「ゲヘヘッ、俺様に声を掛けられ、さっきまではあんなに嬉しそうに付いてきたのに、何故、今更嫌がるのだ？」
大きく裂けた口を歪ませ、ウネウネと触手をうねらせながら女性に迫る怪人。
怪人が言う通り、声を掛けられ、この場所に付いてきたのは彼女の意思であった。もちろんその時の怪人の姿が、整った容姿の男性であったという事実を除けばの話ではあるが――。
女性が、男の正体に気付いた時にはもう遅かった。助けを呼ぶ声は波の音に掻き消されてしまい、ただでさえ賑やかなビーチには届くことはない。
怪人の目的は、組織の拡大。このように人々を襲い、秘密基地へと連れ帰ると、新たな怪人を生成するための母体にするのであった。
「いくら叫んでも無駄だ、こんなところに助けに来る奴なんていないさ。もう、諦めるのだな」
動けない女性に、怪人の鋭い鋏が伸びる。その瞬間、
「待ちなさいっ！」
突如、響き渡った声に、怪人の動きが止まる。
「誰だッ！　この俺様の邪魔をする奴は！　ぬおっ!?」
声がした方を振り向くと、怪人に向かって紺色のスクールバッグが投げつけられた。
「そこまでよ、ヴィッオの醜悪な怪人！　私が来たからにはアンタたちの思い通りにはさせないわ！」
バッグを怪人が手で撥ね除けると、声の主は女性と怪人の間に割って入るように立っていた。
「えっ……？」
自分を助けに来てくれた人物に、安堵の声よりも驚きの声を漏らす女子大生。
それもそのはずだ。助けに来てくれたのは自分と同じ女性。しかも、十代後半と言ったところであろうか、自分よりも年下であったのだから――。
「なんだ、貴様は？」
一方怪人は、突如現れ自分の邪魔をした少女を怪訝そうに睨みつけた。
十代特有のあどけなさが残っていながら、端正な顔立ちは凛々しく。怪人を臆することなく睨みつける切れ長な瞳からは、何やら強い意思がある。
肩まで伸びた青みがかった黒髪は毛先が切り揃えられており、真面目でクールそうなイメージを印象付けた。
胸元に実る豊かなDカップの胸に、キュッ、と引き締まった腰から緩やかなラインを描く小振りながらも美しく引き締まったヒップ。すらりと伸びた手足が少女のスレンダーな身体をよりいっそう美しく見せている。
その姿は美少女と形容するに値するだろう。だが何よりも目を引くのは少女の格好であった。この場に不釣り合いな学生服姿が、彼女の存在感をより引き立てている。
「アナタ、立てる？　立てるなら、早く逃げて」
「で、でも……」
「いいから早くっ！」
少女は振り返ることなく、背後で倒れる女子大生に向かって言う。
自分を庇うように立つ少女の言葉に戸惑う女子大生。しかし、再び年下の少女とは思えない強い口調で言われると、女性は少女の言葉に従い身を隠す。
女性が逃げたのを確認し、少女は安堵の息を漏らした。そして、一呼吸置くと、怪人を再び鋭い眼光で睨みつける。
「さて、次はアンタの番ね」
「どうやら、ただの女学生ではないようだな。貴様、何者だ？」
少女のただならぬ雰囲気を察したのか、怪人は警戒心を撥ね上げ、少女に問いただす。
すると、少女はその言葉を待っていたかのように、口元を釣り上げた。
「私は、アナタたちを狩る者」
――姉さん、私に力を貸して！
赤い宝石の付いたペンダントをギュッと握り締め、少女は凛とした声を響かせる。
「聖衣装着ッッ!!」
「ぬをっ!?」
少女の意思に呼応して、ペンダントから赤い炎が燃え盛る。炎は主の身体を包み、少女の姿を一人の戦士へと変えていく。
学生服は炎に焼け溶け、少女を一糸纏わぬ姿へと変える。だがそれも一瞬だ。炎は少女を包むと、スレンダーな身体をよりいっそう引き立てる白と黒を基調とした身体にフィットするレオタード状の衣装へと変貌する。
さらに変身は続く、すらりと伸びた手足にはフィットスーツと同じ材質のロンググローブとニーソックスが着飾る。そしてその上から、まるで炎のよ

うに赤いメカニカルなプロテクターが覆う。最後に黒色の瞳と髪が赤く染まり、炎のように真っ赤に彩られた髪を天使の羽根を模した髪飾りが着飾った。

まるで天使が羽根を広げるかのように、周囲の炎を飛散させ、少女は悪の魔の手から人々を守る守護天使へと変身を遂げる。

「アストレイアー・マリア！　ここに絢爛!!」

かつて国際犯罪秘密結社『ヴィッオ』に、大切な人の命を奪われた少女、弓江真莉亜。

彼女は唯一の肉親であり、科学者であった姉と仲睦まじく暮らしていた。両親はいなかったが、大好きな姉がいるだけで真莉亜にとっては幸せであった。

だが、そんな幸せも永くは続かなかった。ある日、姉が開発したアストレイアーの力を狙い、ヴィッオの怪人が姉の研究所を襲ったのだ。

学園から帰ってきた真莉亜が見たのは、焼け崩れる姉の研究所と、瓦礫の下敷きになり、ボロボロになった姉の姿だった。

下敷きになった姉を助けようと、必死に瓦礫をどかそうとする真莉亜。そんな真莉亜に姉は最後の力を振り絞り、怪人たちから守り通した守護の力アストレイアーを託した。

こうして、真莉亜は姉の敵を討つため、これ以上自分と同じ悲劇を生まないために姉から託された守護の力を使い、人々の平和を脅かすヴィッオの怪人たちと戦う守護天使になったのだ。

「ぬっ！　噂に聞いたことがあるぞ、我等の邪魔をする愚か者がいると、なるほど、貴様がそうか！」

自分たちの邪魔をする噂の変身ヒロインの登場に、ヴィッオの怪人も驚愕し、彼女のオーラに一瞬怯む。しかし、すぐに大きな口を歪め、下卑た笑みを浮かべた。

「何がおかしいの？」

「貴様を倒せば俺様も大幹部だ。こんなところで贄の確保なんかを命じられた俺様にもツキが回ってきたってわけよ！」

シュルルルッ！　怪人は言い終えると同時に、変身少女に向かってウナギ型の触手を伸ばす。

「ふんっ、アナタたちが考えることはいつも一緒なのね！」

向かってくる触手を最小限の動きでかわすと、変身少女はプロテクターに包まれたブーツに力を込める。

キィィンッ！　正義の意思に呼応して、ブーツが駆動音を上げると、ブーツの側面から紅蓮の炎が噴出す。

ダンッ！　蹴った岩肌を残り火で焼きながら、急加速して怪人の猛攻を避け、一気に距離を詰める。

「ぐぬっ！」

まっすぐに迫ってくるマリアに向かって、怪人は大きな鋏をまるでハンマーのようにブンッ！　と振り下ろした。しかし、そんな攻撃が今まで数多くの怪人との戦いに勝利し続けてきた孤高の戦士に通じるわけがない。

「来て、プロメスッ！」

ギュィィンッ！　マリアの声に呼応しグローブに着けられたプロテクターが唸り声を上げる。すると、変身少女の手の中で紅蓮の炎が弾けた。炎は形を変え、緋色の剣へと姿を変える。

「たぁあああっ！」

剣は紅蓮の炎を纏うと、振り下ろされた鋏を根元から切断する。そして、変身少女は怪人のがら空きの腹目掛け、強烈な回し蹴りをお見舞いした。

「ぐをっ！」

たとえハンマーで殴られたところで痛み一つ感じない怪人の強固なボディが、変身少女の蹴りに「く」の字に曲がる。さらに、ダメージを抑えきれず、怪人の巨体は真横に飛び、岩肌へと打ち付けられた。

「ふんっ、大口を叩いていたわりには、大したことないわね」

今まで一人で怪人たちと対峙していたせいだろうか、少々自信家な変身少女は岩肌に打ち付けられた怪人に剣の切っ先を向けて言う。

「小娘が調子に乗りおって！　今すぐ海の藻屑と変えてくれるわ！」

「あら、口だけは達者なのね」

残ったもう一本の鋏を岸壁に打ち付け、怒りを露わにする怪人。しかし、そんな相手にもマリアは決して怯みはしない。逆に相手を挑発する余裕すらある。

足場が悪い場所で警戒もしたが、敵は大したことない。自信過剰のマリアの脳裏にそんなうぬぼれが生じる。そして、その油断が変身少女をピンチへと追い詰めることになる。

「こっちだって！　この間いっぱい魚釣れたんだよ！」

「待ってよ、タッ君。ここ立ち入り禁止って看板が……」

「そんなの無視、無視！　大人だってよくここで釣りしてるんだから！」

突如背後から聞こえた幼い少年たちの声に、マリアは慌てて振り返る。すると呑気に釣具を持った少年たちがこちらへと向かってきていた。

「えっ！　な、なんだ？　ヒィ――――ッ！」

少年グループを先導していた一番やんちゃそうな少年が、戦場へと変わっているとも知らずに、マリアと怪人の前に顔を出してしまう。

怒りに震えるおぞましい怪人の姿に、声にならない悲鳴を上げ、腰を抜かす少年。そんな少年の姿を見て、怒りも忘れ、怪人は到来したチャンスに大きな口を歪ませた。

「どうやら勝利の女神は俺様に味方したようだな、アストレイアー！」

怪人は恐怖で動けない少年たちに向かって、ウナギ型の触手を伸ばす。

「馬鹿！　アナタたち早く逃げなさ……クゥッ！」

咄嗟に少年たちの盾になる守護天使。少年たちの代わりに触手の餌食となっ

著者近況　まさかいつも読んでいる二次元ドリームマガジンでお仕事ができるとは思いませんでした。若輩者ですが、精一杯書きましたので、これからもよろしくお願いします。

てしまった。紅蓮の刀剣プロメスを握る右腕に、ウナギ型触手がきつく食い込む。

利き腕に感じる鈍い痛みに、初めてマリアは焦りの表情を浮かべた。

「人質を取る予定であったが、手間が省けた。来てもらうぞ俺様のホームグランドへ！」

「あっ……くぅぅッ！　な、なんて力なの……キャァァッ！」

怪人は海へと飛び込むと、マリアを引っ張り込もうと触手に力を込める。

ズズ――ッ！　しかし、波で濡れた岩肌は滑って、踏ん張りが効かず、脚が引きずられる。

ついに足裏が岩肌から離れると、一瞬の浮遊感が守護天使を襲う。

「うぐっ、ごぼぼっ……んぁぁあっ！」

バランスを崩してバシャンッ！　と気泡に塗れながら派手に入水。視界が奪われ、スーツを浸透して肌に触れる水の冷たさに変身少女の抵抗が遅れる。その間に強い水圧を感じる速度で、怪人の思惑通り、深い海の底へと引きずりこまれてしまった。

「グヘヘッ、どうだ、俺様のホームグランドは！　気に入ってもらえたかなぁ～？」

変身したマリアの肺活量は常人の数十倍もあり、水中でも数時間の活動は可能だ。だが、どうやら相手の怪人はマリアの比ではないらしい。その見た目通り、水中でも呼吸ができるようだ。

水中だというのに、陸上よりも饒舌に語り出す怪人。これ以上敵をペースに乗せないために、マリアは反撃に出る。

――は、放しなさい……よ……ッ！

マリアは剣を左手に持ち替え、自分の腕に絡みつく触手を切断すると、海面へと戻ろうとする。しかし、そんなことを怪人が許すわけがない。

「うぐっ……ぐぅぅっ！」

海面へ向かい泳ぐマリアの背中に、鋏をハンマーのようにして打ち付けたのだ。身体の芯に響く鈍痛に、変身少女は苦悶の表情を浮かべる。

――コイツを倒さないと、ダメみたいね！

痛みに耐えながらも、変身少女は海底へと視線を移す。しかし、そこに怪人の姿はない。

「馬鹿め、どこを見ている。こっちだ！」

「ふぅっ、んんんっ！」

いつの間にかマリアより上にいた怪人は、再び変身少女の背中に鋏を叩きつける。強烈な痛みに耐えながら、素早く身を翻すマリア。しかし、そこに怪人の姿はない。

「こっちだ、ノロマ！」

「んぐぐ～～ッ！」

再び背中に走る痛み。怪人は素早く海中を泳ぎ回り、隙だらけの背中目掛け、何度も鋏を振り下ろす。

――コイツ、水中だと素早い！

先ほどまでの余裕がうって変わり、素早い怪人の動きに翻弄された変身少女は劣勢を強いられてしまう。

「ほらっ！　早く大事な空気を全部吐き出しちまいなっ！」

怪人の攻撃を何度も食らい続ければ、固く結んだ口の端から空気が漏れてしまう。それに、自由の効かない水中ではあまりにも分が悪い。

なんとかして海から上がらなければ、そんなマリアの思惑を裏切るかのように、怪人の攻撃は変身少女を海面から遠ざけていく。

「あぐっ……、ぐぅぅ……」

「ふははっ、逃がさんぞ、アストレイアー」

海面どころか、ついには海底へと叩きつけられてしまうアストレイアー。しかし、絶望的な状況でも彼女の瞳に浮かぶ、強い意志の光は消えてはいない。

――よし、今よッ！

変身によって強化された脚力と、それをサポートしてくれる聖衣の力を借りて、マリアは海底をダンッ！　と力強く蹴った。逆転の発想。マリアはあえて海底へと足を着けることによって、一気に海面へと逃れようとしたのだ。だが――、

「ククッ、逃がさないと言っただろう」

「んぐっ、んん――ッ!?」

勢いよく海面に向かうマリアの身体が、彼女の思惑と違い急停止した。

ビィ――――ンッ!!

砂底から伸びた無数の黄色い触手。海面へ逃れようとした変身少女の脚に絡みつき、守護天使の動きを封じた正体。それは――、

――な、何よ……これ……。

変身少女の身体を引っ張り、海底へと縛り付ける触手の正体。それは巨大なイソギンチャクであった。

まるで巨大な口のように開いた触手群の中央に、マリアを万力の力で再び海底へと引っ張り込むと、細長い無数の肉紐が彼女のふくらはぎに絡まり、その場に膝立ちの状態で拘束する。

「どうだ、俺様が作り出した巨大イソギンチャクの力は！　身動きがとれまい！」

怪人の言う通り、いくら脚に力を込めても、無数に絡みついた肉紐は取れることはなかった。それどころか、触手たちは変身少女のニーソックスに皺を刻みながら、肌が露出した腿へと登ってくる。

――何よ、コイツら……、ヌルヌルして気持ち悪い……ッ！

むっちりとした腿に絡みつく無数の触手。まるで無数の舌に舐められているかのような、嫌な焦燥感がマリアを襲う。鳥肌が立ちそうなおぞましい感触に、変身少女は堪らず顔を顰めた。

――コイツら、さっきからいやらしい動きばっかり……。

まるで乙女の肌を味見するように、何度も何度も細い肉紐が変身少女の太股を撫で回す。ゾクゾクッ！　と身体を這い上がってくる焦燥感に身を震わせる捕らわれの守護天使。

「うぅっ、んんっ、んぐぅ～」
触手に拘束された両脚にチクリッ、と針で刺したような痛みが走る。突然のことに驚き、マリアはまた口から空気を零してしまう。
――な、何今の？　……さ、刺された？　ひゃっ！　ま、また……。
さらにもう一度、今度はお尻と内股を針で刺された痛みが走った。マリアの集中力を乱すかのように、絶妙なタイミングでチクリ、触手に仕込んだ針で刺してくる。
――こんなので私の集中力が乱されるわけ……。
針で刺されたとは言え、痛みは一瞬である。この程度なら大したことない。マリアがそう高を括った途端、心臓が跳ね上がった。
――針で刺された箇所が……い、いや……身体が熱くなって……んンッ⁉
刺された箇所が熱を持ち始め、その熱は徐々に身体中へと広がっていく。しかも、それだけではない。熱く火照り始めた肌はどんどん敏感になり、守護天使を甘い肉悦が襲う。
――おかしいわ、こ、こんなの……身体どんどん熱くなって、あうぅっ！　コスチュームが擦れたところがむずむずする……ひぃいいいいいっ！
鋭敏になった肌は、フィットスーツの裏地が擦れただけで悲鳴を上げた。それだけではない、感覚はどんどん鋭くなり、晒された肌を水流が撫でる度にむずむずと疼き出す。
「ヒヒッ、どうやら効いてきたみたいだな。身体が疼いて堪らねえだろう？　そいつの毒針には催淫効果があるんだよ！　ヒャハハッ、今からもっと気持ち良くしてやるぜぇ～ッ！」
――媚薬だなんて……、下衆な怪人の考えそうなこと……ね……うぅっ、こ、こんなの……ふうぅ……集中さえすればどうってこと……ぁあッ！
怪人の卑劣な攻撃に、よりいっそう抵抗心を燃やすマリア。しかし、冷たい海水が肌を掠める度に、全身が愛撫されているような錯覚を覚え、身体が自然に震えた。
感じない部分がどこにもなくて、守護天使からは抵抗する力を奪っていく。
――だ、駄目よッ！　耐えるのマリア！　こんな媚薬なんかに……くぅっ、触手が動いて……んあああっ！
「ごぼっ、んぐっ、ぐぅぅ……ッ！」
敏感になった身体を触手に強く擦られ、堪らず空気を漏らしてしまう
悶え苦しむ変身少女を追い詰めるように、新たな襲撃者が襲う。
「はうぅっ！　んぐっ、んんぅ～ッ！」
腰下から伝わってくる嫌悪感に、つい口が開き、大事な酸素をまた少し吐き出してしまう。いつの間にか伸びてきた触手が、フィットスーツに割れ目をうっすらと浮かばせたヒップに、頭を擦り付けてきたのだ。
スーツ越しとは言え、ブヨブヨしたゼラチン質の触手がヒップの割れ目に身を埋めてくる嫌悪感は相当のものだ。しかも、スーツを巻き込み、小刻みに震え始めれば媚薬によって敏感になった身体には堪ったものではない。
他の触手たちも、変身少女の細腰まで登ってくると、緩やかなカーブを描く臀部を撫で上げてくる。
「んっ、んんっ……、ぐぅう……ふぅうううぅっ！」
気色の悪い肉紐は変身少女の臀部を、まるでパンでも捏ねるかのように、上下左右に捏ねくり回す。尻臀が左右に大きく開かれれば、その分最初到達した触手が割れ目と深く身を埋めた。
「ンッ、ンゥウウウンンッッ⁉」
尻臀の間にすっかり身を埋めたブヨブヨの肉紐は、その奥にある窄まりにスーツ越しに頭を押し付け、今まで以上に身をブルブルと身を震わせた。
――こ、コイツ、なんでこんなところを……ッ！
今まで誰にも触られたことのない不浄の孔を布越しに刺激され、身体中を駆け巡る焦燥感に戸惑いを隠せない肛辱の守護天使。
「なんだ、尻を弄られて感じてるのか？　淫乱な正義のヒロインもいたもんだな」
初めての肛辱に、身を震わせて悶える変身少女を見て、怪人が下卑た笑みを浮かべた。
――いい加減に……、しなさいッ！
触手に尻を嬲られる嫌悪感と、恥ずかしさに顔を真っ赤に染めると、肛辱の守護天使は触手を払いのけようと手を伸ばす。
しかし、いくら手と剣で払いのけようと、二本の手では無数にある触手に追いつけない。次から次へと新しい触手が伸び、変身少女の太股や臀部を嬲り続ける。さらに、醜悪な肉紐は払いのけようとした変身少女の両腕に絡みつき、一気に二の腕まで這い上がるとグイッ、と引っ張り始めた。
「んぅんンン～～ッ！」
両脚同様、両腕までも、触手によって拘束されてしまい、恥ずかしい四つん這いの体勢を強要されてしまう。
――冷静になるのよ、平常心を失ったら余計にアイツの思う壺だわ。
さらに悪化してしまった状況に眉を寄せるマリア。なんとか打開策を思いつこうと思考を巡らせる。しかし、そんな暇など怪人が与えてくれるわけもない。
「ふぅううンンッッ⁉」
密着スーツに包まれた魅惑のVゾーンを唐突に触手が撫で上げ、身体中を駆ける不気味な感触にビクンッ、と腰が跳ねた。
――そんな所まで……ッ！
恥ずかしい乙女の花園。女性にとってもっとも大事な箇所はスーツの力によって守られている。それ故に、直接そこに触れられることはないだろう。
だが、もっとも敏感な箇所をスーツ越しとは言え、媚薬に侵されている状態で弄られれば……。考えただけでも怖くなる。脳裏を掠めた悪夢に、捕ら

われの守護天使は慌てて尻を突き上げ、逃れようとする。
――こ、今度は……お尻……イィ……ッ！
しかし、そうなれば尻溝に食い込む肉紐がより密着し、括約筋を解すかのように震えるのであった。
「ヒヒッ、大事な酸素を漏らしちまっていいのかい？」
「んぐっ、ぐうぅぅっ！」
怪人に煽られギュッ、と口を固く閉じる変身少女。だが、そんな抵抗がより陵辱者に楽しみを与えてしまう。
「そうそう、そうやってちゃんと我慢しなきゃな、へへっ」
怪人がいやらしく口を歪めると、巨大イソギンチャクの触手はよりいっそう激しく身をくねらせた。
こそばゆい肛辱に腰が下がれば、下から伸びてきた触手に密着スーツ越しに淫裂を撫でられ、堪らない刺激に固く閉ざしたはずの口から息が漏れてしまう。
触手の板ばさみにあったマリアは、それでもなんとかして巨大イソギンチャクから逃れようと身を捩った。
「なんだぁ～？　そんなに尻を振って、誘っているのかぁ～？　ケヘヘッ！」
マリアの姿を見て嘲り笑う怪人。「違う」と否定したい変身少女であったが、水中でこれ以上酸素を無駄にすることはできず、ただ怪人を睨み返すことでしか抵抗できない。
そんな変身少女の抵抗を嘲笑うかのように、新たな動きを見せる怪人。大きく口を開くと、プシュン、プシュンッ！　と星型の物体をマリアに向かって飛ばす。
「んんっ！　ゲホッ、ぐふぅっ……あぐぅうん……あぁ……」
密着スーツを押し上げる、二つの果実に星型の物体が張り付いた瞬間、マリアは顔を撥ね上げて悶え苦しむ。
――こ、これ……ヒトデ……？　あんんっ、胸に張り付いて……ふぁああぁぁァァッ！
怪人から発射されたのは掌ほどのヒトデであった。
ヒトデは淫毒によって感度が数倍にも跳ね上がっている両胸に、小さな肉粒がぴっしりと生え揃った裏側で張り付くと、ギュウゥゥッ！　と身体を窄め、まるで搾り上げるかのように豊満な肉鞠を何度も揉み解す。
――おっぱいは……駄目ッ！　今は……あくぅんんっ！
理想的なDカップの円錐型バストは、マリアにとってもっとも弱い性感帯の一つであった。
媚毒によってさらに敏感になった弱点をヒトデが搾り上げる度に、乳房が怯えるかのように震える。
見た目通りの柔らかな乳房にヒトデの手が沈むと、ヒトデの全身でも包みきれない柔肉が手の間からくびり出る。
敏感な柔肉を蹂躙されれば、心地良い快感が身体中に広がっていき、守護天使の抵抗心を蝕んでいく。
――あんっ！　は、離れて……ッ！
このままではまずい。なんとかしてヒトデを剥がそうとするも、四肢が拘束されている状態ではそれも叶わない。必死に身を捩るも、両胸にがっしりと食いついたヒトデは決して離れることはなかった。
ヒトデが胸を搾る度に、密着した肉粒がぷちゅっ、と潰れる感触が薄いフィットスーツ越しに鮮明に伝わってくる。その度にゾクゾク、と快感が込み上げ、守護天使の身体がビクンッ、と跳ねた。
肉粒に表面を愛撫され、ギュウッ、と丹念に揉み解される度に、乳腺までもが刺激され、甘い痺れが身体中に広がっていく。
どんどん広がっていく愉悦感に、固く噛み締めた唇が戦慄く。駆け巡る快感に引き締めた表情が緩みそうになる。
それでもマリアは必ず訪れる反撃のチャンスを信じて、必死に耐えるしかなかった。だが、そんなマリアの意思とは裏腹に、媚薬に侵された身体は与えられる快楽に素直に反応してしまう。
ヒトデの搾乳責めに、豊かな双丘の頂点は固くしこり勃ち、自己主張をするかのようにフィットスーツを押し上げていた。
――ひぃっ！　ち、乳首ぃぃっ……駄目ッ！　か、噛まないで……えぇ……ひゅぅうんんッ！
自己主張をする敏感突起に、ヒトデが吸い付く。裏側に付いた口が大きく開き、固く尖ったマリアの小粒を丸呑みにした。
「ぐぅっ……うぅっ、――ッッ!!」
ヒトデの口内はまさに悪夢そのもので、小さな歯が無数に生え揃い、吸盤のように突起乳首に吸い付いてくる。
チュパッ、クチュッ！　媚薬で敏感になった、固く尖った乳首に走る快感。ヒトデの口内でコロコロ、と乳首を転がされる度に、顔が跳ね上がり、一瞬視界が真っ白になる。
――そ、そんな……強く……ッ！　す、吸い付いちゃ……あふぅんんッ！
敏感突起を弄られると、冷たい水の中だというのに、じんじんと身体が疼いて熱くなっていく。
胸を乱暴に揉み解し、乳首に小さな歯を立ててくる。普段なら痛いだけの搾乳責め。しかし、媚薬によって敏感になったマリアの身体は、そんな痛みすらも甘美な愉悦へと変えてしまう。
「ぶくっ……んっ、ぐぅ……ッ！」
乳首に走る痛みに意識が向くと、今度は尻溝に埋もれたイソギンチャクの触手が震え、甘い痺れが可愛らしく突き上げられたヒップを戦慄かせた。
さらに内腿を優しく撫でられれば甘美な肉悦に、スーツにはっきりと浮かび上がった秘裂が小さく口を広げる。
――イヤッ！　放して、放してぇぇぇぇぇ……ッ！
両腕が自由なら、今すぐヒトデと触手を払いのけたい。必死に身体を捩るもしっかりと海底に固定された手足は

——か、勝手なことを……ッ！

怪人の言葉に抗議するように、真っ赤に染まった顔で、怪人を睨みつける。だが、自然と上目遣いになってしまう体勢では、よりいっそう怪人を喜ばせる結果になってしまった。

「ヒヒッ、ほら、大事な酸素だ。ちゃんと咥えとけよ！」

ナマコ触手を引き抜かれそうになると、マリアは慌てて、顔を前に出して頬に力を入れた。傍から見れば、その姿はまるで恋人のそれを愛おしそうに追いかけて咥えているようにも見える。

——マリア、これは、反撃の機会を得るために仕方なくよ……そう、仕方なくやってるの。

情けない姿を晒す自分自身に、必死に言い聞かせると、マリアは酸素を求めナマコ触手をしゃぶる。だが、怪人の卑劣な責めはここからが本番であった。

「んっ、ふうぅ……っ、ん？」

肉疣から吐き出される酸素を逃がさず取り込んでいるはずなのに、息苦しさがマリアを襲う。

最初は触手を咥え込んでいるからだと思っていたマリアだったが、徐々にそれが勘違いではないことに気付く。

——もしかして、酸素の出る量が少なくなってきてる？

マリアが異変を感じ取ったことを悟ったのか、怪人が再び口を開いた。

「どうやら酸素の出が悪くなっているのに気付いたみたいだな。お前の幼稚な舌の動きにも慣れてきちまったみたいだ。ケケッ、酸素が欲しかったら、もっと舌を使っていやらしくやらないとなッ！」

怪人の言葉に、マリアは目を大きく見開いた。

触れるのすら躊躇われる気持ちの悪い触手。一刻も早く吐き出してしまいたいのに、それに奉仕するなんてできるわけがない。

「んぐっ、ふうぅ……うっ、げほっ、ぐうぅぅ……」

だが、息苦しさを感じれば、頭の中で酸欠による激痛がフラッシュバックする。マリアの中では溺れる恐怖がすっかり焼きついてしまっていた。

今にも泣き出しそうな顔を浮かべた敗北ヒロインは、ゆっくりとだが舌をナマコ触手へと這わせ始めた。

「んっ、れるっ……じゅくっ、ちゅぷっ……くちゅっ」

プルプルと震える肉疣に舌を這わせ、肉疣の先端で、口を閉じてしまった噴気孔を舌で穿る。口いっぱいに広がる嫌な苦味に舌が痺れるが、再び噴気孔から僅かな空気が漏れ出した。

「へヘッ、そうそうその調子だよマリアちゃ～ん。ほら、もっと激しく舐めて！　唇も使わないとまた酸素が出なくなっちゃうよ～。ケェヘヘッ！」

再び閉じかけた噴気孔に、マリアは慌てて舌を這わせ、唇を使って、ナマコ触手をしゃぶり直す。

「ちゅっ、ちゅく……ちゅるっ、れるっ、んっ、んちゅ……」

クチュッ、ジュルッ、ジュルルルッ！口腔内で暴れまわるナマコ触手を唇でちゅるちゅる啜り、捕まえる。醜悪なナマコに躊躇しながらも舌を絡ませ、無数に生えた肉疣一つ一つをマリアは丹念に舐めていく。

変身少女の熱心なフェラチオに、ナマコ触手はビクンッ、喜びのたうつと、肉疣が舌に絡まり、口蓋を撫で擦る。

「うぐうぅぅ……うっ、んんぅ～ッ！」

口内にねっとりと絡みつく肉疣の感触に、窄めた唇からは、くぐもった呻きが漏れ出す。

——どうして……い、いやな……はず……なのに……ッ！

ドクンッ！　とマリアの心臓が跳ねる。強要されたフェラ行為。本当は今すぐにでもおぞましい触手を吐き出したいはずなのに、ジュルジュルと口内から頭の中に響くいやらしい水音を聞く度に、妙な興奮が込み上げてくる。

「ヒャハハッ、随分エロイ顔をするようになったじゃねーか、ほら、ご褒美だぁ！」

「ふうぅ……んっ!?　んぐうぅぅぅ……ッ!!」

気が付けば怪人をきつく睨みつけていたはずのマリアの瞳は潤み、身体を熱くする興奮に蕩けていた。

怪人はそのことを指摘すると、変身少女の柔肌を味わうヒトデと触手に、一斉に命令を下す。

スーツの上からマリアの胸に張り付いたヒトデは、ギュウッ、ギュウッと腕を柔らかな肉鞠に何度も食い込ませ、揉み解していく。

——ひゃうっ、そんな優しく……ふぁあっ、今度は激し……イい……ッ！

今までの責めとは違った緩急ある搾乳責めに、乳房は悲鳴を上げるように震え始めた。そんな震える乳肌をスーツ越しに、ヒトデの裏側に生えた肉疣が撫で上げれば、心地良い快感が全身へと浸透していく。

空いたもう片方の胸はスーツの間に侵入したウナギ型触手が直接根元から巻き付いて、グイグイと搾り上げた。胸の芯にまで届く、痛いほどの快感。

さらにウナギ型触手はピンッと勃つ乳頭を咥えると、ザラザラしたウナギの舌が敏感な突起に擦れて、甘い痺れが身体中を駆け巡る。

「んぐうぅっ！　んんっ、ふうぅ……あっ、ゲホッ……くうぅぅ～～ッ！」

両胸から襲ってくる別々の刺激に、マリアは堪らず目を瞑る。

甘く痛い快感から逃れようと身を捻る。しかし、胸にしっかりと張り付いたヒトデとウナギはその程度の抵抗では、官能的な柔肉を逃がしたりはしなかった。

——はうぅっ、ひゃぁ……ちょ、ちょっとどこに……、んっ、あぁ……ッ！

動きを見せたのは胸の触手だけではなかった。他のウナギ触手も一斉に動き出す。

数本のウナギ触手は、膝立ちの体勢

で辛そうに震える彼女の美脚を標的に据えた。
密着スーツのニーソックスの間に身体を潜り込ませると、細い脚にとぐろを巻く。ニーソックスにウナギ触手の身体が浮かび上がり、フェティッシュな皺を刻んでいく。
貪欲なウナギ触手は、反撃の際ブーツをパージしたことによって、露わになったマリアの素足にも目を付ける。与えられる快感に、ピクピクと可愛らしく震える足指を咥え込むと、口の中で転がした。
「あひっ、ごほっ……ぅ、ひゃ……、あぁっ、あんうぅ……」
予想だにもしないところからの刺激に、マリアの口から大事な酸素が漏れ出す。
慌ててナマコ触手を再び咥え込んで、酸素を得ようとするが、他のウナギ触手が変身少女に落ち着かせる暇を与えない。
――ひゃぁあぁっ、あっ、あひっ……、お尻ぃ……で、出てくるぅううっ、んっ、んんぅ――ッ！
ずぶっ、ずぶぶぶっ！　恥ずかしい排泄孔に身を埋めるウナギが突如、進行方向を変えた。
今まで逆方向の挿入に苦しんでいたアナル。それを本来の排泄方向へとウナギが戻っていく。押し広げられた腸粘膜があるべき方向へと引き伸ばされる排便行為にも似た快感に、肛辱の守護天使はお尻を振って悶絶した。
――ひぎぃぃ……ま、また、入って……んぁぁあぁあぁッ！
だが、決してウナギは狭いアナルから抜け出そうとはしない。入口付近まで戻ると、再び奥を目指し進み始めた。
ズルッ、ニュルッ、ズブブッ！　まるでピストン運動のように、何度も何度もウナギ触手は尻穴を慣らすように動き続ける。
腸粘膜を押し広げられ、擦られる。その度にマゾヒスティックな肛悦が変身少女を襲う。
――ひぃぃぃ……ッ！　やぁっ、ひゃぁあぁあぁっ！　そんな……そっちも……んんっ、やめっ、クリ……トリス……苛めないで……ぇ……ッ！
耐え難い肛辱の激感に、変身少女が悶絶すれば、ニュルルルッ！　今度はヒクヒクと震える淫裂を擦られ、皮が剥け固くしこり勃つクリトリスをウナギ触手に咥えられ、引っ張られる。
真下から一気に脳天へと駆け巡る激感に、キュンッ、と子宮が疼く。大量の恥液がヒクヒクと震える淫裂から溢れ出し、敗辱の守護天使は細腰をガクガクと震わせた。
「おいおい、いくら気持ち良いからってお口の動きを止めちゃ駄目だろマリアちゃ～ん」
荒波のように押し寄せてくる快感に、ナマコ触手への奉仕が止まる。
パチッ、パチチチチィッ！　その途端、変身衣装の中で、青白いスパークが飛んだ。
「うぐぅうううぅぅ……ッ！　うっ、んぐっ、げほっ、ぐあぁぁあぁあぁぁぁぁっ!!」
再びウナギ触手が、マリアの身体に電流を流したのだ。
先ほどと違い、電撃は変身少女の意識を刈り取るというほど強力なわけではなかった。しかし、それでも二度の絶頂によって敏感になっている身体、それも特に敏感な性感帯への刺激はあまりにも強烈過ぎた。
ビクッ、ビクンッ！　柔肌が何度も跳ね上がる。電流を流された箇所にはいつまでも熱が残り、疼いて止まらない。
ぐちゅっ！　水中だというのに、はっきりと濃厚な淫蜜が溢れる感触がマリアにはわかった。
――ひゃぁ、あっ……えっ？　な、なんで……ぇ……？
苦痛でしかないはずの電撃が変身少女の被虐心を刺激し、身体が昂揚していくのがわかった。キュンキュンと疼く子宮に戦慄く膣壁。
「あぐぅ、んんんっ、んぐぅ、んん～っ、ふぅ……うぅ……ッ！」
このまま電流を流されたら、後戻りできないところまで堕ちてしまう。そんな恐怖心がマリアを襲い、変身少女はナマコ触手に塞がれた口で、悲痛な叫び声を上げる。
「ヒヒッ、止めて欲しかったら、休んでないでちゃんと舐めやがれ！　ほらほら、早くしねえともっと電気が強くなるぜ、へっへへへ！」
パチッ、パチパチッ！　流される電撃に怯え、マリアは慌てて怪人に言われた通りナマコ触手に舌を這わせた。
しかし、電撃によって麻痺してしまった身体は思い通りに動かず、ナマコへの奉仕もたどたどしいものになってしまう。もちろん、そんな生半可な奉仕に、怪人が納得するわけもない。
「ケケケケッ、真面目にやりやがれ！」
「ふぐぅうううぅぅぅ――ッ！」
バチッ！　赤く腫れた乳頭を電撃が襲う。まるで、神経に直接針を突き刺したかのような痛みがマリアに走る。
ジンジンと痛みと熱に疼く勃起乳首。そんな可愛らしい果実をウナギの舌とヒトデの口で嬲られれば、湧き上がる恍惚感が変身少女の思考をピンク色に染めていく。
「ヒャハハハッ、休んでるんじゃねえよ！」
「あぐぅうううっ、ふぐぅうっ、んんっ、んぐうううぅぅぅぅッ!!」
バチチチチチッ！　今度はウナギ触手に散々嬲られたアヌスへと電流が流された。腸粘膜を通して伝わる激感に、尻臀がビクッ、ビクッと大きく跳ねる。
ズブッ、ズブブブブブブッ！
「ふぅっ！　ん、んンゥゥゥ――ッ！」
再び進行を開始する電気。異物を吐き出そうにも、電流によって馬鹿になってしまった括約筋ではそれすらも叶わない。
真下から突き抜けてくる、強烈な肛

悦に、変身少女の全細胞が歓喜する。
——ふ、深いぃぃ……っ、んあっ、あっ、ふぁああんっ！
背筋をピンッと伸ばし、アヌスを蕩けさせる掻痒感に身悶える変身少女。奥深くまで侵入した電気ウナギがのたうち回れば、薄い肉を隔て、子宮にまで刺激が伝わった。
媚薬に侵され、散々焦らされた子宮は、直接の接触がなくともその刺激だけで歓喜する。込み上げてくる魔悦に腰をビクンッと震わせて、悶絶する変身少女。
——ひぃぃ……ッ、そ、そんな……なんで……、お尻……弄られて……気持ち良いなんて……あんんっ、また、電気ぃ……イィ……ッ！
痛みと快感が混ざり合い、マゾヒスティックな快感が昂揚していく。尻穴を穿られるのも、勃起乳首をしゃぶられるのも、痛くて気持ち良い。押し寄せてくる快感に、意識が混濁していく。
クチュッ、チュッ、ジュルッ！ 高まる興奮に舌が勝手に動き出す。正義の変身ヒロインとは思えない快楽に蕩けた表情を浮かべ、マリアはグロテスクなナマコ触手を舐めしゃぶった。
「ヒヒャヒャァ！ 良い顔してるじゃねえかマリアちゃ～ん。じゃあそろそろこっちにも挿れてやるよ」
「ふぐうぅぅぅっ!? んっ、うんぅうううううッ!!」
ヒクヒクと震える淫裂。そんな蜜壷の入口を散々嬲っていた電気ウナギが奥を目指し、身体をくねらせながら進み始める。
ぷしゅっ、ぶぷっ！ 充分に濡れた蜜壷は処女だというのに、電気ウナギの身体を容易に飲み込んでいく。電気ウナギが奥に進む度に、情けない音を立てながら、結合部からは白く濁った愛蜜が溢れ出した。
散々焦らされた膣肉をウナギが押し開いていく痛みと快感。甘い快楽にマリアは自然と腰を振った。初めて味わう肉悦に、身体は痺れ、力が抜けていく。
電気ウナギがのたうつ度に、敏感な肉壷からはトロトロの愛液が漏れ出した。
——ひゃっ、な、なにこれ……こ、こんなの……はじめ……てぇ……うあっ、あぁあああっ！
薄い肉を隔て、秘穴とアナルで電気ウナギがのたうち回れば、性感は天井知らずに高まっていく。腫れ上がった乳首に歯を立てられる痛みすらも気持ち良い。
スーツの上からでもわかるほど腫れ上がったクリトリスを弄られれば、海中だということも忘れて、赤髪を振り乱し悶絶してしまう。
——ひゃうぅぅっ、んんっ、こんなの耐えられ……ないぃぃっ！ お姉ちゃん……助け……て……ッ！
熱く燃え滾った性粘膜に電気を流されれば、被虐心が苦痛すらも、強烈な快感へと変えてしまう。駆け抜ける激感に、マリアの頭を真っ白に染めていく。
——んあっ、ああぁ……ッ、そんな……電気……流され……るの、気持ち良いなんて……ふぁぁ……姉さんに託されたアストレイアーの姿でわ、私……こんな感じて……んあぁあああああ……ッ！
初めて経験する激感に、変身少女は無様にも、今は亡き姉に助けを求め出す。そこに、気丈な守護天使の面影などどこにもなかった。
「ふぅ、うぅ……んぅんン～ッ、んふっ、あっ、くうぅんん」
既に苦痛の色が消えた甘い呻きがマリアの口から漏れる。入っては出てを繰り返す、電気ウナギのピストン運動に、子宮はさっきからキュンキュンと疼きっぱなしだ。
——こ、こんなの……む、無理ィイイイッ！
変身少女の正義の心すらも蕩けさせる肉悦。甘美な疼きに、守護天使の身体はすっかりメロメロだ。
——イっちゃう……また、さっきみたいに……イクぅぅ……ッ！
迫り来るアクメの予感。マリアの膣壁が戦慄き、濃厚な愛蜜が溢れる。背筋を反らして悶える変身少女。
——姉……さん……、ごめんなさい……。
キュンキュンと軋む子宮。思考が真っ白に染まり、まさに守護天使は果てようとしていた。だが——、
「あぐっ、うぅ……んッ!? ふぅんん……ッ?」
突如、変身少女の媚肉を味わっていた触手たちがその動きを止めたのだ。
ちゅぷんっ！ 電気ウナギはマリアの肉壷から出ていき、他の箇所を責めていた触手やヒトデの動きも止む。
——な、なんで……イけそうだった……のに……。
マリアが最初に思ったのは、快楽地獄から解放された安堵よりも、絶頂寸前でお預けを食らった不満感であった。
離れていくウナギ触手を名残惜しむかのように見つめ、切ない焦燥感に、ビクビクと腰を動かすマリア。
そんな、変身少女の様子を見て、怪人が口を釣り上げる。
「ケケッ、そんなもの欲しそうな顔をすんなよ。これから頑張ったマリアちゃんにご褒美をあげるんだからよ～」
——な、なに……ッ?
突然の事態に、快楽によって麻痺した思考はまとまらず、戸惑う変身少女。
「——ッ!?」
シュルルルッ！ 戸惑う変身少女の前に、新たな触手が突き付けられる。
ウネウネとマリアの眼前で海中を漂うそれは、不気味な半透明な触手であった。
透明でわかりにくいが、まるで人間のペニスのような形をした触手であった。だが、決定的に違うのは、表面にはおぞましい無数の凹凸が刻まれていることと、その太さが自分の腕よりも

夏だ！プールだ！
競泳水着レズエロだ！

わーい♡
やっとほーかご
だぁ――♡

プール
早く早く♡

今日は
バタフライ
教えて
下さいねー

ちょっと何
あの転校生！

水泳部

入部早々
牧野お姉様に
べったり!!

ああ
アレちょーっと
ムズかしいぞ？

ストーップ！

新入生は
グランド
三十周！

部長もみんなも
大会近いんだから
ジャマしないでよね！

もっと！発情スプラッシュ！

Motto Hatsujyo Splash!

漫画 COMIC／おおたたけし

え――っ!?

一年は
体力づくり！
行って行って!!

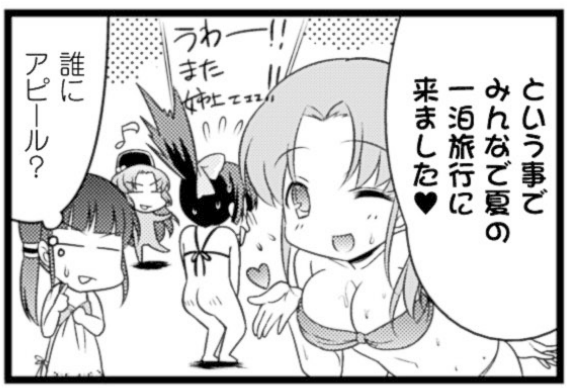
あーんムリー
ぜはー!!
ガンバれ♡
みなせ
ひからびちゃうよぉぉー
せりはー!!
皆が帰ったら戻ってきていいぞ待ってるからな
うんっ♡
おねーさまと二人きりー♡
ポポポッ
コポッ
水中から見るお姉様最高ー♡
至福♡
みなせ
うーん…イマイチだなァ
やっぱまだ筋力不足かなー
ぷはっ

じゃあじゃあ♡
なっ 何コレっ!?
パワーアップですう♡
!
ごくっ
!?
ぐぐっ
濃縮男貝(おとこがい)エキスだよ――♡
変なの生えてきたっ！
体を男子っぽく変態すれば筋力上昇だよー♡
ゴポポ…
ゴポポ…
ええっ!?
これってまさか…っ
水瀬(わたし)の種族は両性だから
おねーさまがどっちでもいーですう♡

すごい長ーい♡
あっ
ちょっとだけペロってしちゃうんだから♡
私といっしょだと水中で息できるでしょ♡
ひゃっ
そ…そうなの？
ぐるじ――…
下から……
あ…
はっ…！
すご…
男のコのって意外とビンカン…なんだ…
あっ
…って！
こんな体じゃ大会に出られないでしょっ!!
大丈夫ですっ♡
男貝のエキス全部出せばもどるよっ♡
上にそ――っと…♡
ココにいっぱい出していーのですよっ♡

ホラ おま こもう トロけちゃって ますぅ♡
し…しかたないわね…
あは♡
も…戻る為だからね…
あぁあっ
うわ…っ
熱くてやわらか……っ!!
おっきいおチ ポです……♡
先っぽもっと子宮とくっつけていいですよ♡
で…でも…
あ――んも――っ
水中だいしゅきホールド♡
!?
おっ…おチ ポが…
奥まで…っ!!

夏イベ!!!



海にはふしぎな生き物がまだまだたくさん潜んでますね!

怨霊退散!!

ふたご少女

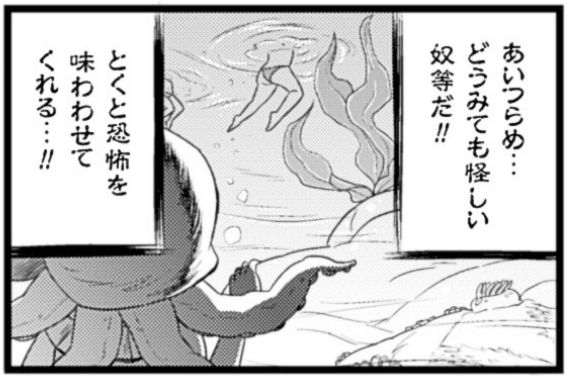
十二巻

海の謎の深海怪物

漫画 COMIC／嘉納(かのう)あいら

あの日の憂鬱

忍び寄る…!?



如月珠音（きさらぎたまね）
如月神社の双子巫女の姉。おっとり巨乳で、男の霊に憑かれやすい。

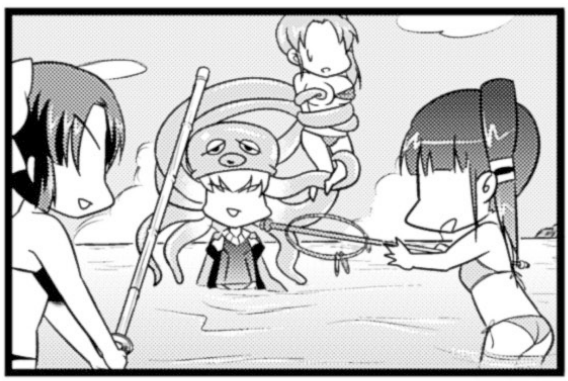
如月鈴音（すずね）
如月神社の双子巫女の妹。霊力は弱いがしっかり者の常識人。

真中（まなか）
如月神社に押しかけて居候している17歳。珠音の中学時代の同級生。

侵略つながり

真守（まかみ）
真中の姉。海外からやってきた謎多き女性。催眠術を使う。

死神（しにがみ）
如月神社に居候する死神。極度の対人恐怖症。



どうやらガチ

前号までのあらすじ

マキナは秘密結社ＦｅＴＵＳのメンバーだった。ショックを受ける睦月と彼を狙うバネイリ。立ち向かうエンジュはピンチに陥るが、そこに魔族ルシアが突如乱入、バネイリを破壊して睦月を救うのだった。

……

うん
そうだよ
ママ

運命をひとつ
打ち破った

一手目を打つのが
遅れたけど今回で
取り戻したよ

言ったでしょ？
相手が天使でも
なんとかなる
ものさ

近々
次の段階に
移るよ

ふふふっ
また一歩
睦月クンに
近づくんだ

ぽう…

いまは三者
横並び

目的を達するには
ボクたちはわずかばかり
準備がいるから
少し出遅れているかな

ま すぐに
取り戻せるケド

なにせ……

睦月クンを
いっちばん
好きなのはボク
なんだからね♪

思春期なアダム

第12話

EVIL EYES

天使・魔族・FeTUSに囲まれて睦月はてんてこまい!?

AMAGAI YUKINO
天海雪乃

原作：さかき傘

web版コミックヴァルキリーでも連載中!
http://www.comic-valkyrie.com/

いいわね
睦月

う……うん

昨日は結局
逃げられたけど
絶対に伊部草から
話を聞きだすのよ

アタシが脅すだけじゃ
口を割りそうにないし
アンタから話しなさい

FeTUSの
内情やあの女の
目的ついて

でも……
やっぱりなんて
言ったらいいか
……

ニッ

情けないわね！

昨日はあんなに仲がよかったじゃない〜〜

ちょおっとピロートークの続きを教えてもらうだけよ簡単でしょ

なっ…仲がいいってべつに……

来た！

ばぁんっ

おっはよ〜う藤田君エンジュちゃん！

昨日は早退してたけど大丈……

ばぁんっ

……どしたの？

ギャーギャー

とにかく強気で押すのよ！

ほら言って！

あの……伊部草さん……

なに？

あ…あの…

……その…

えっと……

……お

新たなる
魔法少女陵辱
ストーリー開幕!!
イレギュラー？
何それ聞いてないわよ
…確かすでに13番目と14番目とかいうのがいるって…
…まぁいいわ私達の仕事の邪魔しなきゃ関係ないわよ
……
the magical girl TOMOE
魔法少女巴
漫画 COMIC ひぐちいさみ
どうしたの？甘露
スマホ返すわ
こっちの話よ
で？そっちの方は？
うんやっぱりあの娘怪しい……
！
キャーッ！

ああっ！
いっ嫌ぁ…
んっ！
ウジュ
ウジュ
はあっ
ハッ！
ちゅくっ
ちゅくっ
はあっ
ふむっ…
んんっ！
…んっ！
ビクッ！
ウジュ
ウジュ
ひっ！
！
チョウダイ
……コウコツ
…ノ…シネン
…チョウダイ
ゴリ…
やめ…
あうっ！
ボロッ！

!?
あっ
ああ
ああ…
やめてぇ…
いやぁ…
ゴチュン!
あひっ
おっぱい
吸っちゃ
いやぁ…
はっ

ビクン
ビクン
ニュルルル
はっ
はっ
はっ
アへ～…
は 入ってくるぅ
…子宮の中にぃ
何かがぁ
入ってくるぅ～
……
パパ
はへ!?
ふぁ…！
はっ！ はぁっ
あぁぁぁぁっ！

ポッ
ガックッ
しかしあいつら次から次へと女の子襲って許せないよ！
あら 巴(ともえ) ガラにもなく熱くなって
襲われたならもう思念は吸われてしまったはずよ！
その後襲った相手に乗り移って逃げる気だわ！
あーもう安っすい賞金首の癖に面倒くさいったらありゃしないわ！
どうでもいいけど甘露文句ばっか
うっさいわ！
ズルズル
ズルッ
ズルッ
ズルッ
ベッ
ベッ
ちゅるん

騎士団長フェリアとその師ノノン

支え合う二人の心を
へし折る異種姦種付け!!

著者近刊
『女騎士エルザの復讐
終わりのない娼婦淫獄』

好評発売中!

聖騎士牧場
家畜に堕ちた戦姫たち

第四話『魔物』

小説/NOVEL 上田(うえだ)ながの
挿絵/ILLUSTRATION A.S.ヘルメス

バガルドに命じられた男達によるアルガスタ騎士団員達への同時陵辱行為から数日後――団員達は城外れの牛舎にて、全裸で四つん這い、そして首輪という状態で拘束されていた。

いや、それだけにとどまらない。女騎士達の口や膣には、長いチューブが挿し込まれている。

チューブの先にはちょっとした小屋くらいの大きさはありそうなタンクが置かれている。そのタンクの中には、尋常でない程多量の白濁液がこれでもかという程になみなみと注がれていた。国中の男達の白濁液を集めたものである。

そんなものがチューブを通じて――。

「ぽっご……おぽっ！　ごっごっごぽぉおお！」

「ぶごごっ！　ぶびょおおお♥」

アルトやリナをはじめとする騎士達の口や膣に一定間隔で、実に機械的に流し込まれていた。

人に対する扱いではない。これでは家畜と変わらなかった。いや、家畜以下の扱いといっても過言ではないだろう。

だが、それでも……。

「おおお♥　いいっ！　きもぢいい♥　最高♥　最高にいいっ！　オレ……感じる♥　かんじりゅううううう♥♥♥」

「ちんぽ汁……美味しい。美味しいです。堪らないですぅ♥　飲んで……あっあっ……飲んでるだけで幸せです。絶頂きます♥　私……ちんぽ汁飲むだけで……んっひ……くひいい！　絶頂っく♥　いきましゅ♥　いきゅううっ♥」

騎士達は感じていた。

子宮に流し込まれる精液に連動するように刻印が輝く。その輝きによって増幅された性感が、強烈な快楽を騎士達に刻み込んでいた。

最低の扱いに幸福を覚える騎士達――アルガスタ騎士団は今や、家畜騎士団と化していた。

だが、全員が堕ちたわけではない。

肉悦に溺れる騎士達だったが、その中の二人――二人だけは、未だ瞳にギラギラとした意志の光を強く灯していた。

（負けない。私は折れない……。殿下が戻ってくるまで……耐える……耐えてみせる！）

フェリアと、

（この程度でワシを堕とせると思うなよ……小僧共がぁ……）

ノノンの二人だけは――。

「お二人とも実にいい目をしていますな。だからこそ……堕とし甲斐がある」

そんな二人を見つめるバガルドが、実に楽しそうにニタアッと笑みを浮かべた。

＊

「で……貴様は……はぁっはぁっ……ワシ……らをど……どうやって堕とすつもりじゃ？」

バガルドの手によって牛舎から解放されたノノンは、着慣れたローブを身に着けた状態で、やはり騎士服を身に着けることを許可されたフェリアと共に、王都の外れにある巨大なホールのようなところに連れてこられていた。

拘束もされてはいない。

だが、逃げることは不可能だった。何故ならば魔力を集中させることができないからだ……。

（晩餐会で飲まされた薬の効果は切れておる。じゃが……流し込まれていた精液……あれに同様の効果が含まれておったか……）

魔力は完全に抑え込まれてしまっている。亜人の能力を発揮することもできない。その上、先程の強制精液注入による肉体発情は未だ続いていた。

魔法が使えない上、どうしようもない程肉体を火照らされているという状況――これでは小柄なノノンの能力はその辺の小娘以下といっても過言ではないだろう。

「くくくく」

ノノンの問いに対してバガルドが楽しげに笑う。

「何をされようが……私達は……堕ちたりはしない。貴方などに屈することなどあり得ない」

フェリアがバガルドを睨む。ノノンとは違い、兵達に拘束された状態で……。

亜人の力を封じてはいても、騎士団長の身体能力は恐ろしいらしい。

「怖い目ですな。しかし、必ず堕としてみせますよ。貴女方二人の力は、亜人の中でも別格だ。必ず子を孕んでいただきます」

「……随分な自信じゃのう。じゃが、貴様のような小僧に堕とされる程、ワシは柔ではないぞ」

猫を思わせるような金眼でノノンは宰相を睨む。

「貴女にかかれば私も小僧ですか……。くくく、しかし、その強がりいつまで続きますかな。さぁ、始めろ……コスタル」

パチンッとバガルドが指を鳴らす。

「お、お待たせなんだなぁ」

するとホールにコスタルが姿を現した。

巨大な――

登場人物紹介

フェリア＝アルガスタ

アルガスタ騎士団の騎士団長。ガブランドの王子と恋仲だが身分差が障害となっている。

ノノン＝クルザス

幼い容姿に反して200歳を数える副騎士団長。フェリアの育ての親でもある卓越した魔法の使い手。

リナ＝アートランド

フェリアに憧れる新人騎士。従順で家事など身の回りの世話を得意としている。

アルト＝モドゥーナ

騎士団随一のグラマラス体型を誇る女騎士。自由人で男勝り。身の丈ほどある巨剣を操る。

前号までのあらすじ　命を懸けて王国を守る亜人女性騎士団に対して、国は容赦ない策を執る。軍増強を目的とした騎士団員達の家畜奴隷化政策によって、次々と快楽に堕とされ孕ませられていく女性騎士達。ついに屈強なアルトまでもが恋人の眼前で種付けされてしまうのだった。

「な……なんじゃ……と……」
数多の人生経験を積んできたノノンでさえも驚き、硬直する程巨大な――右手、左手、そして背中から伸びる三本目の手を持った、緑色の体色をしたオークと共に……。
「魔物？　どういうこと？　なんでここに魔物が？　どうして？」
フェリアも瞳を見開くほどに驚愕する。
その巨体、身長にすれば三メートルはあるだろうか？　あまりに大きすぎる……。
「我が王国を脅かす敵を知る為です。魔物を駆逐する手段は常に研究し続けなければならない。その為に生け捕り、調教した魔物ですよ」
「馬鹿な……そのようなことできるはずが……」
とは思うものの、調教したという言葉を証明するように、オークは暴れるような素振りを見せない。
「ここまで調教するのは大変でしたよ。完全に制御できるようになるまでに、百人近い人間が犠牲となっていますからね……」
「……そんなものを連れてきて何を……」
「何？　当然……種付けですよ。くくく……人では堕とせない程強靱な精神力を持った貴女達に、魔物の仔を種付けする。きっと……どんな者よりも強い亜人を生み出すことができますよ」
語るバガルドの表情はどこまでも楽しげだった。
「種付けじゃと？　馬鹿な……魔物が……ワシに種付け？　あり得ぬ！　それくらいのこと……貴様とて分かっておるであろう？」
魔物にとって人間や亜人は単なる害虫でしかない。人間がゴキブリを見かけたら殺すのと同じだ。そして、人間がゴキブリに対して発情しないのと同じように、魔物だって人間に対して発情することはない。そもそも種族が違うのだから……。
「確かに貴女がいう通りだ。しかし、言ったでしょう？　調教したと……ね」
バガルドの口元が更に歪む。
「さ……さあ……や、やっていいんだなぁ」
この笑みに反応するように、コスタルがオークにそう告げた。
「ごぁあああああっ！」
途端に魔物が咆哮を響かせる。
同時に――。
「なっ……ば、馬鹿な……」
オークの腰巻きを巻いた股間部が、不気味な程に膨らみ始めた。内側から持ち上げられる腰巻き。膨れ上がったものの大きさは尋常ではない。腰巻きはただ膨れ上がるだけではなく、遂には内側から引き千切られもした。
ビョンッと〝ソレ〟が――ノノンの括れくらいの太さと、ノノンの背丈程はあるのではないかと思える長さの屹立が姿を現す。
ビクンッビクンッと震えるペニス。肉胴には幾本もの血管が浮き出て見えた。肉先からはまだ何もしていないというのに、多量の先走り汁が溢れ出している。その量はペニスの大きさに比例するように多い。普通の人間の小便くらいの量はあるだろうか？
「あのペニスが貴女を孕ませるペニスですよ」
「馬鹿な……あんなもの……挿入るワケがない。大体魔物のものなど……」
死ぬ――あんなものを挿入れられたら、二百年もの齢を重ねられる程に強大な魔力を誇る自分であっても、間違いなく死ぬことになる。
だが、死の恐怖以上に嫌悪感が勝った。
魔物に犯されるなど、考えるだにおぞましい。
「だ、大丈夫……死んだりはしないんだな。論より証拠……じじじ……実際にやってみるんだな。というわけで、いけ！　オーク！　ちんぽ突っ込みだ!!」
コスタルがオークに命を下す。
「ごがぁあああああっ!!」
これに魔物は再び轟音を響かせると、まるで餌を食べることを許可された猛獣のような勢いで、ノノンに向かって走り始めてきた。
「なっ！　の……ノノンッ！　逃げてっ!!」
フェリアの悲鳴のような声が響く。
「くううっ！」
これに反応するように、ノノンは踵を返した。拘束されていない。だから動ける。だから逃げることができる。
しかし、小柄なノノンと、そんなノノンを一掴みできそうな程巨大なオーク――体格差は歴然。
「くっ！　お、おのれぇえええ!!」
歩幅があまりに違う為か、あっさりと亜人魔導師は魔物によって捕らえられてしまった。
オークの背中から伸びる巨大な三本目の手が肉体を鷲掴みにしてくる。
「こ……このおおっ！　放せっ！　放さぬかぁっ!!」
魔物に捕らえられる――これ程無様で恐ろしいことはなかった。が、恐怖は表に見せず、もがく。なんとか手を振り払おうと足掻いた。
しかし、体格による力の差は歴然であり、オークの拘束から脱出することなど不可能である。
「ぐげげげ」
暴れるノノンにオークの笑みが向けられた。
「な……なんじゃこれは？　何故オークにこのような腕が!?」
「その魔物は生け捕りにした魔物を研究して人工的に作り出したものですからね。それくらいの真似は可能なのですよ。さぁ、ここからが本番ですよ」
「ほ、本番？　何を……」
バガルドの言葉の意味は一体？

著者近況　丸呑みを書くたびに思い出すのは、セルに食われる18号ですよ。あんなにエロいものはないと思うんですよね。あの上半身から食われて、脚だけ出てる様が……。文字であのエロさを再現したいものです。鳥山先生は罪な男やでぇ。

などと抱いた疑問に答えてくれたのは――
「ごがぁあああっ！」
オークだった。
しかも、言葉ではなく、行動で……。
「なっ！　やっ！　やめっ！　何を……これ……何を？　脚を……ワシの脚を開くなぁ!!」
ノノンの両足を魔物の残った二本の腕が、容赦なく左右に開いてきた。股関節が外れてしまうのではないかと思う程の開きである。当然のようにスカートも捲れてしまった。
「ほう……見た目通り幼いまんこですな」
服を着ることは許された。が、下着は穿かせてもらえていない。故に、秘部が剥き出しになってしまう。当然バガルド達にも見られることに……。
「だ……黙れ！　やめさせぬか！　このぉっ！」
長年生きてきても恥ずかしいものは恥ずかしい。それに、この状況に恐怖も覚えてしまっていた。
長寿であれど自身の危機に恐怖を抱かぬものなど存在しない。
ノノンはそんな自身の感情を誤魔化すように、バガルドに対して怒りを向けた。
「さぁ、始めろ」
けれども、返ってくるのは無慈悲な言葉のみ。
そして、オークが動き出す。
ぐじゅうううっ！
「くひいっ！」
巨棒が膣に押しつけられた。ノノンの身体よりも巨大なペニスが……。
「あ、や……やめろ！　無理じゃ！　こ、こんなに巨大なもの……挿入るはずがない。やめよ……いかにワシでもこ……こんな……こんな大きなものを……挿入れられたら……」
死ぬ。
身体がペニスで引き裂かれて死んでしまう――そう思った。
長寿といえど不死ではない。肉体の耐久度は普通の亜人となんら変わりはないのだ。
血の気が引いていくのを感じた。
「だだだ、大丈夫なんだな。亜人の身体は丈夫だから。それくらいの計算……してるんだな」
「う、嘘をつくな！　無理じゃ！　無理じゃぁっ!!」
ブンブンッと必死に首を左右に振る。
「は……放して！　ノノンを放しなさい！　それ以上しては駄目!!　するなら……するなら私にしなさい！　ノノンに酷いことをしないでっ!!」
フェリアも絶叫する。
「申し訳ありません。これも国の為です」
が、現実はどこまでも非情だった。
ミヂッ！　ミヂミヂミヂィイイイイイ！
「ふっぎ！　ぎひっ！　ひぎぃいいいいっ!!」
挿入が始まる。巨棒による蹂躙が……。
足を大きく開かれた状態で、肉体を下へと引っ張られる。当然膣口に密着していた巨棒が、これに合わせてミチミチと肉穴を無理矢理拡張してきた。陰毛の一切生えていない少女を思わせるような秘裂に、巨大すぎる肉槍が沈み込んでくる。
「ふぎいい！　むっり！　さ……裂ける!!　これ、裂けてしまうぅっ！　無理じゃ！　挿入らぬ！　おっおっ……おぎぃいいい！　こんな……ごんなのばいらぬぅっ!!」
瞳孔が開いてしまうのではないか？　とさえ思える程にノノンは瞳を見開いた。小柄な肢体がビクビクと震える。
「じぬっ！　じぬぅううっ!!」
痛々しすぎる悲鳴が木霊のように響き渡った。
「だだだ……大丈夫なんだな。お前は亜人。亜人の身体はこの程度で壊れたりはしないんだなぁ。痛いのも最初だけ……すすす、すぐに気持ちよくなるんだなぁ」
「あ……あり……えぬぅう！　き……もち……きもぢよ……ぐなる……おっおっ……ご、ごとなど、あ……る……あるはずがなひっ！」
悲鳴混じりにコスタルの言葉を否定する。これは強がりというわけでは決してない。本当に苦しかったからこその否定だった。
「だがら……だ……がら……もう……やめよ！　これ以上はやめよぉおお！　こんな……ふっぎ……んぎぃい……はぁっはぁっはぁっ……こ……んなこと……苦しいだけだがら……やめよぉ」
「そ……そうよ！　もう……もうやめて！　こんなことに意味なんかない！　あ……貴方達の目的は私達を苦しめることではないはずでしょ!!」
ノノンの言葉を引き継ぎ、フェリアも絶叫した。
「確かに……我々の目的は貴女方を苦しめることではない。我々がすべきことは、貴女方への種付け。だから苦しめて妊娠なんかしたくないと思われたら本末転倒だ」
「だ……だったら！」
これ以上の行為に意味などない。
一瞬ノノンは希望を抱く。
しかし、希望などすぐに打ち砕かれてしまう。
ミヂミヂミヂイイイイイ!!
「ひぎゃっ！　あぎゃぁあああっ!!」
オークは止まってなどくれなかった。それどころか更にノノンの身体を下へと引き、よりノノンの肉壺を巨大ペニスで蹂躙してくる。
ボコォッと下腹部が不気味な程に膨れ上がってしまうことも厭わない。ノノンの秘部に自分自身を刻み込もうとしているかのように、ズブズブと肉棒を撃ち込んできた。
「は……腹が……わ……あっぐ……ふぐぅうう！

著者近刊
『美畜退魔師 痴獄の学園』『聖換天使エクスラグナ』『僕のパーティーが戦闘中に誘惑してくるので世界が救えない』『勘違いしないでよね！アンタの事なんか大好きなんだから！』呪いで本音しか言えなくなったツンデレお嬢様』『ツンツン妹は僕専用の射精管理官！』ほか
好評発売中！

ふー。ふー。ふぅううう！　わ……しの……腹がぁあああ！」
巨大な杭を身体に穿たれていくかのような感覚だった。このまま肉棒で刺し貫かれ、殺されてしまうのではないか？　とさえ思ってしまう。
塞がれているのは膣だというのに息がつまる。あまりの苦しみに、二百年の長き時を生きる魔導師の瞳からは、ボロボロと涙さえ零れ落ちた。
それでも「おのれぇ……ゆるさ……ぬ。絶対にゆ……るさ……ぬぞぉおお……」涙を流しつつ魔物を、男達をノノンは睨んだ。
が、そうして睨んだところで誰も怯んだりはしない。それどころか、魔物は「ぐほほほ」と嬉しそうな声さえ漏らしつつ、更に腰を突き込んできた。
ただ膣を犯すだけでは満足しない。ノノンのすべてを蹂躙しようとでもするかのように、膣奥に密着する程深くまで挿入した肉棒を、より奥にまで――。
どぶじゅっ！　ぐじゅぽ！　ずじゅうう!!
「おっぐ……まだ、まだおぐに……わ……わぢのおぐにまではいっでぐりゅう!!　ごれ……じ、じぎゅう！　わぢの……わぢのしぎゅーにまでぇええ！」
女として最も大事な部分が蹂躙されていく。子宮口がボゴッと膨らむのが分かった。いや、子宮口だけではない。括れまでもが内側からペニスの形に拡張されていった。
ずじゅんっ！
「ふほぉおおおお！」
遂に肉槍は子宮壁にまで到達する。ドジュンッと巨棒によって、子宮ごとノノンの内臓全体が突き上げられた。
「うっげ……おぶっ……おびゅううう」
強すぎる衝撃に、ビクビクと肢体が震える。口からはブクブクと泡が溢れ出した。
「うっわ……汚ねぇなぁ」
「なんだあれ？　なっさけねぇなぁ」
フェリアを拘束する兵達が苦笑を浮かべる。最初こそかつて仲間だったノノン達を陵辱することに僅かではあっても抵抗感を持っていた彼らだったけれど、散々陵辱行為を続けてきたためだろうか？　最早そういった罪悪感の様な感情は、完全に消え去ってしまっているように見えた。
「ああなっちまうとノノン様も終わりだな」
苦しむノノンに蔑むような言葉まで向けてくる。
二百年の時を生きる者としての矜持を傷つけられるような状況だった。
しかし、屈辱を覚えたところで状況を覆すことはできない。
「ぶごあああっ！」
オークが再び咆哮を上げた。
同時に化け物はノノンの身体を今度は上方へ引っ張り始める。
ずどじゅっ！　ぐじゅううっ！
「ふっひ！　おひぃいいい!!」
当然、奥まで突き込まれていた肉棒が、今度は引き抜かれていくこととなった。
巨大すぎるカリ首が子宮ごと内臓を外側へ引っ張っていく。
「おおお！　こっれ……だ……駄目じゃ！　おぎぃいい！　う……裏返る！　ワシの……わぢのがらだがうらがえりゅうう！　無理じゃ……こわ……壊れる！　がらだがごわれでじまうぅう」
身体の中身を引きずり出されてしまうのではないか？　とさえ思えるような状況だった。
「じぬっ！　じんでじまうぅ！　やっべ……やべろ！　ごれ以上はやべよぉお！」
必死に訴える。自然と縋るような視線をバガルドへと向けてしまいながら……。
けれども、どんなに救いを求めたところで届かない。魔物は止まってはくれなかった。
「あっが！　んひぃいいいい！　め……捲れる！　めぐれでるぅうう！　わぢの……あそこが……おまんこが……しぎゅうが……めぐれでじまっでいりゅうう！　おっおっ……ふほぉおお」
捲れるという言葉は決して比喩ではない。
一見少女のような亜人魔導師のピンク色の恥肉は、巨棒によって引きずり出され、本当に外側に捲れてしまっていた。
「い……いやじゃ！　ごんなのイヤじゃぁっ！」
「だだだ……大丈夫なんだな。すぐに……また膣中にしまってくれるから」
「ま……また膣中に？」
その言葉の意味とは？
一瞬考える――が、考える必要などなかった。
「ごあああっ！」
答えはオークが行動で示してくれる。
ずどじゅっ！　ぼじゅうっ！
「ふっひ！　むひいいいっ！　おっげ……うげぇえええ！」
（まった……また奥！　また奥まではいっでぇえ！）
またも肉槍が子宮奥にまで突き込まれる。一瞬視界が黒く染まった。意識が飛びそうな程の衝撃を覚えてしまう。
しかし、魔物は意識を失っている暇すら、ノノンに与えてはくれなかった。
「ぐごぁあああっ！」
大気すら震わせる程の咆哮と共に、まるで性玩具のようにノノンの身体を扱い始める。まるで道具を使ってオナニーでもするかのように――。
ずっじゅ！　どじゅぶっ！　どっじゅどっじゅどっじゅどっじゅ――どじゅううっ！
「むひいい！　ひっひっひっひっ……ひぉおおおお

おおおおお!!」

ノノンの身体を上下に、激しく、何度も振り始めてきた。

「ふひいい！　はっっげ……ごれ……はげじずぎるぅぅぅ！　ごわれる！　じぬっ！　じにゅうううううっ！　ふほぉおお！」

胎内が巨棒によって蹂躙される。肉槍を突き込まれるたびに、ボコッボコッと下腹部が痛々しい程に膨れ上がった。

突き込まれるたびに、ノノンは瞳を痛々しい程に見開く。まるで自分の身体そのものが、ペニスの一部にされてしまっているのではないか？　などという錯覚さえしてしまう程の状況だった。

「もう……もうやめて！　酷い……酷すぎる……。こんなの……死んでしまう……。本当にノノンが死んでしまう。やめて！　お願いだから……これ以上酷いことはしないで……」

そんなノノンの状況に、フェリアが涙を流す。泣きながら、憎むべき敵であるバガルドに頭を下げていた。ノノンを救ってくれと……。

「大丈夫ですよ。死にはしません。苦しみは一瞬です。すぐによくなりますよ。ノノン様であっても抵抗など不可能。すぐに牝の本性を露わにし、魔物に対して子種をくれと訴えるようになりますよ」

届かない。

バガルドに慈悲の心など存在してはいなかった。フェリアの想いなど一瞬で拒絶されてしまう。

「よ……よぐなどなりゃない！　こんなの……ぐるじいだけじゃ！　よくなどぉおおっ！」

魔物などに感じさせられる――そのようなことあるはずがない。あっていいはずがない。

だからノノンはバガルドの言葉を否定する。

「さて……それはどうですかな？」

しかし、状況が変わることなどなかった。

いや、それどころか、より悪くなっていく。ノノンの身体が余程気に入ったのか？　オークは行動を中断するどころか、よりピストンを激しいものに変えてきた。

ずごじゅっ！　どじゅっどじゅっどじゅうう！

「ふひいい！　おっおっおっおっ……ふほぉ！」

ただひたすら犯される。肉壺を蹂躙され続ける。

それと共に、刻まれた刻印が輝き始めた。

絶望的すぎる状況。だというのに、刻印の輝きに比例するように……。すぐによくなる――というバガルドの言葉を証明してしまうかのように……。

（な……なんじゃ？　これ……ど、どういうことじゃ？　苦しいのに……辛いのに……ワシ……なんじゃか……これ……）

身体の形が変えられてしまう程の巨棒に犯されるという状況だというのに、何故か苦しみが薄まっていく。それどころか、ズンッと子宮壁を突かれると、苦しいはずなのに、何故か全身から力が抜けていくのも感じた。

「んひっ！　あっ……あんんっ！」

どこか甘みを含んだ声さえ漏らしてしまう。

「ははは、はじ……始まったみたいなんだな」

この反応を見たコスタルが嬉しそうに笑った。

「は……始まった？　な……なんじゃ!?　くっひ！　ふひいい！　何が……おおお！　何がは……じまったと、いうのじゃぁっ！」

「何が？　わ……分かっているだろ？　お前が一番。じじじ、自分の身体が……か、感じ始めてるということを……」

語るコスタルは実に楽しげである。

「か……感じ始めてる？　あ……あり得ぬ！　そのようなこと……ない！　わ……ワシは……んぎっ！　ふぎいい！　か……感じ……がんじでなどぉ！　んっひ！　ひんっひんっひんん！」

受け入れがたい言葉だった。だから否定する。自分は感じていないと、男達に訴える。

しかし、感じていないという言葉が嘘であることは、ノノン自身が一番よく分かっていた。

何故ならば、敵の言葉は事実だったから……。

（刻印のせいか!?　だ、駄目じゃ！　耐えよ！　耐えよぉおお！　こんな……魔物……相手は魔物なのじゃぞ！　だがら、感じては……がんじではならにゅうっ!!　違う！　これは性感などではないぃ!!）

感じては駄目だと、これは快楽などではないと必死に自分に言い聞かせる。

が、ノノンは快楽を知ってしまっていた。

二百年という生の中で、恋をしたことだってあるから……。愛しい人に抱かれたことだってあるから……。子を産んだことだって……。

だからこそ、拒絶し、否定しつつも現在感じてしまっているものが、性感であるということを認識できてしまっていた。

「ふっひ……くひいい！　おんっ！　おんっ……んぐううう！　ふー。ふー……ふぅううう！」

（か、感じるな！　駄目じゃ！　このようなことで感じたら……バガルド共の思う壺じゃ！　た……耐えよ！　耐えるのじゃ！　フェリアの為にもぉ!!）

自分が堕ちたらフェリアは一人になってしまう。幼い頃から面倒を見てきた――実の娘のような存在であるフェリアが……。

愛する人と別れるのが辛いから、ここ百年程はずっと一人で生きてきた。フェリアはそんな自分が久々にもった家族ともいえるべき存在である。

最初は知人の娘だからと仕方なしに預かった。けれど、いつしか本当に大切な存在に変わっていた。

だからこそ守りたい。フェリアの為にも自分が堕ちるわけにはいかなかった。

「感じているなら素直になって下さい。気持ちがい

いのでしょう？　嘘をついても無駄ですよ。その魔物は女を感じさせることに特化するよう調教してあるのですからね。ほら、正直になって下さい」
「黙れ！　黙れぇ！　ワシは……わぢは……んんんん！　感じてなど……お……おらぬぅうっ!!」
否定する。感じていないと口にする。まるで自分自身に言い聞かせるように……。
が、言葉で否定したところで敵は止まらない。それどころか、快感を認めないノノンを嘲笑うように、更に腰の動きを激しいものに変えてくる。
どじゅぼっ！　ずっじゅ！　どっじぅううう！
「むひいい！　おっひ！　ふひいいっ!!」
（つぶ……れるっ！　ワシの……ワシの内臓が……魔物の……魔物などのちんぽで……潰されてしまいそうじゃぁあ！　くるっし……これ……くるじいい！　じゃのに……じゃ……のにいいい！）
苦しくて辛い。死にそうな程に――そのはずだというのに、苦しみ以上の感覚が肉体を襲う。
「ほひぁっ！　ふっひ！　ひおっひおっ――ふほぉおおお！」
（これ……駄目じゃ……き……気持ちいい。感じる。感じてじまうぅう！　絶頂く！　このままではいっで……いっでじまうぅ！　じゃが……絶頂くな！　絶頂ってはならぬ！　だ……大丈夫……おっおっ……この程度問題ない……ないはずじゃろっ！）
何故ならば、自分は二百年もの長き時を生きてきたのだ。色々な危機があった。命を落としかけたことだってある。それでも、生きてきた。危機を乗り越えてきたのだ。だから大丈夫。絶対に……。
「ノノン……」
「だ……はぁあああ……ふうっふうっふうっ！　だ……い丈夫じゃ……フェリア……ワシは……わ……ぢは……おっおっおっ……この程度……た……え……きれる……。じゃから……だ……大丈夫じゃぁ」
娘のような存在にノノンは笑いかけた。
自分が守らなければならない。不安な顔などさせたくはなかったから……。
しかし、そんな亜人魔導師を嘲笑うかのように、魔物はより膣奥まで肉槍を突き込んでくる。しかも、ただ肉先で子宮壁を突いてくるだけでは終わらない。ワンストロークごとに不気味な程にペニス全体を肥大化させながら……。
「ごれ……お、おおぎぐ……。おおぎぐなっでおりゅ！　わぢの……わぢのながでおおぎぐぅ！　おおおおっ！　膨れ上がって……震えでおりゅう！　なんじゃごれ……何がおぎでいるぅ!?」
肉棒の変化に恐怖を覚えてしまう。
「何が起きている？　くくく……ノノン様、長き時を生きてきた貴女なら、私が言わずとも何が起きようとしているのか……分かるはずですよ」
「あ……それは……しょれはぁあ……」
正直なことをいうと分かっていた。別に長寿であるとかそんなことは関係ない。誰にだって簡単に想像がつくことだったから……。
けれどもそれを認めたくなかった。何故ならば恐ろしいから……。
「ああああ……や……やめさせよ！　やべざぜよぉ！　ソレは……ぞれだげは……やべでぐれ！　だのむ！　だのむぅうう！」
だから救いを求める。
やめてくれと訴える。
「駄目です」
しかし、どこまでも敵は残酷であり――。
「ぶごおおおっ！」
どじゅぼっ！
「はふぁああっ!!」
遂にオークの肉棒がこれまで以上に膣奥にまで突き込まれた。
瞬間、腹が内側から突き破られそうな程に膨れ上がった。同時にノノンはこれまで以上に痛々しく瞳を見開く。
そして――
どびゅばっ！　ぶびゅっ！　どびゅううっ！
「ほふぅう！　あっあっあっ――ふひぃい！」
突き込まれた巨棒の先端から、多量の白濁液がノノンの膣中に向かって解き放たれた。
「で……でっで、でりゅう！　ごれ……わぢの……わっぢのながぁ……まんごに……でる！　ぜーえぎが、魔物のぜーえぎがでおりゅうう！」
一ミリの隙間もなく子宮を埋め尽くしたペニスから放たれた多量の精液が、膣壁を叩く。その量は尋常ではない。一瞬で肉壺が満たされるのを感じた。子宮がパンパンにされてしまう。ただでさえ大きくなっていた下腹部が、より膨張する程に……。
「あづいっ！　ごれ……あぢゅひぃいい！　あじゅぐで！　んひぃいい！　駄目じゃ！　らめじゃぁあ！　ごわれる！　わぢがごわれでじまうぅう！」
ぶしゅっ！　どぶじゅうううっ!!
小柄な身体では受け止めきれない。結合部からも白濁液が溢れ出す。まるで失禁でもしているのではないか？　と思う程の勢いで……。
「腹が……わぢの腹がはれづじでじまうぅうう！　なのに……にゃのに……何故じゃぁ！」
苦しい。死んでしまいそうな程に辛い。
だというのに――
「ぐるじいのに！　どうじで？　ごれ……おおお！　きも……きもぢ……きもぢぃいいい♥　いぐっ！　おおお、駄目じゃ……いぎゅっ！　いっで……いっでじまうぅうう！」
何故か、すぐにでも達してしまいそうな程の快楽を感じてしまう自分がいた。
（駄目じゃ！　耐えろ！　耐えろぉおお！）

そんな自分を必死に理性が引き留めようとする。絶頂っては駄目だと訴える。

が、そんな理性すらも押し流されてしまう程に性感の濁流は強烈なモノであり……。

「無理じゃ！　おおおお！　いぐっ！　いぐぅううううう♥♥♥」

気がつけばノノンは達してしまっていた。

瞳を見開きつつ、肉棒でボゴオオッと膨れた身体を小刻みに痙攣させながら……。

「おっ♥　おっ♥　ふほぉおおお♥」

強すぎる快感に全身から力が抜けていく。

（あああ……気持ちいい……。しゅまぬ……フェリア……しゅまぬぅうう……）

フェリアに対する罪悪感で胸が痛む。しかし、その罪悪感すら弛緩しそうな程に愉悦は強い。

「はふぁあああ……」

全身から力が抜けていく。

身体中を包み込む脱力感――そんなものに身を任せようとするかのように、ノノンは瞳を閉じようとした。

「ごぁあああっ！」

だが、オークはノノンに休む暇など与えてはくれない。

巨大な魔物は再び咆哮を響かせると、射精したばかりの肉棒を、精液を撃ち放つ以前よりも硬く、熱く屹立させていった。

「なっ！　これ……ば……ばがな……お……おおぎぐなっでおりゅ！　うぞ……なじぇ？　射精した……だじだはずではないのがぁ!!」

「ままま……魔物の性欲は人間を、亜人を遥かに超えるんだな。一発くらいで満足すると思ったら大間違いなんだなぁ」

ノノンの疑問にコスタルが答える。実に楽しげに笑いながら……。

「しょんな……しょんなぁあああ……。無理じゃ……こ……ごれ……はぁっはぁっはぁっ……ごれいじょうは……無理じゃぁ……」

「そんなこと言っても、どうしようも……な、ないんだなぁ。一度火がついた魔物は止められない。そいつが満足するまで……無理なんだなぁ」

「そんな……いやじゃ……頼む！　やめでぐれ！　だのむぅうっ!!」

純粋に恐ろしかった。だからやめてくれと訴える。救いを求める。

けれども、この場にノノンを救える者は、救ってくれる者はいない。

「ごぁあああっ！」

どじゅうううっ！

「ふっひ！　んひぃいいいっ!!」

そして、陵辱行為が再開された。

＊

「いぐっ♥　いぐいぐっ！　いびゅううっ♥」

「おおおお！　まんこが……おがじぐなるう！　ぐちゃぐちゃ……わぢのなが……ぐじゃぐじゃぁ♥にゃのに……おおお！　にゃのにいいっ♥　よぐで……きもぢよぐで……いぎゅううっ♥♥♥」

「だずげでぇえ！　フェリア……わぢをだじゅげでぇ！　もう……もういぎだぐない！　いぎだぐないんじゃぁ！　なのに……あああ！　またぐる！　ぎでじまう！　おっおっ――むほぉおお♥♥♥」

＊

ひたすら、ただひたすら齢二百を超える亜人魔導師は、犯され、犯され、犯され続けた。

しかも、ただ犯すだけではない。肉棒で膣を犯すだけではなく、オークはその肉体から幾本もの触手を伸ばしたかと思うと、ノノンのアナルまで犯してきた。

それも、直腸を蹂躙するだけでは終わらない。

どじゅぼっ！　じゅっぽ！　どじゅずっ！　ごじゅうっ！

「おぼぼっ！　うぶえっ！　おげっ！　ぼげぇええっ！　おっおっ――おぼぉおおおっ！」

（貫通する……わぢの……わぢのがらだ……触手で……じょぐじゅでぐじざじにざれりゅうう！　おぼぉおおっ！）

腸だけでは飽き足らず、胃まで、食道まで、いや、口腔まで触手は蹂躙してきた。

尻から挿入った肉紐が、口から飛び出す。あまりに異常な状況だった。

だというのに――。

「あああ……ぎぼぢいひぃいい♥　おー♥　おー♥　おぼぉおお♥」

（いっぐ……まだ……まだいぐっ！　いぎゅいぎゅ……いっでいじまうぅうう♥♥♥）

それでさえも達してしまう。

「ほひっ♥　ふひょぉおおお♥」

触手に刺し貫かれた状態で、両手足をヒクヒク震わせる。ジョボジョボと失禁さえしながら……。まるで串焼きにされたカエルのような状態だった。

そんな陵辱を休むことすら許されず、ただ、ただひたすら、肉体に刻み込まれ続けた。

刻まれる快感に思考能力が、理性が押し潰されていく。守らなければならぬ者のことまで、忘れてしまう程に……。

（気持ちいい……。いやじゃ……もう……気持ちいいのはイヤじゃぁあ……）

快感が恐ろしかった。どんなものよりも、気持ちよさが怖かった。

だからだろうか？　その恐怖から、現実から逃避するかのように――。

「もっどじゃ……もっど……きぼぢよじでくれぇ♥恐怖を……おぞろじざを忘れられるくらいに……だ

震える脚で歩む先は――

ガク
ガク
ひっ
はっ
ポタ
ポタ
ズリ
プル
プル
はっ
ユサッ
ぎちっ
プル
ぐっ
ギっ
あっ
ギシ
ぎ
うっ
ひっ
ヨロ
ヨロ
ガク
くひっ
ぞく
ぞく
プル
プル
ふーっ
うっ
も…ダメ…
また…っ

ほら頑張ってー
魔王様がお待ちよ
チャ
ガタン
THE
Lust Resort!!
ラストリゾート
ジエイト
MISS BLACK

ガキのくせに
いい趣味してんなぁ

ゲラ
ヒヒヒ
ゲラ
ゲラ
ハハハ
ゲラ
ヨロ
ヨロ
ハハ

さすが勇者様
大物だぜ

後でお相手
してくれよ

ヒヒ

そら御前だ
跪け！

カッ
かんっ

う！

ふぎぃいっ!?

ひやああっ

すり
ぐちゅ
ぐっ
ズゴッ
プスッ
ゴリ
ぴゅ
ひっ

あれが…300年前人界を支配しかけた
ぎっ
スス…
…伝説の
たぷんっ
魔……お…
う？
…ぜんぜん悪くなさそう…
でかっ!?
りさ。

がし
ギ
ギ
ギ
ギ
変態小僧お前いま「ぜんぜん魔王オーラない」とか思っただろ
殺すぞ
頭からバリバリいくぞ
ごごごめんなさいっ
ぺん
アンタも将軍てより親バカお父さんオーラばっかりじゃない
なにを娼婦将軍めが！
晶魔将ですー
プアー
…魔族ってこういうノリなの…？ 全体に
ぽそ
ぽそ
聞いてたのと違う…ね
トっ
トっ
じぃ…っ
わ
ナー
びくっ

…勇者さまは
「ゆうしゃさま」では
ありませんか？
え!?
どういう…
こ…と――
さら
黒髪…
夜空みたいに
キレイな…
えっ
「おひめさま」!?
はい
ぽん
知り合いなの
シエリオ君!?
このおっぱい大魔王と!?
ぼそ
ぼそ
ぼそ
小さいころ
先代勇者(おじいちゃん)に連れてきて
もらったときに…
ももちろんその時は
魔王なんかじゃなくて
ツノもなくて

ぱっ

ゆうしゃさま

はは はい!?

今日は大事なお話があっていらしたと聞いております

あはい

僕らは東南方王国議会の命を受けて…確かめにきました

あなたが魔王ですか？

例えや通り名じゃなくて

魔族の王…なのですか？

…

はい

そんな…

姫君で…知ってる子と戦わないといけないなんて…

シエリオ君…

ありがとう

イセリア英雄戦記
the legend of the Ycerya war
第33話 セリーヌと魔道具調教
淫祇邪教の手に堕ちたセリーヌ。
エルスやドーラと同じように、
魔王の忠実な牝奴隷にするため、
エバとスレアの二人に施される
地獄の快楽調教！
小説／ナるカく
NOVEL
挿絵／牡丹
ILLUSTRATION

（ん……ここは……どこだ）
イセリアの女騎士団長、セリーヌは目を覚ました。
虚ろな頭を動かすと、鮮やかなロイヤルブルーの長髪がさらりと流れる。
鍛えられて引き締まりつつも、胸や尻が豊満な女体を、純聖色のアーマードレスが包んでいた。
「？　……身体が、重い」
ガントレットに覆われた手首や、腰から下のロングスカート裾から覗く足鎧を、何かが拘束している。
原因を探る為、凛とした意志を人に与える瞳を開け、身体を確認した。
「……繋がれている」
部屋の中央に置かれた石台の上に横にされ、床から伸びた鎖付きの枷で手首と足首を拘束されていた。
（ここは……拷問部屋か……）
薄汚れた天井。窓はなく、大きくも小さくもない、壁掛けランプの灯りだけに照らされた部屋。
手入れされてない棚には鞭や小剣、部屋の隅のテーブルには大量の魔術書と怪しい気な薬が散乱している。
（私は……どうしてここに……）
一番新しい記憶を呼び覚ます。
魔物の巣窟であるメイズ。そのひとつを守る封巫女、ホカゲの護衛をしていたが、大軍の敵襲に敗れた。
（……思い出しただけでも恐ろしい）
囚われたセリーヌを待っていたのは敵の陵辱。教皇のいやらしい触手の群れにホカゲとともに襲われ、身体に植えつけられた快感をじんわりと思い出してしまう。
「……そ、そうだ。ホカゲは……メイズはどうなったのだ」
忌々しくも、股奥が疼いてしまう官能的な記憶を巡らせた頭を叱責し、一番重要な事を心配する。
「封印は解かれましたよぉ」
突然声を掛けられて驚き、部屋の隅に目をやる。
「流石はセリーヌ様。教皇様にあれだけ愛されても、回復が早いですねぇ……ホカゲ様は今も眠っていらっしゃると言うのに」
テーブルに積まれた本の脇から女性の顔が覗いた。椅子から立ち上がると腰まで届く艶紫色の髪が、ランプに照らされてより妖しく煌めく。
垂れ気味で細い瞳は男を誘う雰囲気を漂わせ、片目は赤、もう片目は青というオッドアイのコントラストや、片眼鏡がさらに淫質に見えるその姿は、
「お前……何故生きている!?」
かつて、この手で一刀両断したはずの錬金術師、スレアだった。
死に至る攻撃を与えた相手が、生きている事にセリーヌは驚愕する。
「ふふ……さぁて、何故でしょぅ？」
錬金術師は艶めかしい声を出してうっとりし、腕を組んで巨乳の下部を支え上げ、胸元が大きく開いたチャイナドレスの谷間を強調した。
「この身体を斬られたの、痛かったんですよぉ？」
細い腰を妖しくくねらせ、ドレスの大胆なスリットから紐下着を露出させる尻を振る。
（そう言えば……あの時、空に巨大な目玉が……そ、それに手が現れて）
スレアが絶命した瞬間に突如として現れた謎の巨腕。それにさらわれていくのを思い出した。
「スレアが生きているのは、魔王様のご加護ですわよ」
すると、部屋の扉が開かれて誰かが入ってくる。
青夜の如く染まった足元まで流れるロングヘアを後ろに引きながら、上品な立ち振る舞いで近付いてきたのは、グラマトン教会の陰の支配者、エバ。
「もぅ、もっと焦らそうと思ってたのに……エバ様のいじわるぅ」
楽しそうな錬金術師が居る一方で、セリーヌの顔が青ざめていく。
「魔王……の加護だと……」
「そう、素晴らしい加護でしたわ」
彼女は思い出し、うっとりすると長髪を掻き上げる。肩や腹、スカートの前部が剥き出しの、淫乱な純白ドレスが包む爆乳と女尻が重々しく揺れた。
「……ま、まさかお前たち……魔王を復活させたというのかッ!?」
石台の上に拘束されながらも、ふたりを睨み恐ろしい事を聞き出す。
「そうですわよ……と言っても、復活させたのはアリオナ女王ですけど」
聖女は嬉しそうに吊り目を細め、イセリアの騎士にとって、衝撃的な事をいとも簡単に答える。
（!?　あ、アリオナ様……が？）
あまりの驚愕に、何を言われたのか理解が追いつかない。
「あの時は本当に、神秘的でしたわ……アリオナの卑猥まんこから、私たちの魔王様が……あぁッ」
積み重なる衝撃の中、今まで仕えていた君主に対する扱いや暴言に対し、敵意が一気に増大する。
「貴様ッ……今直ぐに訂正しろ!!」
「あら、すべて事実でしてよ……まったく、牝豚女王の飼育係騎士も、やはり程度が知れてますわね」
「ッ!!　……コイツ……第一、魔王を復活させて何を企んでいる！　貴様らはこの世界を破滅させる気なのか!?」
屈辱や怒り、焦燥感と危機感が一気に溢れ出してくる。本当に魔王を復活させたのなら、最悪の事態だ。
「……言いきれるのかの？」
そこに、多くの皺を顔に寄せたローブ姿の老人も部屋に入ってくる。
「教皇……貴様ッ」
魔王復活を目論んでいた淫祇邪教の長。そして己を陵辱した相手に睨みを利かせるが、臆する気配もない。
「お前は何故、魔王様がこの世界を破滅させると思うのじゃ？」
「そんなの当たり前だ！　伝説を知っていれば、子供でもわかる事だ！」
昔からの伝承を思い出す。
四百年前。かつて現れた暗黒の魔王は、この世界を支配しようとしたが、

後に英雄王と呼ばれる勇敢な剣士が討ち取り、イセリア英雄公国を建国して世界を平和にしたのだ。
「それではお主にひとつ聞こう。魔王様の支配と、お前たちが英雄王と呼ぶ剣士の平和とやらは何が違う？」
「……何？」
冷静な面持ちの教皇が言いたい事がわからず、聞き返す。
「……英雄王がもたらした平和というのは、支配ではないのか？」
イセリアの第一騎士団長として、今まで何も疑ってこなかったセリーヌの思考が停止した。
（英雄王の行いが……支配？）
「お前は、伝説で聞いているだけで四百年前の事を実際には知らぬ……なのに何故、魔王様が世界を破滅させると言いきれるのじゃ？」
その言葉に、返す言葉がない。武器を奪われ身体を拘束された上で、教皇とエバ、スレアの三人から冷やかに見下ろされて怯む。
（英雄王と魔王は、変わらない？）
女騎士の心に広がる深い疑念が、反論を途絶えさせた。
「魔王様こそ、真の平和をもたらす救世主……世界を統べるのに相応しい」
淫祇邪教の長は説明を終えると、話を変える。
「それにセリーヌ。先刻、お主と交わってわかった事じゃが……その身体に流れる血は、おそらく我らが魔王様と同じものじゃろう」
――何だと？
両目を見開き、心臓が鼓動する。
「どうじゃ？　魔王様を信仰する儂らとこうして出会ったのも、偶然ではあるまい。同胞になる気はないかの」
相手の言葉がほとんど入らない。
（魔王と私が……）
関係がある。信じられない、いや信じたくない事を突きつけられたが、思い当たる事があった。戦場で時折感じる過去の戦いの記憶。そして怪物たちが己をマオウと呼称した事。
「どうじゃ、悪い話ではなかろう」
教皇はじっくりと返事を待つ。
魔王と自分の関係が頭に巡り、教皇たちと一緒に居れば自分の秘密をもっと知れるかもしれない。
「……知るか」
だが、思考が最後に辿り着いたのはイセリアの皇女であり、自分の一番大切な親友、フィオナの笑顔。
「私は、イセリアの騎士セリーヌ＝アヴァリアレス。貴様らに従うなら、この身を捨てるほうがましだッ!!」
悩んだ自分を斬り捨て、セリーヌは新たに忠誠を誓った騎士として叫ぶ。
今はここを脱出する手段を考えよう。
ホカゲもどこかに居るはずだ。
「残念じゃ……では、エバとスレアよ、あとは頼んだ……儂がじっくり嬲ってもいいんじゃが、他にやる事がある」
教皇は返事を予想していたのか、直ぐ部下に命令する。
「身体の力が暴走しては困る……じゃから注意しつつ、限界まで快楽漬けにして、洗脳するんじゃぞ」
言い残して、首謀者は部屋を出た。
「ふふふ……さぁ～セリーヌ様ぁ」
扉が閉まると同時に、待ち兼ねていたとばかりにスレアが胸当てに手を掛けて脱がせようとしてくる。
「や、やめろッ!!」
「フフフ、いいじゃないですかぁ……ワタシの錬金術で、わざわざ鎧も再生してあげたんですよぉ」
教皇に犯された際に傷ついたアーマードレスを、調教の為に再生したのにと理不尽な文句を言ってくる。
「さぁ今日はどうやって……あら？」
スレアが胸当ての中に手を忍ばせようとした時、首元にあった何かに気付いて取り出される。
「……これは宝珠、ですねぇ」
それは、赤くて小さな宝石。かつて魔物と化したゴルヴァーナから知らぬ間に手に入れた、魔力を永遠と吸収する危険な代物。
「何故……ここにある訳がない」
扱いを間違えれば大惨事になると思い、フェイエン武踏会に立ち寄った際に預けたはず。どうして服の襟元にあったのだろうか。
「……ふぅむ……なるほどぉ」
錬金術師であるスレアは宝珠に気持ちを移し、興味津々に観察している。
「エバ様……この宝珠から魔道具を作りたいので、暫くここをお任せしてもいいですかぁ？」
世界でも有数の魔道具を作る事が出来ると噂の錬金術師は、新たな発明を思いついたらしく、妖しく笑う。
「スレアは研究熱心ですわね。わかりましたわ、ごゆっくりどうぞ」
特に咎める事もせず、聖女は含みのある微笑を返して許可する。
完全にふたりきりになり、エバは台の上で仰向けのセリーヌを危険な目で見下ろした。
「言っておくが……私は絶対に、お前たちなどに屈しないぞッ」
「構いませんわよ。頑固になってもらわないと、快楽調教の醍醐味がありませんもの……フフッ」
不敵な笑みを浮かべた途端、床にふたつの召喚魔法陣が出現し、それぞれの中から男がひとりずつ浮かび上がる。
ふたりとも何も身に着けず全裸で、鍛えられた戦士の如く体格がよく、髪や全身の毛を剃り落としていた。
「このふたりは、信徒の中でも私の一番のお気に入りなんですの……」
一般的な男と比べれば大剣と言っても過言ではないペニスがすでに勃起し、腹に付きそう。牡のむせ返る体臭を漂わせ、息を荒らげてセリーヌを血走った目で舐め回すように凝視している。
（あぁ……い、今から、アレで……）
おののくとともに鼓動が早くなる。
それは今から犯されてしまうという嫌悪感だけでなく、卑猥によがる自分を想像してしまった事も一因だった。
「あら……彼らの勃起ちんぽ、そんな

著者近況　今回イセリア英雄戦記を書かせていただいた、ナるカくです。陵辱ものを書くのは初めてですが、楽しんでいただけると嬉しいです。

に気になりますの？　あぁ～ん早く欲しいって顔ですわよ」
笑うエバに言われてハッとし、慌てて顔を逸らす。
「ば、馬鹿な事を！　だ、誰が……」
否定するが、今まで散々恥辱を味わわされた、下着に包まれた股部が切ない疼きに見舞われてしまう。
「まぁ残念……素直じゃない子には、ガチガチちんぽはお預けですね」
こちらの気持ちを知り尽くしたような妖しい目の聖女に焦らされ、一瞬残念に思った自分が情けない。
「さぁて……まずは……」
エバは魔術を唱え、セリーヌを拘束していた枷を外すと浮遊魔法で身体を宙に浮かせ、淫男の頭上へと運ぶ。
「ふぅー……ふぅー……ふぅー」
近付くにつれ、男たちの鼻息がどんどん荒くなっていく。
アーマードレスの中を、欲望塗れの視線だけで陵辱されている錯覚を感じるほどに、信徒たちは興奮していた。
「こ、こんな卑猥な奴らに……」
犯されてしまう。身体がいくら反応しても、心まで肉欲に溺れる訳にはいかない。何とか抵抗しようとするが、見えない圧力で封じられた手足はただ揺れるだけ。
そして淫乱聖女の思うままに、身体のポーズを変えられてしまった。
「宙に浮いているというのに……幼子のようにはしたないですわねぇ」
両手を投げ放ち、足をM字に開いて仰向けにさせられる。動物がじゃれて腹を見せるのに似た屈辱の格好。
「ふぅー……はぁー……セリーヌのいい匂いだぁ……すぅー」
呟きながら男たちは、女騎士の身体に鼻を近付けて嗅ぎ回る。
「髪の毛は甘い……すぅーッ……ここの脇は、少し酸っぱいぞぉ……」
耳の後ろに鼻孔を合わせられ、寒気にも似た鼻息を吹きかけられる。
そして、布に染み込んだ汗までもしっかりと堪能するように、顔を脇に擦りつけながら嗅がれてしまう。
「ッ……こ、こいつら……」
戦場で戦う騎士といえどひとりの女。恥ずかしい匂いの溜まり易い場所を宙に浮いたまま分析され、殴り飛ばしたくても動かぬ身体では叶わない。
「……おい、何だこの匂いは……」
「すぅー……はぁー……ココからだ」
脇から横腹、そして大股開きの足へと向かった教徒たちは、スカートの中から香るモノに気付く。
「アッ！　ん……くぅ、さ、触るな……こ、このッ……は、離れろッ！」
牡欲に塗れた信徒たちは躊躇いもなく手をスカート内に忍ばせてくる。
騎士として鍛えられながらも、抜群な感触の柔足を撫で回され、ロングスカートと前垂れを捲られる。
「!!　お、おいやめろッ！　あ、あぁみ、見るんじゃないッ!!」
今ソコを見られてはまずいと暴れようとしたが、ビクともしない。
じわりじわりと布は引き上げられていき、男ふたりの視線に晒された。
（あぁ、だ、ダメだ見ないでくれぇ）
「おぉ……これは……濡れている」
見られたくなかった原因を口にされ頭の中が羞恥で一気に痺れる。
純白の下着は、包む秘部から溢れ出す蜜でじんわりと湿っていた。中の形状が薄っすらと透け始め、スカートの中に溜まった淫香が一気に漂う。
「あら、まだろくに触れられてもないのに、もうおまんこはトロトロのベトベトですわね……はしたない」
遠めに眺めている聖女は、悔しくも感じてしまった騎士を嘲笑う。
「こ、これはお前の淫術のせいだ!!」
「まぁ……まだ浮遊魔術以外はまったく使っていなくてよ……嗅がれただけで感じるド淫乱牝騎士だったなんて」
「ッ！　……ち、違ぅ……」
否定の言葉も小さくなる。これまで受けてきた陵辱の数々のせいで、男に犯されてしまうと考えただけで身体が疼いてしまうのだ。
そんな姿を見て楽しそうな聖女が魔術を唱え、男たちが鎧に手を掛ける。
「あぁぁ、鎧と服がぁ……」
すると胸元の硬いプレートアーマーがまるで粘土のように千切られ、スカートも紙の如く簡単に破かれてしまう。
「フフッ……その格好、娼婦が騎士の格好で商売しているみたいですわね」
胸当ての奥から形のいい豊乳が艶めかしく震えて飛び出し、腰に残った鎧が下乳を支え、上向き乳首を強調する。
裂かれて極端に短くなったスカートと前垂れからは、無駄な肉が付いていない太腿と尻、濡れて綺麗な恥裂を浮かばせるショーツが露出。
「貴様ッ……覚えておけよ、必ずその首をはねてやるッ！」
イセリアの騎士としての誇りを侮辱されたセリーヌは、赤面しつつエバを睨んで吐き捨てる。
鼻で笑う聖女はそれをよそに、ふたりの教徒に何やら怪しい淫術を唱えた。
すると男たちが徐々に変化していく。
「!?　な、何だその指は……あ、あぁぁい、イボイボになって……そ、それに舌が……な、長、い……」
片側の男、筋肉質で太くて長い指の一本一本に、肉粒が生えていく。爪の先から付け根までに真珠並みの大きさや、産毛のような細かい突起が四方八方に伸び、それぞれが不規則に蠢く。
そしてもうひとりの男は、口から垂らした舌がどんどん伸びる。己の身長を超えるまで長大した粘膜は蛇の如くうねり、多大な唾液で濡れ光った。
（こ、今度こそ本当に……あ、アレで犯されてしまうんだッ）
思わず生唾を飲む。今から強引に与えられる快感を想像し、心のどこかで快感を期待してしまう。
女として、誇り高き騎士として不純な気持ちを抱いた事に気付かない中、指を粒だらけにした男がセリーヌの下着を破り捨てる。

著者近刊　『子づくり委員長　美少女たちと孕ま性活』　好評発売中！

「⁉　あぁそんな……下着が……」
自分の一番大事な場所を守っていた薄い布も奪われ、空中で強制的に大股開きをさせられている恥ずかしさのあまり、目を強く瞑る。
「おぉ……こうなっているのか」
「はぁー……美しくも、卑猥だ……」
ふたりの淫男はほぼ目線と同じ高さのソコに、顔を近付けて凝視した。
すでに割れ目は多大に湿り、左右の肉唇は液塗れ。下で息づく尻窄まりにまで蜜が垂れ、皺を艶めかせる。
「まぁ……嗅がれただけで発情する淫乱騎士なのに、まんこは意外にも純潔っぽいですわね……似合いませんわ」
今まで数々の陵辱を受けてきた秘所とは思えない、美しい桃色に染まった粘膜穴がヒクッヒクッと収縮する。
初々しい股の姿に、聖女はわざとらしく目を丸くして驚いた。
（こ、このような屈辱を……ゆ、許さないぞエバ！）
「はぁ……はぁ……おぉッ……これはまた、中は鮮やかで匂いがすごいぞッ」
興奮しきった指イボ男が、肉貝を左右に割り開く。
くちゅりッと淫湿な音を立てて愛液小橋がピンクの粘膜に幾重も架かり、膣穴から溢れた汁が妖しく香る。
「中の具合はどうだろうな……」
「えッ⁉　ま、待て……中って」
慌てて自分の股間に目をやれば、指が入り口に向かっていた。
ただの指ではなく、妖しく蠢くイボが生えたモノが。
「や、やめろ貴様ッ！　そ、そんな物を私の中に……ひゃッ⁉」
膣穴に、指先がめり込む。肉粒が震えてほんの僅かに触れられただけで、ゾクゾクとした刺激が身体を駆けた。
本当に入れられてはどうなってしまうのかと想像し、鼓動が速くなる。
「ほ、本当に許さないぞ貴様！　入れたら、絶対にその手を切り落と――」
必死に止めようとするが、目を血走らせた教徒は聞く耳を持っているはずもなく、そして、
――ジュップン、ニュジュジュゥ。
「すぅンあぁッ⁉　あぁぁぁぁ⁉」
柔らかいのに、程よく硬いイボ指が差し込まれてしまう。肉襞をジョリジョリと撫で回しながら、確実に。
「おおぉ……よく締まる中だ……」
男は指に感じる膣圧に感激し、もっと感触を確かめようと指を折り曲げながら抜き差しを開始した。
「あぁぁや、やめ、ろおぉッ！　い、イボイボが、擦れ、んンぅ！　や、やめろぉ、アッ⁉　だ、ダメぇぇ」
指と同じく、肉突起のひとつひとつも中の形状を把握しようと蠢き、細かく振動して刺激してくる。
（な、中が……ぜ、全部撫でられて……あぁしかもゆっくりなんてぇ……）
決して速いとは言えない指の出し入れでも凄まじく、妖しくていやらしい刺激に身体の筋肉がヒクつく。
もっとシて欲しい。散々陵辱を受けてきた身体は、犯される事に対し危険な感情を密かに湧かせた。
「それじゃあ、俺はこっちを……」
そんな気持ちを振り払おうとしていると、舌を触手のように長くしたもうひとりの男が、別の穴にその先を突きつけて嬲り始める。
「んぅッ⁉　そ、そこは……お尻ッ」
しきりに窄まる肛門を、長い舌でゆっくりと舐め回されてしまう。
皺のひとつひとつを丁寧に解すような舌使いで、むず痒くて背徳的な愉悦が窄まりから背中を駆け上がり、甘い声と尻肉が震える。
「あぁぁそんな、お、お尻の穴を舐められるなどぉ……あ、アッ！」
過去に犯された肛門は、すでにセリーヌの性感帯になっていた。非常に恥ずかしい場所を何度も舐められ、牡の粘液で上塗りされているのに、不快感どころか身体が蕩けそうになる。
「……あぁそう言えば、貴方に面白いモノをお見せしなければ……」
「んンッ……面白いモノ、だと……」
イボだらけの指と長い舌の責めに、必死に感情と快感を抑える中、エバは何やら拷問部屋の隅に置かれていた大きな手鏡を持ち出してくる。
「この鏡は普通の物と違って、映った物を記憶しておく事が出来ますの」
まさかその鏡を使って自分の恥態を記録し、それを悪質に利用するのかと思った。が、
『あ、アッ！　あぁぁだ、ダメぇ気持ちよすぎるぅッ⁉』
鏡に映った光景に、セリーヌは目を見開いて思考を停止させる。
「⁉　……アリオナ、様」
鏡の中では、イセリアの女王にして親友の母親が大淫声をあげていた。
『おちんちん！　犬のおちんちん大好きなのぉ！　もっとパンパンしてぇ』
純白のドレスを着て四つん這いとなり、しかも野良犬に犯されている。
「……ッ！　で、でたらめだ！　これは貴様が作ったまやかしだッ⁉」
獣に犯され、非常に気持ちよさそうな女王の姿を慌てて否定し、顔を逸らす為にエバを睨みつけた。
「そんな事ありませんわ……貴方がここで目を覚ます少し前に、魔王様の配下から贈られてきた映像を、記憶しただけですわよ」
『あぁぁ！　い、イクぅ⁉　犬のおちんちんでイクうぅぅ！　赤ちゃん孕んじゃうのおぉぉ⁉』
終には鏡の中の女王は果て、ただの犬の精液を嬉しそうに受けている。
「う、嘘だ……こ、こんな事……」
信じられない。自分が仕える国の主だと言う事を差し引いても、アリオナ様は非常に強い意志をお持ちの方。
しかし鏡に映ったのは、覚えている姿とあまりにもかけ離れていた。
「……ついでに、アリオナが犬と交尾する少し前の、この映像もどうぞ」
女騎士の絶望を滲ませる顔色を窺うエバは、映像を切り替えた。

『あぁぁ！　産まれるうぅう!!』
新たに映されたソレには、一国の女王が股から子供を出産しているのに、卑猥な牝顔で絶頂する姿だった。
「はぁぁ……魔王様の記念すべき復活の瞬間を記録したものですわ……私の宝物なのだからよく見ておきなさい」
恍惚とする聖女の言葉も、一切耳に入ってこない。それだけ、イセリアの騎士であるセリーヌには、鏡の光景は信じられなかった。
『ふひぃぃぃ!!　い、イクぅう！　子供ぉ、出産でイクううぅぅ!!』
世界を揺るがす怪物、魔王をひり出しながら、絶頂を叫ぶ女王。
「そ、そんな……アリオナ、様」
「ふぅー……あぁ、何度見ても素晴らしい……貴方もそう思うでしょ？」
映像の再生を終えた聖女の声とともにふたりの教徒の責めが再開する。
「ふざけるなぁ……あ、アッ！　わ、私は絶対にッ……信じないぞ！」
きっと、アリオナ女王は周りをだます為に演技をしていたのだ。希望を忘れずに、一刻も早くこの状況から脱出して救いに行こうと考えた。
「今直ぐ私を解放……くひぃッ!?」
だが、指に肉イボを生えさせた男に股の淫豆を摘まれて思考が弾け、凄まじい快感が迸った。
「はぁ、はぁ。セリーヌここが気持ちいいのか？　いいんだろ？」
蠢くイボが何度も絡み、股豆はネジを回すようにひねられる。

――グジュルゥッ！　ジュリジュリジュリッ！　ジュ、ジュルッ、ヌル！
愛液を得てヌメる肉指ブラシで何度も擦られる中、突起のひとつひとつが振動し、強烈な官能刺激を与えてくる。
「あああぁッ!!　だ、ダメだやめろぉおおぉッ！　あ、アッ！　か、絡む……ンあぁぁこ、擦るなぁあぁぁッ!!」
手の動きがどんどんこちらのツボを把握し、親指で頂上豆を嬲りながら、中指と薬指で膣をほじられる。
「くふぅッ!?　ひ、卑怯者めぇッ！　く、くそぉ……くそおぉッ!!」
敏感な場所を同時に責められ、豊乳や美尻、太腿に腹筋、髪の毛までもが愉悦に震え続ける。
どんなに拒もうとしても甘い声が漏れてしまい、身体に与えられる快感をごまかしきれない。
（こ、このままでは……い、イッてしまうぅ……そ、それだけはッ……）
誇り高き騎士として、懸命に堪えようと精いっぱい身体に力を込める。
「んンッ!?　あぁう、後ろがほじ……あ、あうぅッ！　つ、突かれ……」
だが、それを見逃さなかったのは肛門をひたすら舐めてくる舌長男。
「んン……セリーヌの尻、美味いぞ」
収縮を繰り返し、力が入ろうとする後穴を舌で解されて、尻窪みに浮かんだ汗さえも丁寧に舐め取られた。
「ほら、もうイきそうになっているのではなくて？　気持ちよさそうな顔や身体が、鏡に映ってますわよ」

エバに言われ、思わず顔を向けてしまった。そこには手鏡に向かって大股開きになり、責められる自分。
（あぁぁ、あんなに指が出入りして……お尻の穴を舐められているッ）
イボ状の指が女道に出入りすれば溢れ出した愛液を掻き出され、尻穴を舐められる度に身体をはねさせて顔を蕩かせてしまっている。
「イボイボ指ちんぽと、恥ずかしい尻穴舐め舐めされて感じてるなんて……ど淫乱騎士にも程がありますわぁ」
「うるさいぃッ！　こ、これはお前たちが……アッ!?　だ、ダメそんな速くしちゃ、あ、あッ、アッ!!」
否定の言葉を打ち消すように、男たちの指と舌使いが激しくなる。
「はぁ、はぁ。セリーヌのまんこ、ドロドロで熱いぞッ！　淫乱騎士め」
「くっそエロい尻穴してやがるッ。俺の舌がそんなにいいのか!?」
興奮する暴漢たちに屈辱的な言葉を浴びせられるが、心の中では嫌悪感と幸福感が混じっていた。
「ち、ちがンんぅ！　あぁあぁぁ!!」
どんなに我慢しても、今までの責めに耐え兼ねた身体は絶頂を止める事など出来る訳がなく、股の奥から疼きが這い上がってくる。
「ほらイけ、イけよセリーヌッ！」
「ケツの穴ほじられて、イけッ！」
教徒たちは自分ひとりだけで果てさせようと、より一層激しく責め始める。
男たちが浮かばせる汗の量よりも、快感で火照るセリーヌのほうが格段に滲んで肌を光らせ、粘液とともに飛び散らせる。
「ひゃあああぁッ!?　あぁぁゆ、指そんな上ばっかり、ンんんぅッ！　舌を穴に入れ……はぁぁあぁッ!!」
イボ状指は恥裂の突起と膣内の上部を激しくブラッシングし、触手舌は解した肛門に侵入して暴れ回る。
（あぁあわ、私のアソコが、あんなに犯されてイきそうに……だ、ダメ……見ちゃダメッ！）
鏡越しに自分の股を見ていると羞恥心に苛まれ、目を閉じて耐え抜こうとするが逆効果。身体に感じる刺激が鮮明になり、最後が早まる。
「ちなみに、今この鏡で貴方の恥ずかしい姿を記憶しておりますのよ……フフフ、さぁてこの姿を誰に見せましょうか……フィオナ、とか？」
「!?」
陵辱されて果てるこの姿を、親友に見られてしまう。
「だ、ダメぇ見せないでくれ！　んあぁぁッ！　た、頼むぅ」
「あら、だったら……イかなければいいのではなくて、セリーヌ？」
「そ、そん、なぁ……んぅ、ふぅー、ふぅーッ、あ、ン、ンッくうぅぅ」
渾身の力を振り絞り、我慢するが、
――グジュッ！　ヌブ！　ズブッ！
――ペチャペチャ、ジュロロォッ！
それもほんの一瞬。性感帯に押しつける指と舌の強さを表した、卑猥極ま

りない淫音と同じく、セリーヌの悲鳴が拷問部屋に響く。
「ひゃあああッ!! だ、ダメだイッてしまうぅ! ああぁみ、見られるッ、フィオナに私、が、ああああぁあ!!」
堅牢な意志を溶かし、絶頂を剥き出しにする為に、やむ事のない指と舌の責め。背中に絶頂感が駆け上がり、強張って疼きが弾ける。
(い、イクぅッ!! 指と舌だけで、我慢できずにイッてしまうぅぅ!!)
——ひきゅんッ! ぴく、ぴくッ!
股の痺れが一気に拡散し、全身に届く振動。指先や口元も激しく痙攣し、大きな乳房や尻肉が震え続ける。
「あぁぁあ、あッ、あぁぁそ、そんなぁ……い、イッてしまった……ア!?」
フィオナに見られるという絶望と、痺れから解放された心地よさが入り混じり切なくなっていた中、教徒たちはまだ執拗に弄り続ける。
「あら、誰が一度イッただけで許してあげると言いましたか?」
エバの意地の悪い笑顔を見る余裕はセリーヌにはない。達して気が緩んでいた身体が直ぐ様ヒクつき、四肢が絶頂に向けて強張り始める。
「んあぁぁ!! や、やめろぉ! んンんあぁ! あぅッ!? な、何かが、出てしまう、あ、や、やめてえぇぇ!!」
これ以上、卑猥な姿を鏡に記録されたくない。二度目の解放が迫るのを我慢しようとする中、下腹部から何かが込み上げてきた。
(ま、まさかッ!? そ、そんなダメ! だ、出しちゃ……感じて吹いちゃぅ)
陵辱されて果てた上に、潮まで吹かされてしまう。耐えようとしても、やまない責めにあらがえず、太腿とワレメを小刻みに痙攣させて、
「ひぅッ!? あぁぁぁぁあダメぇ!!」
——プ、プシャアアァァァ!
「あらまぁ! まさか潮を吹いてしまうなんて……いやらしい匂い……本当にはしたない淫乱騎士ですわね」
イきながら噴出した液を、宙から床に向かってぶちまけて、漂う牝香もしっかりと鏡に記憶されそうだった。
「ん、ンッ! あぁぁそ、そんなモノを……舐めるなぁ……くぅッ」
そんな最中でさえ恥裂に溢れた液をイボ指男が集め、それを舌長男に舐め取られて羞恥を与えられる。
「ふぅー……うぅー……このような屈辱を味わわせて……ただじゃおかないからなぁお前たち、エバぁ……はぁー」
息を整え、精いっぱい強がって睨む。
「蕩けた牝顔で言われても説得力がありませんわ……それに、それくらいで恥を感じるなんて……ンッ」
鏡をしまった卑猥な聖女はおもむろに己の下腹部を一撫でし、ピクッと震えて妖しいくぐもり声を漏らした。
「これからする事に比べれば、序の口でしてよ……はぁ……さぁ、準備が出来たドロドロまんこ、私のでたっぷり苛めてあげますわ」
セリーヌは、相手の着ている白ドレスの短い前スカートが、勝手に捲れ上がるのに気付く。
「! ……な、何故それが……」
そこから覗いたのは、下着の上部から顔を出して熱く脈打つ男の一物。
剣の柄よりも長くて太く、反り返って物欲しそうに昂っている。
「忘れまして? 私は淫祇邪教の一員ですのよ。生やす事も自由自在」
浮いた身体を移動させられ、台の脇に美尻がずり落ちそうなほどの位置で、仰向けで寝かせられた。
エバは大股開きの股間へと、立ったまま割り込む。
「さぁ、焦らすのはお終い……今から私のギンギンちんぽで、ヌレヌレまんこ、沢山ズボズボしてあげますわぁ」
吊り目を細める興奮聖女は、生えた勃起の竿を肉唇に当ててくる。
「んぅッ!? はぁあ、熱ぃ……」
三日月型に反るソレで秘部を擦られると、あまりの熱量と硬度に身震いした。強引に快感を教え込まれた膣穴が窄まり、蜜を溢れさせて期待に潤む。
「あら? ……本当に私の勃起ちんぽを欲しがってるのではなくて?」
「!! ち、違ッ……そんな、事……」
事実故に、恥裂の愛液を竿に塗るエバに反論する事もまともに出来ない。
(ま、また犯されてしまうんだ……)
セリーヌは過去に受けた数々の陵辱の愉悦を思い出し、生唾を飲む。
(あぁ、す、すごくビクビクして……欲しがっちゃダメなのにぃッ)
それに何故か、一物は別の生き物の如くしきりにヒクついている為、触れる度もどかしい摩擦を感じてしまう。
「これだけ濡れてますものね……一気に奥まで……ぁ、狭いですわぁ」
淫らな教徒ふたりに嬲られ、愛液塗れの女穴に、肉剣の切っ先がめり込む。
「そんな……い、入れるなッ! い、今入れられたら……」
達してしまう。絶頂したばかりで昂った身体に、打ち込まれては。
——ジュブッ! ジュブブブゥ〜〜〜〜……ゴッチュンッ!!
「だ、ダメぇッえぇぇあああぁああ〜〜ひゃうぅぅッ!?」
狭い道内を太い竿が拡張してヌメり進み、特に亀頭のエラが肉襞をジュルジュルと擦る一瞬一瞬が、電流快感となって身体に流れ、四肢がはねる。
「あ、アッ、ダメ……くるぅ」
愉悦を否定する声が震え、先端が奥に到達した高刺激をごまかそうとしても、背中から一気に昇ってくる。
(あぁぁさ、さっきイッたばかりなのに……エバに、エバにイかされる!!)
——ヒクヒクッ! ヒクッ、ヒク!
「んはぁッ……イきましたわねセリーヌ……私のおちんぽで犯されて、淫乱まんこ、ビクビクッてなってますわ」
根元まで入れ込まれた肉棒を、絶頂の反動で締めつけるのを感じ取ったエバは、心地よさそうに身震いする。
「い、イッてな、いぃ……イッてぇなんか……はぁ……はぁ〜」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/